

義久公  
 義弘公  
 家久公  
 慶長十三年自正月  
 至八月

後編  
 舊記雜錄  
 卷六十二

『朱カキ』  
 『慶長十三年戊申維新公加治木御日記』

正月朔日己丑曇

- 一 藤次郎殿江削物ニ而御三献、并吸物ニ而御酒相伴、川上四郎兵衛尉・新納李右衛門入道、
- 一 鹿兒嶋方年頭御礼使、村田刑部少輔被參候、御太刀一腰・御馬疋足御進上、但藤次郎殿御請取、御使江削物ニ而御三献、吸物ニ而御酒被進候、
- 一 平松・吉田・山田衆中出仕、藤次郎殿御覽、何も御酒被賜候、

御樽錢進上之事

- 一 五百文 川上四郎兵衛尉 一 五百文 本田源右衛門尉
- 一 貳百文 新納李右衛門入道 一 五百文 川上久右衛門尉
- 一 五百文 松岡市右衛門尉 一 百五十文 川上掃部助
- 一 五百文 河崎九左衛門尉 一 百文 白坂仲右衛門尉
- 一 三百文 猿渡李助 一 貳百文 白坂内膳正
- 一 百文 中山早右衛門入道 一 五百文 福永宮内少輔
- 一 百文 松本利泉入道(和力) 一 百文 比志嶋内藏允
- 一 百文 後醍院喜兵衛尉 一 百文 須田式部少輔
- 一 百文 野村早右衛門尉 一 百文 有川與左衛門尉
- 一 百文 高藤權右衛門尉 一 三百文 日置寛左衛門尉
- 一 奥州様方御使、勝目志摩助被參候、但  
 惟新様御氣色、今日者如何御座候哉之儀也、
- 一 奥州様方御使、勝目志摩助被參候、但  
 惟新様御氣色如何之儀、被仰進候、
- 一 住吉大明神元日御祭礼之御酒瓶、貳對進上、但座主坊御取次南郷寛右衛門、
- 一 奥州様江御使、羽嶋藏人被參候、
- 一 明日平松江御越之儀、先々可被成御延引之事、
- 一 惟新様御氣色、然々無御座之事、
- 一 白濱七介・伊地知彦右衛門・葛西茂右衛門・伊地々主計介・木佐貫四郎右衛門、年頭爲御礼儀被參候、御酒

被賜候、

正月三日辛卯晴

一 龍伯様方御使、白濱覚右衛門被參候、 惟新様御氣色

一本田助左衛門尉年頭御礼トノ參上、御酒被賜候、

如何御座候哉之、御取次本田源右衛門、

一 伊東清左衛門被參候、

一 紹益老より年頭御礼トノ、使者鈴木猪之介被參候、

一 川上武藏守年頭御礼トノ被參候、御振舞有之、相伴川

一 奥州様江年頭御礼御使比志嶋内記殿被參候、御太刀一

崎九左衛門、

腰・御馬一疋御進上、

一 龍伯様方御礼儀、御使阿多甚左衛門、御太刀一腰・御

一 龍伯様江年頭御使、南郷弓八被參候、但御太刀一腰・

馬一疋、御使者へ御三献并吸物ニ而御酒、

御馬一疋御進上、

一 阿多掃部助入道・中存坊・大善坊、年頭之御礼ニ被參

一 帖佐・蒲生之衆中出仕有、御酒被賜候、

候、

一 山伏衆出仕有之、御酒被賜候、

一年頭御礼被申上衆、山口五郎兵衛尉・生田小兵衛尉・

一 奥州様より御使、末廣甚兵衛尉被參候、明日平松江御

有馬次右衛門・白濱次郎左衛門・老岐少左衛門・鹿嶋

越可有之儀、被仰候、

喜兵衛尉・猿渡加右衛門・隈岡与兵衛尉・飯牟礼權右

一 龍伯様江御使、曾木弥兵衛尉被參候、

衛門、已上、

一 鉄炮臺木之事、

一 惟新様御養性之儀ニ付、 奥州様方被仰付、鎌田四郎

一 垣京都江水煮料理葉流候事、

左衛門・瑞泉被參候、

一 國府江御使、赤塚勘解由次官被參候、

一年頭御礼被申上衆、町田弥兵衛尉・森喜右衛門・大村

一 鹿兒嶋江御使、羽嶋藏人被參候、

平藏・黒田加兵衛尉・加藤惣兵衛尉、已上、

一 中紙巻束進上、但年頭御祝儀、 友賢

一大緒一筋進上、<sup>(4)</sup>畫師利兵衛尉、從旧冬罷下り候由被申

一 百梅窪平内左衛門・伊勢小内記、年頭之御礼トノ被參

候、 上候、 一 阿多新介年頭御礼ニ被參候、

一本田与兵衛尉・有川七左衛門・蒲地弓右衛門・國分左京亮・白坂式部少輔・國分拾右衛門、御年頭御礼被申上候、何茂御酒被賜候、

一年頭被申上人衆、新納四郎右衛門・八木新左衛門・大迫平左衛門・曾木次郎左衛門・坂本平右衛門、何茂御酒被賜候、

一伊十院肥前入道<sup>〆</sup>年頭御礼トノ、使者弓削内藏殿被參候、

一山田越前入道年頭御礼トノ參上、但鳥目百疋進上、奥

江被參候、

一敷祢中務少輔年頭御礼トノ參上、<sup>(袂)</sup>拵着ニ而御酒、

一川上左京亮年頭御礼トノ參上、御酒被賜候、

一談儀所江年頭御礼トノ、御使本田小源五被參候、

一御祈念法花經修行之事、

一小城權現座主屋敷之事、伊勢兵部少輔江被仰候

事、

一成正院江年頭御礼トノ、御使本田小源五被參候、

一高野山江御使僧トノ、可被上之事、

一右打立之時、肝煎衆同心之事、

一伊勢長安出仕、但瓶子酒一双・鯛一掛進上、

一奥州様御來光、但御樽三荷・折三合御進上、奥ニ而御寄合有ニ付、御供衆江御振舞有、

一比志嶋紀伊守殿參上、御樽錢百疋進上、

一市來八左衛門被參候、瓶子酒一双・三日籠進上、

一茶碗一ツ<sup>太田飛騨守殿<sup>〆</sup>ニ參候内一ツ也</sup>、奥州様江被進候、

正月初四日壬辰晴

一真言宗衆年頭之御礼之事、但進上物、

一中紙式束 般若寺 一同耆束 增長院

一同耆束 座主坊<sup>住吉</sup> 一同耆束 神守院

一同耆束 五月院 一同耆束 威徳院

一同耆束 宝勝院 一同耆束 持宝院

一同耆束 醫王院 一同耆束 藥師院

一同耆束 若宮坊 一扇子三本 空性坊

一同三本 源昌坊 一同式本 降智院

一同式本 講演坊 一同式本 堯識坊

一同二本 幸福寺

一新正八幡之御祭礼之御酒瓶子一双進上、增長院、

一上井神五郎被參候、

一瓶子一對進上、  
岩鏡大明神之 祝子

一瓶子一對進上、  
黒嶋大明神之 祝子

一市來八左衛門上落ニ付、被仰上せ條々、

一時繪屋彦七江御書一通被遣候、

一銀子壹貫貳百目、愛岩山江大百味料也、

一中紙壹束進上、福永弥兵衛尉年頭御礼、

一銀子百廿目、愛岩山江中百味料也、但

一大膳亮殿年頭御礼トノ參上、御樽壹荷・三目籠進上、

惟新様旧冬御煩時分、御料様御立願成就也、

吸物ニ而御酒、但藤次郎殿御相伴、

一銀子百目ハ人參求代、但塩屋孫右衛門へ被遣候、

一國分五右衛門・土持大炊左衛門、年頭御礼トノ被參候、

一銀子壹枚并御書者、北野江千句料、但新納五郎

一三原次郎左衛門・鎌田左京亮・税所弥右衛門・堅山民

右衛門へ被遣候、

部左衛門・川野猪右衛門・東郷十左衛門、年頭御礼ト

一銀子百目・御文一通、但吉道丹波守へ御詠物代也、

ノ被參候、

一銀子貳十目ハ吉道丹波守へ被遣候、

一吉利左衛門・新納市右衛門・築瀬平右衛門・奈良原

一本多上野守殿江御書并襦子式瑞進上、但御書者

喜左衛門・荒武寛右衛門・野元与兵衛尉・松方伊賀守

奥州様・惟新様御連書也、

・永後坊・石神源兵衛・平田吉左衛門・木脇三右衛門、

一掛繪一幅被成御上せ候、

年頭御礼トノ被參候、

一山口駿河守殿江御書一通被進候、

一北郷加賀守殿方年頭御礼トノ、川野弥左衛門被參候、

一友枕老江御書一通被遣候、

一又四郎殿より年頭御礼トノ、使町田平左衛門被參候、

一道与老江御書一通被遣候、

一加久藤之衆中方年頭御礼トノ、桑原新藤・萩原喜兵衛

一宗可老江御書壹通被遣候、

被參候、

一菊屋宗可老江御書一通被遣候、

一禪家衆年頭之御礼トノ參上、但進上物之事、

一銀子貳百目、但金薄并朱之代、道与へ被遣候、

一茶一對 繪禪寺 一茶一對 龜泉院

一銀子拾匁、但白炭之代、道与へ被遣候、

一茶一對 天福寺 一茶一對 心岳寺

一茶一對 興化寺 一茶一對 大樹院

一茶一對 雲門寺 一茶一對 陽春院

一茶一對 永興寺 一茶一對 津友寺

一茶一對 吉祥寺 一茶一對 東江庵

一茶一對 泰撰書記 一茶一對 祖有書記

一御札并茶一對 高麗坊主

右、総禪寺・亀泉院・陽春院・吉祥寺・大樹院・高麗坊主江、御菓子ニ而天目承酒御寄會、餘者御返酒

被賜候、

願成寺年頭御礼トノ參上、中紙耆束進上、

但菓子ニ而天目承酒御寄合有、

一伊地々平三郎年頭御礼トノ、中馬九郎左衛門被參候、

一木脇若狭入道・野村藏人、年頭御礼トノ被參候、

一高橋右近大夫殿方、飛脚到來、即御返書有之、

一大野左近將監・伊十院市右衛門・野村才右衛門・大山

六右衛門・稻津伊豆・中嶋四郎左衛門・徳永助右衛門

・森内膳正・平田清兵衛・相良五左衛門・弟子丸治介

・鎌田右兵衛尉、年頭之御礼トノ被參候、

一鎌田又七郎年頭御礼トノ被參候、御樽一荷・鯛一掛進

上、

一横山惣左衛門・山下吉左衛門・曾木三右衛門・鎌田城

之介・鎌田利右衛門、年頭之御礼トノ被參候、

一大井七右衛門・高原對馬丞・前田弥右衛門・富山左近

將監・安田源太、年頭御礼トノ被參候、

一皿良善助・小嶋三左衛門・中嶋主水佐・田中市左衛門

年頭御礼トノ被參候、

一田中伊豆守・平田安房介、年頭御礼トノ被參候、

一惟新様去年御煩時分之御立願成就、

一霧嶋山江一七日參籠、

願主 限本小監物

一大久坊・伊地知勝八・大山稻介・三原七左衛門・市成

左介・肥後七郎・津留根兵衛尉・平田民部左衛門、年

頭御礼トノ被參候、

一山田民部少輔・下村主水正、年頭御礼トノ 被參候、

御酒被給候、

一川上左京亮年頭御礼トノ被參候、

一霧嶋山ノ座主坊年頭御礼トノ參上、御樽一荷・五ツ目

籠進上、

一惟新様去年御煩立願成就、

一霧嶋大權現江臨時祭有之、御花かう進上、座主坊  
願主  
一中村勘左衛門・肥後栄右衛門・橋口七郎左衛門・豎山

安右衛門・鎌田八兵衛、年頭御礼トノ被參候、

一 宝泉坊・常圓坊・瀧聞喜太郎・山鹿弥介・肥後与五郎

・安意、年頭御礼トノ被參候、

一 又吉殿之御袋様方年頭御礼トノ、使者加治木少兵衛尉

被參候、

一 三嶋掃部助・西田對馬守・銀屋源兵衛尉・小嶋勝介・

堀弥右衛門・二皆堂城之介・國分平藏・日高常珍・織

屋彦岐入道・池田左吉、年頭御礼トノ被參候、

一 川上慰政年頭御礼トノ參上、吸物ニ而御酒、相伴藤次

郎殿、

一 川上治兵衛尉・村田刑部少輔・有川源左衛門・本田弥

六、年頭之御礼トノ被參候、

一 本田吉藏・大迫内藏介・森山助太郎・安藤源左衛門、

年頭之御礼トノ伺候仕候、

一 豊千代年頭御礼トノ被參候、御樽一荷進上、

一 妙圓寺年頭御礼參上、修正御礼并茶一對進上、菓子ニ

テ天目承酒御寄會有、

一 金剛寺江御使上井神三郎、但此中被成御祈念候御礼也、

一 國府江御使、上井神三郎被參候、

正月六日甲午晴

一 牧田勘解由次官・久保江左衛門・伊東市左衛門・須田  
家西、年頭御礼トノ被參候、

一 上野隼人佐・海老原平内、年頭御礼トノ被參候、

一 正興寺參上、汁ニ而御酒、相伴藤次郎殿、

一 阿蘇玄与年頭御礼トノ被參候、但右同座ニ而御酒、

一 竹崎弥六・上井甚七・税所休心・神村弥左衛門・村松

清九郎・日高給作・賀阿珍・猿渡新介・林藤七・川野

次郎五郎・相良藤次郎・伊地々利兵衛・新納孫右衛門

・有川仲右衛門・瀧聞源右衛門・友野七郎、年頭御礼

トノ被參候、

一 奥州様方平松衆中江御酒被下候、

一 大佛師年頭御礼トノ被參候、弓弦猪筋進上、

一 枕山大藏允年頭御礼トノ被參候、

一 福昌寺隱居方年頭御礼トノ、使僧被參候、但茶一對進

上、

一 平田二兵衛尉・貴嶋仲兵衛尉・宇田小左衛門・中野新

吉・伊地々四郎兵衛尉・白濱成右衛門、年頭御礼トノ

被參候、

一 御祈念星供成就有之、

一 龍伯様方御使、和田權介被參候、

正月七日乙未晴

一御炊大夫被參候、御樽式荷進上、

一中紙卷束進上、

伊地知筑後入道

一高城兼中ノ年頭御礼トノ、中紙一束進上、使桶元主水

佐・杉本右京亮、

一惟新様去年御煩時分、立願成就有之、

一八幡新田宮江一千度參

願主

中郷衆中ノ使、鳴海弥

四郎、

一大脇老岐守・鎌田丹波入道・稻垣對馬入道・溝口備前  
守、年頭御礼トノ被參候、

一龍伯様ノ御使、川村八左衛門被參候、

一東郷藤兵衛尉・白濱覺左衛門被參候、

一甘葛一筒進上、

境田五兵衛尉

一伊勢兵部少輔殿ノ書狀到來、但南郷覺左衛門ニ而、

一伊十院加左衛門・高野傳兵衛・椎原与右衛門・神宮司

筑前・皿良彦兵衛、年頭御礼トノ被參候、

一奥州様江御使、伊東新四郎被參候、

一此中、御夫婦爲被成御越、御礼之事、

一出水江ヤクシヤ可被召移之夏、

一龍伯様ヨリ御使、土持左馬權頭殿參上、但 惟新様去

年御煩ニ付、御祈念之御礼守・配帙持參也、

一奥州様ノ御使、栄俊坊被參候、様子者 惟新様御氣色

如何御座候哉之儀也、

一浄光明寺年頭御礼、茶一對進上、汁ニ而御酒參候、

一比志嶋紀州參上、御振舞有、相伴一甫、

正月八日丙申晴

一奥州様江御使、春成甚左衛門被參候、但鮎被進候、

一野間孫兵衛尉・大迫主計助・鮫嶋大藏助・三嶋小平藏

・兒玉五右衛門・上原源右衛門・浦川金左衛門、年頭  
御礼トノ被參候、

一奥州様江御使、後醍院李允被參候、

一本田与左衛門入道・北原治部右衛門・上井神六・大坊

年頭御礼トノ被參候、

一平田七左衛門・武村孫左衛門、年頭御礼トノ被參候、

一長善寺・幼生院・宗香院、年頭御礼トノ參上、但汁ニ

而天目承酒參候、

一惟新様御煩時分之立願成就之事、

一正八幡江御供被成御上ケニ付、御酒瓶子一双、

一桑幡左馬助ノ進上、但願主又四郎殿、

一菱刈善次郎・川野弓兵衛・相良孫兵衛、年頭御礼ト

被參候、

一喜入大炊助年頭御礼トノ參上、御樽一荷進上、

一平田久兵衛尉年頭御礼、御樽一荷進上、

一奈須主膳正年頭御礼トノ參上、羚羊四肢進上候、

一村田雅樂入道・相良勘解由次官・指宿九郎次郎・赤崎

弥平兵衛尉・指宿九郎左衛門・川上彦左衛門・藤山茂

介、年頭御礼トノ被參候、

一惟新様之御祈念、鹿兒嶋ニ而護摩供有、卷數御礼御進

上、御使伊十院藏人・鮫嶋筑右衛門尉、

一廣濟寺年頭御礼トノ參上、茶一對進上、

一栗野衆中ノ年頭御礼トノ、野本越中守被參候、

一河内守之御内儀ヨリ年頭御礼トノ、使新納越前守被參

候、御樽一荷・鯛一掛御進上、

一五代勝左衛門年頭御礼トノ被參候、中紙式東進上、

一白坂佐渡入道・川上彦十郎、年頭御礼トノ被參候、

正月九日丁酉晴

一北郷加賀守殿年頭御礼トノ參上、御樽式荷・鯛三掛進

上、但吸物ニテ御酒、相伴本田源右衛門、

一不断光院年頭御礼トノ參上、茶一對進上、但挾肴ニ而

御酒被賜候、

一鎌田源六年頭御礼トノ被參候、

一入來院石見守殿年頭御礼トノ參上候、但御樽式荷・鯛

一掛進上、

一城戸仲次郎殿ヨリ年頭御礼トノ、使者西藤新左衛門被

參候、

一篠原源太夫年頭御礼トノ被參候、但御祭之御酒瓶子一

双・五目籠進上、

一惟新様去年御煩時分立願之事、

一大汝八幡江神飾、

一大汝八幡江社衆五人、其日參詣、

一五社江御神樂、願主篠原源太夫、

一龍伯様より御使、鎌田清兵衛被參候、來十二日平松江

御越可有之儀被仰候、

一奥州様御光儀有之、

一瓶子一對進上、川崎九左衛門、

一柗山權左衛門殿、年頭御礼トノ參上、但進上、

一鳥目百疋、

一中紙式東進上 御料様江

一穎娃長左衛門・税所清兵衛尉・甕將右衛門尉・柗山藤

太郎、年頭御礼トノ被參候、

一内小野寺年頭御礼トノ被參候、

一伊十院宮内少輔垣爲被召直ニ付被參候、

一高山衆中ノ年頭御礼トノ、市來給兵衛尉被參候、

一高崇寺年頭御礼トノ參上、茶一對進上候、挾肴ニ而御酒被給候、

一伊集院肥前入道より年頭御礼トノ、使者肥後宮内少輔被參候、

一龍伯様江御使、南郷治部左衛門被參候、

一北郷掃部助年頭御礼トノ、御樽一荷・鯛一掛進上、

正月十日戊戌晴

一肝付越前守殿ノ年頭御礼トノ、使者新納孫左衛門被參候、

一執印吉左衛門ノ年頭御礼、使僧被參候、

一日高傳吉年頭御礼トノ被參候、鳥目式百疋進上、

一日高藤右衛門年頭御礼トノ被參候、御樽錢貳百疋進上、

一濱田民部左衛門年頭御礼トノ被參候、

一木原七郎左衛門年頭御礼トノ被參候、蜜柑一折進上、

一相良左兵衛佐殿より年頭使者、佐牟田少右衛門越着候、

但進上、

一御太刀一腰・御馬一疋并書狀壱通、

一御太刀一腰・御馬一疋并 奥州様江

使者挾肴ニ而御酒、 奥州様御寄會有、

御振舞、相伴川上四郎兵衛尉、

一美代九左衛門・井尻勝右衛門、年頭御礼トノ被參候、

一惟新様去年御煩ニ付、御祈念仁王經百部之御礼、

一善哉坊ノ進上、使井尻次吉、

一龍雲寺年頭御礼トノ參上、茶一對進上、但菓子ニ而天

目承酒、相伴本田源右衛門、

一千手院年頭御礼トノ參上、汁ニ而相伴川上久右衛門、

一木屋彦左衛門年頭御礼トノ被參候、瓶酒一對進上、

一平田太郎左衛門年頭御礼、但御樽式荷・五目籠進上、

挾肴ニ而御酒、相伴川上大炊助、

一入來院衆中ノ年頭御礼トノ、肥後孫四郎被參候、御樽

一荷・鯛一掛進上、

一不動寺年頭御礼、但中紙一束進上、

一御旧例轉讀大般若經一部有之、

一徳元寺年頭御礼トノ參上、茶一對進上、

一惟新様去年御煩時分之立願成就之事、

一金峰山大權現江臨時祭 願主相眞坊、鳥目百疋被

給候、

一 黒木宇右衛門・渡邊佐兵衛・荒田助右衛門・兒玉五太  
右衛門・長濱文七、年頭御礼トノ被參候、

一 伊東修理太夫殿<sup>方</sup>年頭御礼、并旧冬以來 惟新様御煩

御見舞トノ、使者伊東助右衛門殿越着、御振舞、相伴

川上久右衛門・川崎九左衛門、使者江島目式百疋被遣

候、御使波多彦八、

一 伊東修理太夫殿<sup>方</sup>、奥州様江年頭御礼、但御太刀一

腰・御馬一疋進上、挾肴御酒御寄會有、

一 南林寺・笑岳寺年頭御礼、茶一對宛進上、但汁ニ而御

酒、相伴川上掃部介、

一 大聖院年頭御礼トノ被參候、

一 御臺ヨリ年頭御礼トノ、使長崎織部助被參候、御樽一

荷・三目籠進上、

一 伊十院半右衛門・比志嶋宮内少輔・年頭御礼トノ被參

候、

一 龍伯様より御使、野村喜介被參候、

一 福昌寺・龍盛院、年頭御礼トノ茶一對ツ、進上、

一 御鷹狩初、吉野ニ而有之候、

一 赤塚三右衛門・野田八郎左衛門・加藤七左衛門、年頭

御礼トノ被參候、

一 北郷次郎殿之留主居<sup>方</sup>年頭御礼トノ、使北郷喜兵衛被  
參候、

一 井尻常陸坊・同兵右衛門、年頭御礼トノ被參候、

一 談議所<sup>方</sup>年頭御礼トノ使僧、瓶子一双・三目籠進上、

一 成正院年頭御礼トノ、御樽一荷・三目籠進上、

一 國府江御使、猿渡全助被參候、但明日 龍伯様可有御

越、御悦也、

一 寺沢志摩守殿ヨリ使者、遠山六兵衛殿・台庵越着、但

伊勢平左衛門出合之儀、爲被聞召分御礼也、

一 書狀并御酒大樽六丁、

一 皿拾五、内サ、イ皿五ツ、三角皿五ツ、角皿五ツ、

一 御太刀一腰・馬代銀子三枚進上、六兵衛殿、

一 御酒大樽式丁進上、

右、兩使江御振舞有、相伴柘山權左衛門殿・

川上四郎兵衛尉、但六兵衛殿江襦子三端、台

庵老江襦子老端被遣候、

一 寺沢志摩守殿<sup>方</sup>、右之趣鹿兒嶋へも同前ニ被仰候、但

兩使へ平松ニ而 奥州様御參會有、御酒御寄會有、

正月十二日庚子晴

一般若寺脇坊衆年頭御礼トノ參上候、

一中紙一束進上、普門坊、一雜紙一束進上、実相坊、

一雜紙一束進上、南善坊、一雜紙一束進上、勢藏坊、

一惟新様去年御煩之御祈念、愛岩秘法五百座成就之御札

守進上、出水衆普門坊、

一柏原左近將監・比志嶋彦太郎・田代刑部少輔・伊地ゞ

治左衛門・比志嶋勝次郎、年頭御礼ニ被參候、

一日新寺年頭御礼ニ參上、但茶一對進上候、

一竹内惣右衛門年頭御礼トノ、御樽一荷・鯛一掛進上、

一半天連年頭御礼トノ被參候、

一呂宋紙四拾四枚并呂宋蠟燭四挺進上、

一御樽壹丁并南蛮菓子一折進上、通司シモン、

一伊十院肥前入道方年頭御礼トノ、伊十院小右衛門被參

候、御樽錢百疋・鴨一番進上、

一惟新様御煩之儀ニ付、加世田之道場方使僧被參候、

一相良左兵衛佐殿江年頭御礼、御使トノ川上久右衛門被

差越候、

但進物之事一御太刀・馬代銀子式枚并書狀一通、

一樽錢三百疋、相良清兵衛殿江、

一惟新様御煩ニ付、御祈念飯綱法一千座之驗規并御札進

上、  
中俣右近將監

一泰平寺方年頭御礼トノ使僧被參候、

一般若寺別當坊江被進上數寄道具之事、

一黒折敷五枚、足打黒椀五膳、アカリコツホ皿五ツ、

一寺沢志摩守殿方之使者江、御音信之事、

一樽式荷・折一ツ 遠山六兵衛殿江、

一樽壹荷・折一ツ 台庵老江、

京泊一寺田良右衛門年頭御礼トノ被參候、中紙一束進上、

一龍伯様年頭御礼トノ御光儀、御進上物之度、

一御樽四荷・折三合、猪一丸進上、

一御供衆江御振舞有之、

一御舊例護摩供開白有川闍梨 般若寺別當坊

一妙圓寺・雪窓院、年頭御礼トノ參上、茶一對宛進上、

一酒勾新右衛門・同志厂助、年頭御礼トノ被參候、

一惟新様御煩御祈念、愛岩法一千座之開白有、行者宝眞

坊・明星坊・威光坊、

一又四郎殿年頭御礼トノ參上、御樽一荷・入目籠御進上、

但奥座ニテ御寄會有、

正月十三日辛丑雨

一紫尾山之座主坊年頭御礼トノ被參候、

一亀山又兵衛殿年頭御禮參上候、

一 佐多又太郎殿年頭御礼參上候、  
一 阿田大膳亮年頭御礼參上候、

右三人江 袂肴ニ而御酒、相伴川上四郎兵衛尉、  
一 有川備後守年頭御礼トノ被參候、瓶子式對・串柿一連  
進上、

一 龍伯様江平松衆中御樽進上、何茂御前ニ而御酒被下候、  
一 法花嶽寺年頭御禮、但修正之御札并茶一對進上、  
一 惟新様去年御煩ニ付、御祈念之事、

一 轉讀大般若經一部  
一 首椽殿神呪一百座  
一 北斗延命經一千卷

右御札進上、 法花嶽寺

正月十四日壬寅晴

一 野村市右衛門年頭御礼參上、

一 龍伯様御歸宅被成候、  
宮内  
一 留守・桑幡・澤・最勝寺、年頭御禮トノ參上候、

一 右馬頭殿方年頭御礼、使者伊集院吉右衛門被參候、御  
樽錢三百疋御進上、御取次比志嶋内藏允、但御酒被賜  
候、

一 有川源右衛門年頭御礼トノ被參候、雉式進上、

一 難波七右衛門年頭御礼トノ被參候、筆三對進上、  
一 開聞座主坊年頭御礼トノ參上候、

一 惟新様去年御煩ニ付御祈念、正觀音法三百六十ヶ座修  
行之卷數進上、袂肴ニ而御酒被給候、  
一 寺沢志摩守殿方鹿兒嶋江飛脚到來、去月廿二日亥刻駿  
府屋形火事之儀御注進也、但平松ニ而 奥州様被聞召、  
即御返書有之、

一 妻霧嶋之座主坊、年頭御礼トノ參上候、  
正月十五日癸卯晴

一 奥州様方被仰出條之事、  
一 駿河御普請ニ付、諸國辛勞之儀候処ニ、當國御  
有免之事、付出物被指置候事、

一 御普請之儀、慇懃可相勉之亶、  
一 刀之柄白革ニ而卷間敷亶、  
一 上髮剃間敷事、

一 御番無未進可相勤之事、  
右口達、新納左右衛門入道、

一 平松之衆中出仕、 奥州様御覽有、  
一 伊集院修右衛門・田中源八左衛門・米良縫殿助殿、年  
頭御礼トノ被參候、

一又吉殿年頭御禮、御樽式荷・一折進上、

一大田左京亮・美代主水佐・勝目兵右衛門・関小次郎・

有馬丹波入道・同主馬首、年頭御禮トノ被參候、

一白鳥山之座主坊、年頭御禮トノ參上、御祈念之御札并

中紙式束進上、汁ニ而御酒、

一惟新様御煩之儀ニ付、御祈念供養法廿一ヶ度、護广供

廿一ヶ度、諸神供三ヶ度之卷數、

進上

白鳥山

座主坊

一敷祢仲兵衛・同彦三、年頭御禮トノ參上、御酒被賜候、

一魚屋惣左衛門被參候、但進上、

一間鍋式ツ 一鮭塩引二尺 一千鮭五ツ

一鱒五ツ 一鱒ノ子箱物一ツ 一奈良漬一桶

惣左衛門江御振舞、相伴泉齋、

一源七郎殿方年頭御礼トノ、本田大四郎被參候、御酒被

給候、取次南郷久八、

一成正院上落之儀ニ付參上候、

一大脇内藏助被罷下候、

正月十六日甲辰晴

一仙海八重尾因幡守年頭御礼被參候、

一惟新様去年御煩ニ付、御祈念、醫王善浙供之卷數、

鹿嶋駿河守・伊地、縫殿助方進上、使野崎三次、

一乘院方年頭御禮トノ、使僧被參候、御祈念卷數并中

紙一束進上、

一龍光院年頭御礼ニ參上、但茶一對進上、

一惟新様去年御煩ニ付、立願成就之事、

一諏訪大明神江、 一稻荷大明神

一岩釵大明神 一一宮大明神

一宝現大明神江七日參詣、

願主 明学坊

一秋月長門守殿方年頭御禮トノ、使重松新右衛門殿參着、

御太刀一腰・馬一疋進上、御振舞、并鳥目二百疋被遣

候、相伴川上掃部助、

一境田加左衛門年頭御禮トノ被參候、上井神六年頭御礼

トノ參候、并 惟新様去年御煩ニ付立願、但一万矢奉

射成就之由、上井神六并小村衆中方被申上候、

一惟新様去年御煩ニ付、立願轉讀大般若一部之配帙進上、

小村之真言衆・禪家衆より、

一正國寺年頭御禮并 惟新様去年御煩之時分、立願轉讀

大般若經一部成就之由被申候、挾着ニ而御酒、相伴波

多彦八、

一総持寺年頭御禮ニ參上、挾着ニ而御酒、相伴波多彦八、

一 熊嶽寺年頭御禮、但胡桃一袋并久年母進上、挾肴ニ而御酒、相伴波多彦八、

一 龍伯様ヨリ御使、肝付大右衛門被參候、 惟新様御氣

色、今日如何御座候哉之事、御取次鎌田与兵衛、

平松ニテ  
一 奥州様弓遊ニ御出被成候、

一 龍伯様江御使、長野助七被參候、昨日方御氣色、御使

御座候由、被成御申越候、

正月十七日乙巳雨

一 奥州様被成御歸宅候、

一 西郷老岐守年頭御禮トノ參上候、

一 奥州様方御使、勝目志摩助被參候、

一 今晩者御氣色如何御座候哉之事、

一本ニ為可被成御腰物、切物アリ、御借用之事、

已上、

正月十八日丙午晴

一 宝林坊・阿多美作守・佐土原左近將監、年頭御礼トノ

被參候、

一 惟新様御煩ニ付御祈念、愛岩(君)一千度成就有、行者宝眞

坊・明星坊・威光坊、

一 伊集院肥前入道煩ニ付、御使長野助七飯野へ被遣候、

一 奥州様江御使、上井神三郎參候、先日御越御滞留被成候御礼也、

一 石野田孫左衛門年頭御禮トノ被參候、

一 寺沢志广守殿江年頭御禮トノ御使、北郷甚左衛門尉被

差越候、御太刀一腰・馬代銀三枚并御書一通被進候、

付御書一通台庵老江、

一 荒木拾左衛門殿江御書并肩衝一ツ・御馬一疋駈・焼酒

一 壺被進、但唐津方可被相届由、台庵老へ被成御頼候、

御使北郷甚左衛門付小川与三左衛門、

一 種子嶋左近大夫殿年頭御禮トノ被參候、御太刀一腰・

馬一疋進上、奥座ニテ御寄會有、

一 惟新様去年御煩ニ付立願、仁王經百部讀誦成就之御礼

進上、川内山田衆中方使原田五郎兵衛尉、

一 奥州様方御使、鮫嶋孝左衛門被參候、

一 今日者御氣色如何御座候哉之事、

一 來廿四日可有御越之儀、御延引之事、

一 北郷加賀守當病上洛難成儀ニ付、又吉殿御上洛

可有之支、

一 先日御賜候御馬乘、一段能候事、

一 遠矢下繪入道年頭御礼トノ被參候、

一新納武藏入道年頭御禮トノ參上、但同心衆肥後仲右衛門・中嶋孫左衛門被參候、

一惟新様去年御煩ニ付立願、御日待卅三ヶ度成就之人數、

泉齋・里村織部介・仲永・正玖・中藝・秀齋・守梅・

宗徳、已上、

正月十九日丁未晴

一御舊例護廣供結有之、

一蒔絵屋弓次年頭御礼トノ被參候、御酒被給候、

一龍伯様より御使、泉昌坊被參候、

一今日御氣相如何御座候哉之事、

一當年御茶下之儀、如何御座候哉事、

一奥州様方御使、松坂坊被參候、

一執印吉左衛門・加治木与三、年頭御禮トノ被參候、御

酒被給候、

一疊屋長兵衛御樽錢百疋進上、御酒被給候、

一成願寺年頭御禮、瓶子一双・三目籠并 惟新様之御祈

念薬師之法七十五座修行御札守進上、御酒被賜候、相

伴南郷弓八、

一惟新様去年御煩ニ付立願、

一本門躰内五番神呪二万遍、

一本門常住一躰三寶、

一本門内(イ)施羅尼品三萬遍、

一本妙法華經中一躰三寶、

右、成就之卷數進上、種子嶋左近太夫殿

一惟新様御煩ニ付、御料様方御祈念、觀音經一千卷讀誦

成就、有之、

一藤次郎殿方使、但 惟新様御氣相如何御座候哉之儀也、

正月廿日戊申晴

一大福院実相坊、年頭御禮トノ參上、御酒被賜候、

一保壽院年頭御禮并 惟新様御煩御祈念トノ、仁王經一

百部讀誦成就之御札進上、御酒被賜候、

一年頭御礼被申上衆、本田才右衛門・吉留小左衛門・丸

尾弥六・祇堂院掃部介・松本勝兵衛・川野伊与守・牝

岡早左衛門・池田六左衛門、御酒被給候、

一惟新様御煩ニ付、正八幡宮江三千度參成就之人數、桑

幡源左衛門・牧田勘解由次官・脇本清三郎、但目錄進

上、

川内  
一權執印年頭御禮トノ被參候、御酒被賜候、

一惟新様御煩ニ付、御祈念轉讀大般若經一部之配快進上、

宝現大明神

座主坊、

一御祈念虚空藏法一千座、開白阿闍梨增長院、

一惟新様御氣相如何御座候ニ付、藤次郎殿より使參候、

正月廿一日己酉晴

一奥州様江御使、比志嶋内藏丞被參候、

一龍伯様江本田源右衛門を以、御移所之御禮申上被

成候也、

一鹿兒嶋御普請之事、

一比志嶋紀伊守殿・伊勢兵部少輔殿江、御使比志嶋内藏

丞、但御意之趣、

一御移所之儀被仰候之事、

一猿渡弥七郎出合、福昌寺大樹院江被仰儀ニ付、

川上四郎兵衛可被成相付候事、

一鹿兒嶋御普請ニ付、辛勞被申候事、

一徳永玄番丞・池田九右衛門・川崎内藏允、年頭御禮ト

ノ被參候、

一山田寺年頭御禮トノ被參上、并 惟新様御煩ニ付御祈

念、不動明王秘法一千座修行成就之卷數進上、

一新納江州ヨリ年頭御禮使、田中傳左衛門被參候、御酒

被賜候、

一田邊屋道与乃茶半袋一ツ進上、邊牟木彦兵衛尉殿、

一眞如坊・大久坊、年頭御禮トノ被參候、

一奥州様江御使、國分拾左衛門被參候、但小刀一ツ氏房

作御進上、

一藤次郎殿江御使被參、但 惟新様御氣相如何御座候哉之

儀、

正月廿二日庚戌晴

一龍伯様より御使、伊地ヶ治左衛門被參候、

一加治木之儀被仰越事、

一御鷹之事、

一塩田助之年頭御礼ニ被參、猪肢四ツ進上、

一奈須彈正殿ヨリ年頭御礼トノ、使椎葉勘六被參、熊ノ

い一ツ

一進上使者へ鳥目百疋被遣候、

一蓮長坊・黒田納右衛門・黒田加兵衛・阿蘇新九郎、年

頭御礼トノ被參、御酒被給候、

一奥州様江御使、桂太郎兵衛被參候、但猿渡弥七郎出合

之儀ニ付也、

一藤次郎殿江御使被參、但 惟新様御氣相如何御座候哉之

儀也、

一福昌寺參上、但猿渡弥七郎出合之儀ニ付、大樹院江爲

可被成吳見也、御振舞有、相伴桂太郎兵衛尉・川上四郎兵衛尉、

正月廿三日辛亥雨卯刻雪轟

一平松本屋地御屋敷見者、卜齋江被仰付、案内者伊東五郎兵衛・竹下又右衛門、但様子新納左右衛門入道を以被申上候、

一妙圓寺參上、芳真様御年廻ニ付、法花一千部會可有之御談合也、

一寺山四郎左衛門年頭御禮トノ參上、鶉廿二進上、御酒被給候、

一藤次郎殿ヨリ使被參候、惟新様御煩如何御座候哉之儀也、

一惟新様御快氣ニ付、御廣間ニ而衆中夜遊有之、

一猿渡弥七郎出合ニ付、此中大樹院東堂・津友寺被立退、就夫鹿兒嶋ヨリ御意トシ、福昌寺・桂太郎兵衛尉被差越、吳見ニて被成歸寺候、

正月廿四日壬子雨

一大樹院歸ニ付、福昌寺・桂太郎兵衛尉參上、

一柗山權左衛門殿參上、御振舞、相伴道甫、

一佐多六郎兵衛尉、年頭御禮トノ參上、但唐津焼ツホ五

ツ・ヒラ皿五進上、御酒被給候、

一奥州様明日可有御越儀ニ付、御使伊地知主計助被參候、一念佛寺年頭御礼トノ參上、茶一對進上、

一藤次郎殿方使被參候、惟新様御氣相如何御座候哉之儀也、

正月廿五日癸丑雨

一鹿兒嶋江御使鈴木直左衛門、但御鷹之儀ニ付也、

一正龍寺年頭御禮トノ參上候、但惟新様御煩ニ付、御祈念輪讀大般若經一部之配帙進上、

一奥州様御越、但鹿兒嶋ヨリ御調ニて御寄會有、御内不断衆ニ御振舞被下候、

一一道服一ツ、二皆堂弥六江被下候、

一猿渡弥七郎御成敗被成候、此儀出合之時分、噀人衆被召失候、

正月廿六日甲寅晴

一藤次郎殿方使被上候、惟新様御氣相如何之儀也、

一成正院參上、御樽一荷進上、御酒被進候、相伴本田源右衛門、

一惟新様御煩ニ付、御祈念觀音經一百卷讀誦之御札進上、

百次之衆中方使、二木勝内、

一 藤次郎殿方使被上、但 惟新様御氣相如何御座候哉之儀也、

正月廿七日乙卯晴

一 妙圓寺江御使、須田内膳正被參候、

一 執印吉左衛門方、湯田甚兵衛進退之御任ニ付、使僧參

上候、

一 又吉殿方使東郷弥次郎被參候、但 奥州様方江戸江年

頭御礼之御使被成御當ニ付也、

一 半天連江年頭御礼之御書并米三石被進候、御使伊地、

彦右衛門入道、

一 奥州様江御使本田源右衛門・比志嶋内藏允被參候、

一 惟新様御煩ニ付立願成就之事、

一 王子權現江 神師一座

一 老神大明神江 神師一座

一 奈良田大明神江 神師一座

一 正一位正八幡江 神師一座

一 稻荷大明神江 神師一座

一 奥州様方御使市成左介被參候、

一 雪ニ相當候者之刀、爲御一覽被成御持せ被成候

事、

一 鶉并市成海苔御進上之事、

一 宮原孫四郎年頭御禮ト被參候、腹白魚一掛進上、

御酒被給候、

一 惟新様御煩ニ付御祈念、十一而之法百座ノ御札進上、

(面九)

宗俊坊、

一 宮里式部少輔・竹内吉兵衛尉、御鉄炮細工ニ付被參、

鳥目百疋ツ、被給候、

一 藤次郎殿方使被上、但 惟新様御氣色如何之儀、爲聞

召也、

一 奥州様江御使、本田源右衛門・比志嶋内藏允被參候、

正月廿八日丙辰晴

一 根占右近大夫殿、年頭御礼ニ參上、但御樽式荷・一折

進上、吸物ニテ御酒、相伴川上四郎兵衛尉、

一 大慈寺年頭御禮ニ參上、但懺法卅三座御札并茶一對進

上、

一 龍伯様江御使猿渡左助被參候、 惟新様御氣相中、節

々御念爲被入御禮儀也、

一 藤次郎殿方使被上、但 惟新様御氣色如何御座候哉之

儀也、

正月廿九日丁巳晴

一又吉殿之御袋様方御使、種子田新右衛門被參候、御樽  
一荷・鯛一掛御進上、

一源七郎殿之御袋様方御使、有川弥六右衛門入道被參候、

御氣相如何御座候哉之事、當年御茶詰之事、

一御鉄炮細工ニ付永俊坊被參、鳥目式百疋被給候、

一藤次郎殿方使被上候、但 惟新様御氣相如何御座候哉  
之儀也、

一飯限山別當坊年頭御禮ト被參候、但 惟新様之御祈

念轉讀大般若一部之配帙并修正之牛王進上、挾着ニテ

御酒、相伴新納左右衛門入道、

正月晦日戊午晴

一惟新様御吉書被遊候、

〔加治木御日記終〕

420  
〔十番箱御軸物中〕

〔家久公御譜中〕

尚以駿河御城ニ火事出來仕候、委可申入候へ共、山

口殿可被仰入候条、不具候、以上、

當春御慶目出度申納候、仍 將軍様へ蜜柑式箱進上被成  
候通、山口駿河守殿被仰越候、趣披露仕候處ニ、被爲入

御念を、是迄送進上被成候段、御祝着ニ被思召、御内  
書ニ被仰入候、隨而拙者へ一箱被下置候、御心付之段

過分忝拜領仕、不打算致賞翫候、委ハ山口駿河守殿方

可被仰達候条、奉省略候、恐惶謹言、

〔朱カキ上〕  
〔慶長十三年〕

正月四日

本多佐渡守

正信〔花押〕

鳴津陸奥守様

貴報

421  
〔喜入忠續譜中〕

慶長十三年戊申之春、爲 龍伯君之使節赴駿府與江戸、

太守家久公之使、與鳴津下総守常久所以海陸共同也、

422  
〔雜抄〕「正文在不断光院」〔家久公御譜中ニ在リ〕

實窓芳眞大姉當一周忌、別恨又新拭却涙痕、作句書之以

呈和尚、而述追悼云、

葉盡孤村見夜灯

慶長十三年二月初日 家久〔花押〕

不断光院

〔以上一通也〕

423 ありかたき弥陀のおしへをつとめ行法のまとひは道しあ

りけり

家久

外三家久公  
あたなりと名にたつたつ花の盛さへ見はてぬ夢の世々そつら

けれ

しほりつる袖のなミたは小車のめぐりあひぬるけふのか  
なしさ 紹益

夢とのミすきし日敷のけふに來て春に二たひ袖ぬらすか  
な 忠重

日移月往歳日曆 追憶涙痕拭尚模 舊恨新然無處移 終

霄独醒向殘灯

貞昌

いつのまに送りきぬらんふち衣また二月のけふの悲しさ

景親

あたにミし花は散ぬるこそその春又もや咲とおもふはかな  
さ 一和

奉和實窓芳眞大師一周忌之追悼之尊句巨呈尊靈一前云  
尔

生死去來有孰應 唯看傀儡弄于棚 別然和淚朦々月 了

々心空挑一灯

安意

龍伯御追善之御歌

かの實窓芳眞大師こゝ地れいならす病床にふし、日敷を

ふるほとにいれうを求め、有驗の僧を尋ねいのり、かち

し、さま／＼なりしかと、つねならさるならひのかれか

たく、世をはやうせしを悲ミ、人々歌たてまつるにもよ

ほされ、一首をつらね靈前に手向るものならし、

御佛の跡したひてやさかりなるはなも散行二月の空

惟新様

南なかそらにすみのほりゆく月影の名殘かすめる袖の雨

かな

無むかしとてとをくハあらぬ跡なからありしにかハる春

のかなしさ

阿あたし野の名におふ草の枯生さへもえいつるときにあ

ひぬるものを

弥みちしるへするやミなミの岸ならしすゝしくさそふ船

のをひ風

陀たきのをと松のあらしも聲そへて身にしミまさる法の

場かな

仏ふかき夜に鏡のひゞきさえ／＼てうきよの夢とさめは

てにけり

大炊助久正

南なかき日にしつこゝろなくちる花はおのつからなる時

やしるらん

無むかしにもかわらぬ影や二月のなかはの月の雲かくれ

しは

阿あさ茅はらかかすめる露の玉ゆらのきままつさたになき

世かなしも

弥ミつの道すゝしき法にひかれてやおもなの家をいつる

小車

陀たちのほるけふり身にしむ鳥へ山いつくのたれかよそ

に見てまし

仏ふる寺のゆふへいかにととひよれはさえたるかねの聲

ハかりして

追善

わかれつる佛をしたふきさらきのなけきのほとのおとり

やハすれ

宗可

あちきなやもろこしならば暮よりも焼香に見えぬなき玉

のかけ

元巢

なき跡をあわれかたみの夕けふりしはしは残せ春のやま

風

遊浦

以上

改年之御慶珍重奉存候、去年ハ駿府御城火事之様子相聞、

御氣遣之由被仰越候、併別条無御座候、御心安可被思召

候、被仰越通、本上野方まで具可申越候、猶後音之時、

萬嘉可申伸候条、早々御報申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕

二月二日

山口駿河守

直友(花押)

惟新様

御報

425

『阿久根寺家ニアリ』

各寺地之儀、兩度御檢地之刻、竿被許置候之処ニ、御藏

入仕明衆、寺地を茂日記ニ被書入候哉、就其御侘之由候、

兩度之御檢地ニ免許之上者、別儀有間敷候条、永々可有

領知候、若又相違之子細於有之者、可及其沙汰候、仍如

件、

慶長十三年

二月三日

比志嶋紀伊守

國貞判

圖書入道

紹益判

阿久根寺家中

『全』

先年阿久根寺家中、御竿打被成候刻、御任被申上候付、御墨付被預候、今度各寺中江竿入可有之由被仰候間、彼長壽寺爰許へ被罷越候、様子具承候条、野村才右衛門殿を以、御老中江申上候、然處ニ先年之如御墨付、此度之竿之儀、可有御赦免候由被仰出候、此等之通拙者前々各中江可申渡候儀、野村才右衛門殿ニ而被仰聞候間如此、猶重而可申承候、恐惶謹言、

〔年未考、此ニ置ク〕  
十二月二日

〔阿久根地頭カ〕  
澁谷周防介  
重將判

平田民部左衛門尉殿

河上伊与守殿

まいる人々御中

尚以此度御老中之御障之儀申上候へ共、先年之御時ニ相替儀無之候間、我等前々可申達候由被仰付候条、如斯候、尤半松前々同前ニ可被申越之趣ニ、當時氣相無然々躰候間、不及是非候、一段御竿打、寒中と申、御辛勞無申計候、以上、

〔家久公御譜中〕

〔正文在鳴津左衛門久道〕

小幡長門守殿

態申候、春山之かり可催と覚悟候へく候、然者來十七た

るへく候まゝ、被相越候やうにまち入候、用之儀候間、かりはへ御出定候者、物語申へく候、必々かりはへ入來候へく候、上洛前無心候へとも申度候事候間、彼表へすくに御入候へく候、猶別之御用はとて、成ましく候、くかしこ、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕二月十五日

かこしま  
よ□

又吉殿

進候

忠恒

428  
〔家久公御譜中〕

〔正文在中西文右衛門〕

従少進法印相傳之童舞抄、令書写度旨懇望候処、被任其意、誠本懐不過之候、八幡大菩薩御照覽、洩他間敷候也、

慶長十三年二月廿三日

家久(花押)

慶長十三年二月、駿城舊冬十月九日駿城焼失、之便殿ニノマル經營事成、而以三月十一日爲移徙之日、繇繁 家康公今春無參洛、故家久亦在國、清水平左衛門光直呈同月二十七日書家久來、演述如左、

慶長十三年戊申、奉 家康公之高命、築駿府城石垣、

已上

改年之御慶雖事旧候、珍重奉存候、仍旧冬十一日尊書、誠忝拜見仕候、然者爰許 御城火事ニ付、可被成御氣遣与乍恐奉察存候、併早御作事大形致出來、來月十一日可被成 御移徙由ニ御座候、上様一段御息災御機嫌よく被成御座候間、御心易可被思召候、就其當年も御上洛不被成儀、最目出度御事共御座候、猶後音之時得尊意可申候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

二月廿七日

清水平左衛門尉

光直(花押)

以上

追而申入候、旧冬御進上之砂糖・蜜柑披露申候、一段御挨拶共御座候、殊更砂糖旧冬火事焼申候砌、御進上付一入御祝着被 思召候、即 御墨印可被進之間、先甚兵へ差下申候、跡々請取進之可申候、於趣者口上申含候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

二月廿七日

山口駿河守

直友(花押)

少將様

参人御中

山口駿河守直友贈二月二十七日之書於家久曰、中山王有述歸順而來腹之禮之心哉否、則頻遣使節、而可催彼來朝、至直友 上問、婁及此事、且雖舊冬駿城便殿焼失、御父子無異可獻音問之使者、委附和久氏之舌頭、聞知云云、

434

「御文庫二番箱家久公二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚く申候、琉球之儀、上様へ御礼申上候様ニ、御才覚御尤存候、委細甚兵衛可申上候、以上、

追而申候、舊冬以書狀申上候琉球之儀、如何御座候哉、御請なと申候哉、様子承度存候、我等も去年より駿府有之儀候、切々御尋之事候間、不及申候へ共、無御由断彼方へ御使をも被差越、御究御尤存候、於様子ハ甚兵衛申含候、被聞召届、御報奉待存候、將亦、旧冬駿府御城火事、不慮之仕合、無是非次第にて候、併御父子様着無御座候、御息災之事候間、御心易可被思召候、左様之御音信、御使者被差上御尤存候、是又委細甚兵衛可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

二月廿七日

山口駿河守

直友(花押)

薩州

少將様

参人へ御中

435

「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

改年之御吉兆雖事旧候、猶以珍重々々、不可有盡期奉存候、尤早々以書狀成共可申上處、何角無沙汰背本意存候、

當年者 御兩 御所様御上洛有間敷様ニ、風聞御座候間、

緩々御在國御遊興共、目出度奉存候、上方珍御事も無御座候、秀頼様御庖瘡被遊候へ共、御安被成御平癒候間、御心易可被思食候、駿府御城御作事出來、十一日ニ被成御移之由、御沙汰共御座候、爰許相替儀御座候者可申入候、相當之御用等可被仰下候、是等式憚多御座候へ共、三原樽三ツ進上仕候、誠奉表御祝儀計候、委曲伊勢兵部殿可被仰上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

三月六日

祐乗坊法印

瑞久(花押)

鹿兒嶋

少將様

御中

436

「家久公御譜中」

家久所欲上言之事逐一書記、使市來八左衛門家友齋山口直友、則議本多正純、而達 家康公上聽、家久書記之内御内縁之事、頗愜 御意、猶雖欲窺 台意、駿府御移徙等事煩猥、先還家友旨、備見直友三月十一日之書、此時直友奏達、家友者爲家久之近臣、是故 公命許拜謁、家友雖懷辭退心、不可奈 鈞命何、遂拜謁、因直友贈一翰

於家久、告謝拜 台顏不出於家友本心、

437 「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚々申入候、被仰越一儀、今一應得御意、急度御左

右可申上候、御挨拶一段能御座候旨、可相調与存候、

何も追而慥之御返事可申上候、以上、

御使者御口上并御条數之通具承届、則本上州致相談、達

上聞候、然ハ御内縁之儀、一段御挨拶能御座候、先以御

心易可被思召候、今一應得御意可申儀候へ共、御城御徒

移彼是御取籠之儀候間、先々市來八左衛門殿返申候、急

度 御前之儀、本上州申談得御意、御左右可申入候、委

細八左衛門殿へ申談候間、可被仰上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

三月十一日

山口駿河守  
直友(花押)

少將様

参□報

438 「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申入候、市來八左衛門殿貴様御傍ニ被召仕候由、申

上候へハ、可被成御覽 御錠ニ而御座候間、拙者披露申、

御前へ被罷出候、色々八左衛門對酌ニ而候つれ共、右之  
通御座候、爲御理如此候、恐惶謹言、

439 「家久公御譜中」  
三月十一日 山口駿河守  
直友(花押)

奥州様  
参人ニ御中

龍伯・家久命奉賀今年之慶事於 家康公及 秀忠公之使、

於喜入攝津守忠政龍伯使者、嶋津常陸介常久家久之使者、以御太刀一

腰・御馬代黄金二枚・緋綸子十端、爲進獻之幣、且家久

命常久、以訪問去年十月駿城便殿燒失之事、白銀千葉爲

獻幣兩使奉命、先是三月二日、發隅之國府、同途赴上國、

十一日、從日州美津開船、同月二十二日、到于大坂、

常久・忠政四月朔日已到伏見、進獻之幣物悉全備 而十

四日、起程於伏見赴駿府、時川東善左衛門尉時弘時大坂藏奉行、

亦由命與兩使俱旅行、是爲獻幣及白銀等護送之總監乎、

同月二十三日到駿府、則山口直友聞知、而遣和久傳五直

之近侍、勞遠路之辛苦、而后傳五再來、曰須早至直友宅、

之小臣、

440 「家久公御譜中」

常久・忠政四月朔日已到伏見、進獻之幣物悉全備 而十

四日、起程於伏見赴駿府、時川東善左衛門尉時弘時大坂藏奉行、

亦由命與兩使俱旅行、是爲獻幣及白銀等護送之總監乎、

同月二十三日到駿府、則山口直友聞知、而遣和久傳五直

之近侍、勞遠路之辛苦、而后傳五再來、曰須早至直友宅、

443

「義久公御譜中」

442 猶々兩通共以、慥遂披見了、  
 追而前漢書杯林被差上候、念望候、切々厚情難申盡候、  
 委細者喜入攝津守可令演說候、かしこ、  
〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕 卯月朔日 信尹  
 鹿兒嶋少將殿

441

「御文庫三番箱宝鑑中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
 正月六日之芳札、喜入攝津守持來候、殊又爲祝義銀子三  
 包、承悦之至候、何様從是可申越候、かしこ、  
〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕 卯月朔日 信尹  
 鹿兒嶋少將殿

於是兩使至直友第進國幣、太刀一腰・馬代銀十枚・單衣二領各述龍伯・家久之意緒、而兩使亦進自己之贄、太刀一腰・馬代銀一枚・段子二匹和久傳五亦與青銅、翌日先容山口直友兩使、共詣本多正統第進國幣品前、告國命、又進自己之贄、同前而二十八日、兩使登營隨正統指南、各獻國幣奉調 家康公、自己亦獻御太刀一腰、再遂拜調、事了則下 營歸邸舎、

444

「正文在大口土築原氏」  
 慶長十三年卯月吉日、庭の白藤盛成し時詠之、  
 うへそへし松にかゝれる藤かつら  
 花も千年のかけや見るへき

坪付  
 柳瀬村湯之谷  
 下田三畝 式斗四舛  
 山野村ひやけた  
 下田四畝 四斗八舛  
宮人中之廻  
 下田五畝 四斗  
 合卷反式畝  
 高卷石卷斗二舛  
 右、觸分之知行返地として、被宛行者也  
 慶長拾三年卯月五日  
 赤池六左衛門尉殿  
 新納武藏入道  
 爲舟判  
 松田九郎右衛門尉  
 川口右兵衛先  
 榎田  
 權八郎

445

「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
 從琉球之使僧之儀ニ付、預使札候、具承届候、誠今度之  
 御返事ニ相究候儀条 猶以 龍伯様へ被得御意、御談合

候へてハと申事候、巨細町田勝兵衛尉・相良新右衛門尉

へ申渡候間、不能詳候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
慶長十三年〕卯月八日

惟新(花押)

少將殿

參

446 慶長十二丁未二月朔日、家久公御母堂御逝去、御法名奉

号實窓芳真大姉候、同十三不断光院江芳真様御影仏阿弥

陀如來并御位牌被遊御建立候旨仰出、三原諸右衛門殿

方細工奉行森喜右衛門江被仰付、同二月十三日方京都大

仏師康嚴法印刻初、同四月九日御新仏御身躰ニ、家久公

御直判之御證書被籠置候、文左之通、

447 (本文書ハ四五〇号文書ト同文ニノキ省略ス)

448 〔家久公御譜中〕

五月三日、授回復之奉書於常久・忠政、且就災所獻之白

銀千葉之内取納百枚、而還九百枚、既而至十六日、常久

・忠政詣正純・直友宅、告明日赴江都之事歸邸、則以使

者各贈與複衣・單衣等、於是正純言常久曰、家康公近

侍小臣有落合長作者、因罪所定配所於鬼界嶋、以此人可

屬於常久于城州伏見、歸國之海陸堅固可警衛、勿敢怠慢

常久領其旨、翌十七日、與忠政共俱辭駿府、二十一日至

武都、翌日本多佐渡守正信使小佐手助左衛門尉勞兩使道

路困憊、二十三日朝、兩使相共詣大久保相模守忠隣・土

井大炊頭利勝・正信之第、進國幣及自己之贊述國命、此

日申時登營、常久・忠政賴正信各獻國幣、奉拜謁 將軍

家、自己之贊亦獻之遂拜禮、而所獻上之白銀納百葉還賜

九百枚、酉刻退出營中、翌日兩使至正信宅奉謝昨日之事、

二十六日、將軍家以正信賜暇及單衣十領・龍蹄一疋於

常久、且授 台書・奉書等、而翌二十七日、辭江府經木

曾路、六月十二日到伏見、既而二十一日、和久傳五因山

口直友之令、自駿府齎 御朱印來授常久、而至二十八日、

直友使和久傳五・佐佐井喜兵衛尉告曰、常久在駿府之日、

正純已所先言之落合長作丁當番之日、黃金之風爐金失、

因其日之番人無有、一人配諸國、故長作亦定配所於鬼界

嶋、今授與之、常久其警衛之、宜歸國而稟旨趣於家久、

常久應諾、則固長作於囚輿、騎馬之士嚴護送之來、常久

乃受之、言和久氏・佐佐井氏曰、自是海陸程遠、如此窮

屈囚人必疾病起、萬一有不意事、常久當其罪、乃脫去囚

輿安囚人、而晦日至大坂、七月八日開船難波津、十六日

到日州美美、二十一日到隔陽國府、常久告報駿武之細大於龍伯、翌日至平松奉謁惟新、二十三日到廳府、翌日常久登城獻嘉肴・樽酒於家久、逐一反命駿武之事、而囚人落合長作亦如駿命配硫磺嶋、

449 「家久公御譜中」

先是二月朔日、正當家久母堂實憲芳真大姉一周忌回、因家久其日詣不斷光院、而為薦大姉妙福作追善一句、書以賜純譽上人、不斷光院 四代住持、侍臣等亦奉和尊韻作漢和、時家久言純譽曰、為大姉菩提新彫刻彌陀尊像、應安置當寺、乃以此事命三原諸右衛門重種、於是重種以 貴命傳森喜右衛門、細工 奉行、同月十三日、使洛陽七条大佛師康嚴彫刻佛像及大姉神儀、至四月初九日、功成則家久書志願趣、納佛體之中、與神儀共使純譽安置、一七日行不斷念佛三昧開眼供養、其内家久及簾中亦被參詣、自爾后家久歲歲年年每忌日參拜無有怠惰、

450 「正文在不斷光院」

無量壽佛金軀一躰、使七條大佛師康嚴彫刻焉、以因 不斷光院之現住淨蓮社純譽上人奉寄附之、仍為現世安穩後

世善處也、

慶長十三年四月九日

少將家久朝臣御在判

451 「家久公御譜中」

家久平素信仰太元明王、故於理性院裏造立明王殿閣、今茲遂落成功、其莊麗甲一山、因院主觀助歡喜之餘、封書寄來如左、

452 「拾番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

好便之条今啓上候、仍太元堂御建立之儀、一段奇麗ニ令周備、大慶無極候、一山之伽藍不可如之候、殊以御兩奉行衆被入御精候、喜悅無申計候、如何様御上洛之刻、可有御覽候、於委細者、稅所弥右衛門尉方可被申入候間、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱力半〕  
慶長十三年卯月十二日 觀助

羽柴陸奥守殿

人々御中

453 「家久公御譜中」

家久去歲晚秋、始朝武都、以未有家屋、故寓眞福寺爲旅館、因 將軍家於豊島郡芝之地賜宅地於家久、今茲遣鎌

田加賀守政在監營作事、于是差一使于武都、先如駿府就本多正純受指南、事見于正純回書、

454

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍江戸御屋敷爲御普請、御使者御人數御下被成由、如其旨候、然ハ江戸之儀、佐渡守御無沙汰被致間敷候ヘ共、尚以疎略無之様ニ、今度拙者先方方可申入旨示被下候、則懇ニ書狀相認、御使者ヘ相渡進候、彼地之儀、佐渡守何様共御無沙汰被致間敷候間、可思召御心安候、然而 將軍様去月十七日、駿府被成御座、此表久々御逗留ニ御座候、御兩 御所様御機嫌能被成御座候、然ハ去十日駿府御立、還御被成候、尚此表相替儀無御座候、相應之御用等御座候ハ、可被仰付候、不可存疎意候、將亦爲御音信、象牙一四尺并半弓一張・扇籠被懸御意候、遠路と申御懇切之至、忝次第ニ御座候、何も追而可得尊意候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
慶長十三年

本多上野介

卯月十五日

嶋津陸奥守様

貴報

正純(花押)

455

「家久公御譜中」

右府秀頼卿先病痲瘡、隔海程故雖聞遲、以使者姓名不傳奉訪問、獻毛氈及丁香等、有片桐且元回書、

456

「忠元勲功記」

一慶長十三申正月十八日、忠元年頭御祝儀として加治木江參上、大口衆肥後仲左衛門盛良・中嶋孫右衛門等同心仕候、此類者毎年之禮式ニ付、書載之程無御座候得共、古日記見當如是御座候、△  
慶長十三年申八月、忠元(古文・底本ニ欠ク、鹿尾島樂立圖書館本ニリ補)琴月様江御馬一疋月毛進上仕候、然処同日、忠元江御書并御使を以、御帷子三領、御酒兩樽拜領被仰付、先日者見事之月毛馬差上御秘藏可被遊、老躰思寄懇意之至、御欣悦被思召上候、殊ニ數年之武功忠勤之段、連々御感思召候、弥餘齡相保養生肝要被思召上、御音信之驗迄乍輕少被成下趣、難有被仰下、此時忠元八拾三歳御座候、

457

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々早々被入御念、御使被進之候とて、御機嫌にて御座候間、能く我等方相心得可申進旨候、旁追而可申述候、以上

右府様先度被成御抱瘡候へ共、其地遠國故遅御聞付候て、即只今御使者御差上之旨申上候處、遠路御懇精之通、能く相心得可申進旨候、近日者御本服にて、弥御氣色能御座候条、御氣遣有間敷候、委曲口上ニ申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十七年」  
「慶長十三年」  
卯月廿二日

片市正  
且元(花押)

羽陸奥守様

御報

458

「古御文書」以下二十二通「拾番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々、秀頼様御氣色一段能御座候、可御心安候、以上、

秀頼様御抱瘡被遊ニ付而、爲御見廻御使被成爲御上候、御狀即市正懸、御目懇申上候、早透度御本復候之条、御上之儀必御無用之旨候、諸大名衆も御見廻一切無用と被仰候、上方一段静ニ御座候、自然相應之御用候へ、可被仰越候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

卯月廿二日

片主膳正

貞隆(花押)

羽陸奥守様

貴報

459

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲歳暮之祝儀、小袖五到來、喜悅候也、

「朱カキ」  
「慶長十三年」  
四月廿八日

「墨印」

薩磨少將とのへ

460

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以當地御普請付而、鎌田加賀守殿被爲指下候、是又加賀守殿相談、萬事不可存疎意候、何も可然様ニ可被仰入候、以上、

鳴津陸奥守様方年頭之爲御祝儀、喜入攝津守殿を以被仰上候通、遂披露候處ニ御仕合能御座候間、其通可被仰達候、然者、禁裏様御材木之儀、無御油断被仰付候由、攝津守殿御口上之通、是又申上候、南蛮・唐船之儀者、先日駿府方如申入候、弥其段貴老方可被仰入候、尚今爰元之様子、攝津守殿可爲御物語候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
「慶長十三年」

五月二日

山口駿河守様  
（直志）

御報

本多佐渡守

正信（花押）

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以其已來不奉得貴意、乍恐御床敷奉存候、以上、

當年之爲御祝儀、御使者、殊御太刀一腰・御馬代金子貳枚并ひりんす十端進上被成候趣、披露仕候処、被爲入御念候段、御祝着被 思召、御内書被進候、隨而私へ御太刀一腰・御馬一疋・糯子五端送被下候、忝拜領仕候、委曲喜入攝津守殿可爲言上候間、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
「慶長十三年」

五月二日

羽柴陸奥守様

貴報

本多佐渡守

正信（花押）

「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚々 秀頼様一段御息災御座候条、御心易可被思召

候、隨而雖乏少之至候、南都諸白一樽致進覽之候、

遠方故万事無沙汰迷惑仕候、猶追而可得御意候、

如尊書、當春之御慶奉存知玆重候、 將軍様御入浴依無

御座候、御上御延引之由尤存知候、 秀頼様被成御抱瘡

ニ付、追々被差上御使札候、其趣則市正・主膳正披露被

申候、殊見事之毛毳并丁子御進上、公私御感不斜候、重

疊被入御念玆重存候、委曲從片桐兄弟被申入候、將亦駿

府・江戸相替儀無御座候条、是又被成御機遣間敷候、市

正・主膳正事、惟新様以來別而不被存疎意候故、弥無油

断心底と相見申候条、可被成其意候、次被寄思召、拙者

式迄見事糯子貳端拜受、誠々忝次第、可申上様無之候、

委御使者任口上候条、不能懇筆候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
「慶長十三年」

五月三日

羽奥州様

參尊報

小林民部少輔

家孝（花押）

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様へ爲端午之御祝儀、御帷子拾之内、御單物七ツ

御進上被成候、如御目錄披露致候處ニ、御仕合共御座候

条、先安可思召候、 御内書之儀、追而相調可進之候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕  
「慶長十三年」

本多上野介

五月八日 正純(花押)  
鳴津陸奥守殿

464 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲端午之嘉慶、帷子單物十到來、悅覽候、委曲本多佐渡

守可申候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕五月十二日 (秀忠)  
(花押)

薩摩  
少將殿

465 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊札致拜見候、仍旧冬駿府御城火事之儀付而、爲御見廻  
御下被成度思召候へ共、惣様御見廻衆御法度之由候て、  
今度御同名又吉御下被成候、然而銀子千枚御進上被成候、  
即致披露候処、無大形も御仕合共、残所無御座候条、於  
様子御心安可思召候、左様ニ候へ者、銀子之儀、態百枚  
御留被成、九百枚ハ御返被成候、是ハ御懇之御詫共候而、  
如此御座候条、其御心得被成、御機遣被成間敷候、委細

之段者、御使者可被仰候、將亦此表珍敷御事も無御座候、  
爰元駿府御普請儀も大形出來致候、猶今以雖不申立及候、  
此方御用等も御座候者、不被殘御心底、可承御疎意存間  
敷候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕  
五月十六日

鳴津陸奥守様

本多上野介  
正純(花押)

466 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

猶申候、私へ銀子拾枚贈被下候、忝次第共候、尚後  
音之時可得御意候、已上、

爲年當之御祝儀、御同名又吉郎殿御指上せ被成候、則本  
上州申談、令披露候、別而御祝着之旨候、然ハ銀子千枚  
御進上被成候、具令披露候、雖然百枚御祝儀御留被成、  
殘九百御返進被成候、則又吉郎殿へ相渡申候、將亦爰許  
相替儀無御座候、御心易可被思召候、又吉殿御仕合殘所  
無御座候、猶又吉殿へ申入候間、可被仰達候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕

五月十七日

山口駿河守  
直友(花押)

奥州様

参貴報

467 「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲當年之御祝儀、喜入攝津守殿御差上被成候、我等より  
案内者相添、江戸・駿府へ攝津守殿御下候處、一段之御  
機嫌之由、本佐州方被申上せ候、將亦拙者方へ爲御祝儀、  
御太刀一腰・御馬代銀子拾枚、贈被下候、目出度候、於  
趣者、喜入攝津守殿へ申入候、猶後音之時可得責意候、  
恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十三年」

五月十七日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

参貴報

468 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而御太刀・御馬、從此方も爲御祝儀、令進覽候、  
以上、

秀頼様へ改年之爲御祝儀、御太刀一腰・御馬并小袖拾被  
進之候、披露申候處ニ、遠方御念入申通、能々相心得可

令申旨候、隨而私へ御太刀・御馬并小袖三、被懸御意候、

御懇切之段、別而忝存候、委曲御使者へ申達候、恐惶謹

言、

「朱カキ」

「慶長十三年」

五月廿一日

片桐市正

且元(花押)

羽柴陸奥守様

御報

469 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

芳札拜見忝奉存候、如被仰下候、當年之御慶目出度申納  
候、隨而爲御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋并縶子拾端被  
下度候、誠ニ遠路之儀被爲入御念之段、過分至極ニ奉存  
候、委細者御使者又吉殿迄申入候間、不能詳候、恐惶謹  
言、

「朱カキ」

「慶長十三年」

五月廿五日

土井大炊助

利勝(花押)

羽柴

陸奥守様

人々尊報

470 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以遠路御使者被進候儀、御祝着被成候、委曲御使者可被仰上候条、不具候、以上、

當春之爲御祝儀、將軍様へ御使者并銀子百枚進上被成候、趣大久保相模守相談、披露仕候處、遠路被爲入御念段、御祝着被思召、御内書被成候、然者駿府 大御所様へ銀子千枚進上被成候、御仕合之様子、上野介方<sub>レ</sub>可得貴意候、近日駿府爲御移徙御供可仕候条、猶又上野介相談、被入御念候儀、大御所様へ可申上候、隨而拙者へ御太刀一腰・御馬代銀子十枚送被下候、每度御芳情之至難申謝候、委曲爰許之様躰、鳴津常陸介殿可被仰上候条、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力字〕  
〔慶長十三年〕

五月廿六日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

471 「義久公御譜中」

〔正文在吉田次郎兵衛爲清〕

今朝者一服令祝着候、我等茶之事無安内之故ニ候哉、五月つほ之口きり、玆敷儀ニ候、恐々謹言、

五ノ廿六日

竜伯(花押)

〔上書〕

吉田美作守殿 竜伯

472 「家久公御譜中」

駿城便殿當三月已新成、而 家康公有 御移徙、家久思欲至駿府奉賀之、因先投書於本多正純通旨趣、則達 高聽 台命曰、家久須在國、而緩緩地爲政務莫敢來朝、若有要用可賜 御黒印、且有自己告稟之事、以使節而可上言、正純之書中詳演達如左、

473 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍歳暮御服、端午之御帷子御進上被成候、何も致披露候処ニ、一段御仕合共御座候条、於様子者、御心易可思召候、則 御黒印兩通相調進之候、然者 大御所様駿府へ御移被成候付而、爲御見廻御下被成度由、懇ニ達 上聞候処ニ、是又一段之御機嫌共御座候、併御自身御下之儀者、御無用之由 御証ニ候、自然御用御座候者、自是 御黒印可被遣旨 御意候条、其御心得被成、無御左右以前ニ、此方へ御下被成候儀、必御無用可被成候、若其内御自分之御用等御座候者、以使者可被仰上候、

其元緩く与被成御在國御仕置に可被仰付候、猶此表相應

之御用等御座候者、可被仰下候、疎意存間敷候、何も追

而可得御意候条、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕

五月廿七日

本多上野介

正純(花押)

羽柴陸奥守様

人々御中

〔御軸物十番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

先日以後者不得貴意候、秀頼様御本腹被成、去月

節句御廣間へ被成 出御、各御目見被仕、何茂御盃頂

戴候、夫より打續至今日被成 出御候条、御心易可被

思召候、

一從 將軍様今度 秀頼様御本腹爲御祝儀、有閑様御息

津田丹後守殿被着候、去廿二日至大坂御着候、同廿三

日被成御對面候、從 將軍様被參候物敷之事、

一御太刀一腰

一御馬式疋之内一ハ紫栗毛、  
一ハ青毛

何も御くのふの御馬にて、見事成之由各被申候、

一御帷子百之内 單物五拾

一銀子五百枚

御上様へ

一銀子貳百枚

一越前綿 參百把

其外御女中衆、銀子夫々ニ被下之由候、

一彼御使丹後守殿へ、御腰物・銀子百枚、從 秀頼様被

下之候、

一駿府・江戸相替儀無御座、各御息災之由、目出度御事、

一駿府御普請御作事、一段見事出來候由、御沙汰之事、

一爰許相替儀無御座候条、御心易可被思召候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕

六月四日

小林民部少輔

家孝(花押)

羽柴奥州様參

人々御中

〔家久公御譜中〕

〔正文在大乘院〕

漸可爲上着候間、其許之様子爲見廻、從惟新様飛脚被仰

付候間、用一封候、如何様ニ可相調躰候哉、委承度候、

猶期後信候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕 六月十一日

家久(花押)

成正院

床下

476

「義久公御譜中」

「案文有之」

(本文書ハ三六七号文書ト同文ニノキ省略ス)

477

「義久公御譜中」 「在六月中」

與大明商客

大明泉州商客許麗實、留滯於我邦者一寒暑矣、今年纘舟於我久志浦回於大明、明年再渡之時、不幸而舟雖至他州里、使我一小吏至於其地、子亦侍吏之至、以定器皿貨財之價、其自利利子者、全無毫釐之差、是今子之志、而我之所望亦在茲而已、其盟之堅者金石膠漆、物莫能間、子其念之、

日本慶長十三年

藤氏龍伯法印

478

「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

江戸貴殿様御作事之儀付而、被成御差上候御使者、歸國候、於江戸御作事、鎌田加賀殿へ無由断被申付由候、然者本佐州方我等かたへの書狀、爲御披見進候、彼地之御

作事、御使者御存候間、具ニ不及申候、將亦伊兵部殿、

駿府・江戸へ御下之事候、去四日ニ大御所様御目見へ之由、兵少被申上七候、一段之御機嫌之由被申越候間、

御心安可被思召候、此度拙者案内者仕、可罷下と存候處、

御城御番之儀、又丹波にて御用共被 仰付候故、御機嫌

難計存、兵少致談合、駒澤忠左衛門尉相添下申候、御

前之様子ニ被拙者可罷下通申合候、此段由断不存候、御

心安可被思召候、尚後音之節得御意可申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十三年〕

七月十日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

参人ニ御中

479

「家久公御譜中」

京極若狹守忠高家臣有冲長門守<sup>後號</sup>道禰者、聊有過失、故本

多正純奉 鈞命、以書傳旨於山口直友、直友如 命添一

使遙護送長門而至薩府、遂所預家久、事見于書、

480

「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓上候、仍京極若狹守殿御内冲長門守と申仁、不

被相付儀御座候付而、御國へ被進候、然者拙者の案内者相添可申旨被仰出之由、本上州の被仰越候、貴殿様へ上州の之書狀并我等かたへの書狀をも相添進上申候、被成御披見、其旨被仰付御尤存候、尚使者口上可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カギ  
慶長十三年〕

七月十九日

山口駿河守  
直友(花押)

鳴奥州様

參人と御中

481 「家久公御譜中」

紀州高野山金剛峰寺者、真言秘密之道場而佛法最上之靈境也、是以沙彌惟新・少將家久父子相共仰止之餘、素欲創一字之梵刹以爲未來宿因善根、因使成正院賴真遙上鼎峰以撰其地、雖曰山高野廣有數千餘員之僧房、以故無可插一茅之地、賴真可奈之何哉、一山之檢校大僧正政遍感父子歸依之志、相攸於蓮金之院、欲改之一新以爲我寺、爲蓮金之院往昔 右大將賴朝公之所創建也、吾島津之襲祖忠久者、賴朝公之長庶子也、如今以蓮金改爲我宿房、是自非宿緣之深何至于此乎、賴真以檢校之命、告於主蓮金者、以白銀三千兩買得院地、四境辨詳  
至賣券狀、勵土木之功營構

數間之寺宇、已新成則於紀州阿良見庄、以白銀二十貫目買得院領三十五石、而寄附之、其外至本尊佛具及庫藏等無不全備、且惟新及家久逮後代、欲此院之無退轉、故封連署之書、蓮金・善集・寶生・廻向・文珠之五院各與之、皆以載此一策之中、

482 「御文庫拾七番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

### 坊跡売券之事

一屋敷 東西者式拾間、西者はり道をかきり、南北拾五間半間、東者山際をかきり、北者三藏院之屏之雨落をかきり、

一山者 南者本堂之雨落より峯迄見とをしなり、北者三藏院屏之雨落より峯迄見通也、東者峯筋之水流をかきるなり、

以下者一院之郭内棟敷道具院領等也、

一客殿者七間六間也、疊・立具悉以附置候、

一雜舎者四間与七間半也、

一本堂三間四方、道具者仏壇、八祖師之影像、礼盤一・

磬台一・塗机二脚・疊九疊あり、

一護摩堂者貳間四方也、

一土藏者三間四間也、

一門一、兼上下也、

一中門一ツ、

一院領三十五石者、在所あら見の庄なり、

寺家之水帳別ニ在之、

一延命院之屋敷 東西者五間、西南者はり道をかきり、

北南者拾間、東者雨落をかきり、但柴

垣あり、

右坊屋敷・山・院領三拾五石者、銀子廿貳貫目永代賣渡

申處実正明鏡也、縱雖有國中之俗劇・寺内之騒動、當山

相續間者、此院家之儀、更以不可有違乱妨者也、仍後日

之支證狀如件、

蓮金院

慶長拾三年戊申七月廿一日 賣主全秀(花押)

使 增福院(花押)

使 俊長房(花押)

嶋津陸奥守殿御内

御奉行

比志嶋紀伊守殿

參

御取次 伊勢兵部少輔殿

成正院

「末ニアリ」  
賣券之狀

483 「御文庫拾七番箱十七卷中」

起請文

今度從小笠原宗仲、細工方之儀令相傳候、子一人之外  
御詫無御座事候、他言申間敷候也、

右之旨於僞申上者、

▽(牛王) 上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神 炎魔王 五道

■惣者日本國中大小神祇、■而者新田八幡大菩薩 開闢

正一位 鹿兒嶋諏方上下大明神 戸柱稻荷 春日 若宮

天滿大自在天神 愛石權現 大天狗 小天狗之蒙御罰、

今生仁而者黑白受重病、來世仁而者八寒八熱之大地獄墮

在、生々世々毛■期者也、仍起請文如件、△

慶長拾三年七月廿一日 大村与左衛門尉  
重■(花押)

484

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲音信、硫黃二千斤到來、喜悅候也、

「朱少平」

「慶長十三年」七月廿一日

「墨印」

薩摩少將とのへ、

485 「下總守常久譜中」  
「初又吉」  
ト称ス」

慶長十三年戊申、有可使駿府與武府之命、故二月廿六日

發於日置私宅到于魔島、翌日登城、則使比志島紀伊守國

貞傳旨趣、謹奉其命、退旅宿、則令伊勢兵部少輔・野添

太郎右衛門尉經數百里之海陸勞苦伸不小寡、且復賜白銀

二十葉、同廿八日到于平松、雖然、惟新尊君催狩獵遊浦

生、故達使于東關之旨於本田源右衛門尉、而寄一宿於脇

本、同廿九日、惟新尊君差新納法師一甫於脇本、蒙東

關千里之使節辛苦可有餘之命、而後解纜到于國府、寄宿

於島津大膳亮忠榮、而後候于營中調、龍伯尊君、其翌三

月朔日、賜唐絹大紅三匹、其使者伊集院伴右衛門尉也、

三月二日、龍伯尊君之使節與喜入攝津守忠政俱發於國

府、同五日到于日州美々津、同十一日解纜於美々津、廿

一日過播州明石浦、瞻仰人丸之舊墳、則以其地更築城郭

構井樓營天守、城下浜邊、市廛縱橫、山海萬景、筆舌所

以不盡、誰得記之乎、漸後一之谷將過須摩浦、著船於其

地、而入須摩寺見舊跡、則殆近八旬乎、顔色憔悴、形容

枯槁、鬚髮白雪老僧忽然進出矣、予請重器之所存見焉、

應諾所以裏錦繡之青葉笛・高麗笛已下、開滅看之、且所

由來之細大巧言、始終本末上下精粗無所不盡、宛如說今

日之事、而後徒行兵庫以又乘船、翌日着大坂岸、寄宿於

泉屋宗甫、此地有 大守之府庫、其有司平田大炊助・川

東善左衛門尉及折田勘解由等在于此矣、四月朔日到于伏

見、寄宿於材木屋與左衛門也、同三日入于 大守宅地、

則北郷次郎殿警衛之首也、故扣其旅館遂對面矣、

四月四日、伏見城警衛將松平隱岐守殿賜价使曰、海路無

事上著者只今觸耳、先通佳言云々、翌晡與攝津守忠政俱

登城候隱州館、達 大守命、而後令中沼吉兵衛尉獻自己

之太刀、少焉賜盛膳旨酒、且賜寶刀、治工祖父  
信國脇指 忠政亦賜

寶刀、治工備前  
盛光脇指 奏者・指南共昇青銅伸禮詞也、

關東進獻諸物、悉以粧成、故同十四日發於伏見、雖爲有

司、川東善左衛門尉依 大守之命所以同行旅也、

同月廿日、未時到于遠州掛川、則松平河内守殿先遣伊集

院五兵衛法師紹與、伸遠路勞苦之旨、少焉差价使曰、速

可登城、已及再三、是以與忠政偕登城候河内守殿宅、

太守所贈之獻太刀一腰・馬代白銀五葉於河内守殿、獻繡

子三匹・綾子二匹於簾中、達旨趣退去、而後獻自己之太刀一腰・馬代白銀一葉・毛氈三張於河內守殿、獻唐絹二匹・紅絲二斤於簾中、進白銀五葉於妙春、未移刻、賜美膳旨酒、匪唯慰兩輩、開一日之宴、扈從士卒僉以賜盛膳醇厚酒、迄戌時欲退出之際、賜脇指、珍戴以退矣、家老奧平長兵衛尉・水野甚左衛門尉・竹內久右衛門尉・小出四郎兵衛尉、共四輩差价使、各贈青銅貳緡伸禮詞、今夕寄妙春與於旅宿及數年之談話、翌朝簾中贈饗於旅宿、令奧平長兵衛尉爲主代、且賜單衣二領・複衣一領、而後辭掛川、大雨如洗、同廿三日、過岡邊逾宇都谷之際、問前後左右、則皆是名所舊跡、且復問石車之散滿路頭山谷、則日駿府之城所築其郭之石也、已到于手越欲渡阿部川、洪水轉石不容易、然而憑數輩之達者、無恙渡于大河到于駿府矣、卽山口駿河守殿使小性和久傳五伸遠路勞苦之旨、再傳五來曰、早至焉、故與忠政同往、而太守贈物進太刀一腰・馬代銀子十枚・單衣二領報旨趣、而後進自己之太刀一腰・馬代銀子一枚・段子二匹、和久傳五亦畀青銅也、

四月廿四日、隨山口駿河守殿、而往本多上野守殿、進太刀一腰・馬代銀子十枚・單衣二領達旨趣、而後進自己之

太刀・段子二匹也、同廿六日晚景、山口駿河守殿依佳招至、則賜盛膳也、

同月廿八日、登城、則改常陸稱又吉、是又連子之中有稱常陸殿、諱之如斯、以本多上野守殿奔走進獻御太刀一腰・白銀千枚・單衣十領、御太刀授上州、上州受之、卽備于台覽、自己亦獻太刀一腰、拜謁內大臣家康卿、五月三日進獻之白銀納百枚、而返賜九百枚也、依公用之未成留滯之際、同五日參宮于淺間矣、同七日丸山・鈴俣山・木枯森等、得指南爲一見、各應其名勝地也、

同月十六日、與忠政同往本田上野守殿・山口駿河守殿、告明日如江戶可進發之故歸宿、則上州使內田織部佑贈複衣二領・單衣五領・道服一領、駿州使和久傳五贈單衣五領、丁此之時、有上州言曰、爰有稱落合長作殿之人、內府之小性也、依罪科所定配所於鬼界島、常久歸國之時可屬於城州、海陸堅固可警衛、勿怠慢云々、

同月十七日、辭駿府赴武州之路、過江尻・田子浦之際、問前路左右勝地於鄉人、則曰、江南則有茂隆蒼々數里生木、稱之於水保松原、匪啻障南海舟船繫泊漁父之恣網竿、賦詩吟歌、使騷人不可不爲佳作、江北則有冲津清見寺、清見之關、又油比・蒲原之驛舍及吹上之松・別宮等之古

跡、江東則有浮島之原・千本之松原、且復從北橫南有連續重疊嵩岫、稱之於箱根・足柄・足高山、當其東北之交、有十倍于諸太山、頂白雪續蒼天抽出雲上、是則日城第一之富士山云尔、聞此之言俯仰再三、而以爲取雪中早苗於田子浦之古詠、無毫釐之有差、已到于沖津、則扣清見禪關以入室中、現住那答院大願寺紹興院之弟子、素予之所知也、一別故郷、而隔東西千里、徒費瞻仰者年尚矣、語其万一、而後到于蒲原之途中、謂屢從者曰、過數箇名所不可無佳作、各盡詠乎、責之者甚急也、於茲乎綴三十一文字者六七、吟之以覺行路之睡矣、

同月十九日、發於豆州三島赴宮根之高山、登岬休息者一時、是以詣于權現百拜、而後將臨坂東下嶮路、于時綴愚詠曰、箱根山越つゝ四方を詠れハ名も白雪の峯の卯花

同月廿日、發於相州小田原、從小袋口入鎌倉、詣鶴岳八幡宮諸社皆拜伏、而後一見建長寺・延覺寺・地福寺・長久寺・定妙寺之五山、且詣靈社靈佛、宿初瀬市中、翌廿一日、發鎌倉晡時到于武州江戶矣、

同月廿二日、本多佐渡守殿使小佐手助左衛門尉我爲使節、遠路參府之伸勞苦也、

同月廿三日、候本多佐渡守殿宅、家久主進所贈之太刀

一腰・馬代銀子十枚達旨趣、而後進自己之太刀段子二匹、直候大窪相模守殿・土井大炊頭殿、各進太刀・馬代及疊縹子十端充達旨趣、自己亦進太刀、皆小佐手助左衛門尉以指南如此也、今日申時登城、家久主進獻之御太刀・銀子等、以佐渡守殿奔走備于台覽、拜謁于將軍家、自己亦進獻太刀、進退之際、無障碍快然矣、銀子納百枚、是亦依駿府例也、酉時退出矣、翌日候佐渡守殿宅謝禮昨日之奔走也、

同月廿六日、將軍家賜單衣十領此内五領生糸絹也、龍蹄鹿毛、壹匹

佐渡守殿家臣使小佐手助左衛門尉先知之矣、而後本多佐渡守殿爲上使來于愚宿、伸台命及件賜之故、且復賜

自己之太刀・單衣廿領、此内十領生糸絹也、大窪相模守殿亦使佐口

伴左衛門尉、贈太刀一腰・單衣五領此内二領生糸絹也也、

同月廿七日、辭江戶向木曾路赴于京師、六月三日、過信濃國大野間、鄉人曰、諏方三郎殿出所也、同四日寄一宿於諏方、翌且發於諏方望北山、則不計有白雪之未消于炎

天、問之則曰、飛彈山云爾、予熟夫以、未得其所然之至理、四時陰陽寒暑晝夜天地之常、當大寒之時温、當盛暑之時寒、變常乎、而况極熱中之白雪所天之變乎、所地之

變乎、

六月十日、過赤坂之宿、先是石田一揆之時、義弘主陣所已下尋問、而過野上宿、班女之舊宅在于此矣、過関ヶ原・不破關山中宿、常葉舊墳在于山中也、不應其名一足之有休息、過寢物語宿惜哉、同十二日戌時上著于城州伏見也、同月廿一日、和久傳五殿從駿府帶 朱印來曰、有駿府之際、公事以繁多如前約、贈賜伏見膝行以受之、拜伏玆戴焉、

同月廿八日、山口駿河守殿遣和久傳五殿・佐々井喜兵衛尉殿傳令曰、前日有駿府之際、粗有其令、内府小性落合長作殿定配所於薩州鬼界之嶋、常久警衛以宜歸國、所犯之罪、黃金風呂・釜、當番之日失却、由是其日番衆無一人之有者、配流於諸國、是以如斯、于時謂喜入攝津守忠政曰、不輕罪人與忠政俱警衛而可歸國、忠政曰、我是龍伯尊君之价使、何罪人之爲警固乎、固辭焉、故不得已而唯我受之、入囚與使騎馬之人爲警固者不緩而來、於茲謂傳五殿・喜兵衛尉殿曰、如斯而至于遠境、則因窮屈可起疾病、去輿以可俱下、若於途中有違意、則常久乍可切腹、盡懇志爲警衛矣、同晦日去伏見下大坂也、  
七月八日、解纜於大坂、同十六日著于日州美々、廿一日到于隅州國府、登城獻樽酒、謁於 龍伯尊君、關東・上

方之諸事細大告之、機嫌快然予亦開喜悅盾、令長作殿直往濱市宿于此、予宿于大膳亮矣、

七月廿二日、晴時候于平松獻于鷹之大緒・樽酒及干肴、沖津謁于 惟新尊君告駿府・江戸之諸事、而後一宿于脇本、翌日未時到于麿嶋焉、

七月廿四日、登城獻樽酒・干肴、沖津駿府・江戸事義悉反命矣、落合長作殿如 命令所渡于硫磺之嶋、家臣瀬戸口加左衛門伏見以際依警衛、爲長作殿所親、到于配所之際、令隨之也、同廿五日、賜暇戌時入日置之私宅矣、

486

「正文在羽月士柳田氏系図」

「上文略」  
安懿 柳田外記  
吉兵衛

薩州大口・羽月・山野三ヶ所十七竿知行坪

合田畠屋敷九反八哇拾步

分米拾石六斗三升四合九夕五才

慶長十三年八月八日

新納武藏入道

爲舟沙弥判

柳田吉兵衛殿

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

蘭二本、遠路到來、一段喜悅候也、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕八月十日

○〔墨印〕

薩磨少將とのへ

「正文在文庫」

就火事、爲音信、砂糖二千斤到來、喜悅候也、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕八月十日

○〔墨印〕

薩磨少將とのへ

489 先日者見事之月毛之馬被引候、涯分可致秘藏候、老躰被

思寄、懇志之至、欣悅不少候、殊數年武功忠勤之段、連

々感入事候、弥餘齡可被相保養術肝要候、仍乍輕少、帷

子三・兩樽音信之驗迄候、猶使可申候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕八月十日

家久(花押)

新納武藏入道殿

〔朱カキ〕  
〔右御使寺山幸四郎也〕

「家久公御譜中、正文在新納左京忠倚トアリ」

「此御書、忠元譜中ニ家藏トアリ」

「家久公御譜中」

山口直友者雖爲伏見城代、任滿將歸駿府、贈一封之書曰、  
已聞中山王去陸月來朝、而須拜禮 家康公、于今延引頻  
可加催促、本多正純投簡專演說、于茲如因循累日鳴發軍  
之聞、嚴譴之可告稟彼應對云云、

「正文在文庫」

尚々御人數を被催、先御使者を御渡被成、渡海仕候

様可被仰遣事專一存候、其上にても相濟不申候者、

被得御説、御人數をも御渡被成尤存候、不及申候へ

共、随分御人數を不及被渡、渡海仕候様御才學專一

存候、尚追而可得貴意候、以上、

好便之条令啓上候、仍爰許相替儀無御座候、然者當城御

番衆開東方被罷上候、就其此中在番之衆、各々駿府へ被

罷下候、我等も來月相當地罷立、駿府へ罷下候、猶追而

可得御意候、將亦琉球之儀、去六月之時分、御礼可申上

様ニ和久甚兵へ罷上申候キ、如何御座候哉、今度本上州

方被申上せ候、琉球人 上様へ御礼申上様ニ、御才覚可

然由、自拙者可申入通被申越候、若于今渡海不仕候者、

御使者琉球被遣、被成御究可然存候、兎角琉球人渡海不

仕候者、御人數をも可被渡様被仰遣可然候哉、何様彼方  
方之返事之様子被成御注進、被得御意尤存候、猶惟新様  
へまで申入候、恐惶謹言、

〔朱カセ〕  
〔慶長十三年〕

八月十九日

山駿河守

直友(花押)

薩

少將様

參人ニ御中

〔得能氏記録〕

慶長十三年戊申

三月十一日駿府ノ城焼失ノ後、再ビ御普請成就シ、今

日家康公御移徙ナリ、

八月十日 秀忠公江戸ヲ御首途、同十八日駿府ニ著御、

同二十五日本城ニ於テ御饗應アリ、 家康公ヨリ行平

ノ御刀ヲ進セラル、

九月三日 秀忠公駿府ヲ御発駕有テ江府ニ赴キ玉フ、

松平康重改賜所領事、

今年 秀忠公、松平周防守康重カ常州笠間城三萬石ヲ

召上ラレ、丹波國笹山城五万石ヲ賜ハリ、西國南海ノ

諸大名ニ被仰付、笠間城ヲ改メ築シメ玉フ、

此年 秀忠公伊達政宗ニ松平ノ称號ヲ賜フ、

同年 家康公ノ命ニ依テ、水野對馬守重仲・常陸介頼

將ノ家老トナリ、常州水戸ニ於テ采地一萬石ヲ賜フ、

池田藤松兄弟元服事、

同年池田輝政カ二男藤松<sup>時ニ十歳</sup>・三男藤五郎<sup>時ニ七歳共ニ家康公ノ御外孫ナリ</sup>

リ、 秀忠公ノ御前ニ於テ元服シ、松平ノ称號并ニ御

諱ノ字賜フ、依テ藤松ハ松平三郎忠継ト号シ、<sup>後左衛門督ニ改ム</sup>

從四位下ニ叙シ侍從ニ任ス、御腰物正宗ヲ賜フ、藤五

郎ハ松平宮内少輔忠雄ト号ス、御腰物・御馬ヲ賜フ、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ)

義久公	自慶長十三年九月
義弘公	至同十四年六月
家久公	
後 編 舊 記 雜 錄 卷六十三	

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓上候、仍而硫磺・蘭被成御進上候、本上州披露被申、則御墨印式通持せ進上申候、然者先度御國へ唐船着岸之由御注進之通、是又本上州披露被申候處、一段之御機嫌之由被申越候、然者御用之御藥種之書立進上申候、御取被成早々御上御尤存候、御由断被成間敷候、就中先度惟新爲御使本田助丞方被罷上候砌、琉球之儀申入候、到唯今琉球方無音之仕合候哉、承度存候、于今難澁申候者御人數を可被渡旨、再三彼方へも被仰遣、其上

「在官庫」

琉球渡海之軍衆御法度之条々

九月五日

薩州 少將様 參人御中

山駿河守

(花押)

難澁候者様子可被仰越候、披露可申候、先御人數を被催可被相渡御用意御尤存候、上様御礼申上候様ニ御才覚專一存候、何も追而可得御意候、將亦我等事、明日六日駿府へ罷下候、先度方以後着岸之唐船之御注進、幸拙者罷下候間、御意之御入被成候段、具可申上候、御心安可被思召候、尚重而可得貴意候、恐惶謹言、

(表紙)「恐ラク、此方慶長十三年九月出來之案文ナラン」

「樺山家文書所載のものト少しく異なる」

「只今原本御当家ニアル、照合然ルベキナリ」

一物主被仰付候衆、以談合可申出儀不可致違背事、

一喧嘩口論之儀雖不新御法度候、今度者別而可相嗜事肝要候、縦不計喧嘩出來候共、兼日如御法度、私ニ而不

相果可致披露候、若此旨を相背破事候へ、如何様之

理雖有之、不及理非之沙汰、一組可有御噉事、

一鉄炮持候衆、或しとりをねらひ、或者たてものを射

徒ニ玉藥盡すましき事、

一舟之出入おもひ／＼無之様ニ、惣別同前ニ可有之事、

一下知衆被仰付之間、彼衆可申儀相背ましき事、

一其組を相離、他之手ニ付ましき事、

一屬御手たる鳴／＼の於百姓者、少も狼藉いたすましき事、

事、

但大嶋よりこのかた泊く、右同前たるへき事、

一堂宮寺等あらずましき事、

一可相働時、類船を不待合、無人にて先懸いたすましき事、

事、

一經其外書籍等、むさと取散ましき事、

一無罪者殺害、一切停止たるへき事、

一町人百姓之類、曾而取ましき事、

一順風能不見定候而、出船いたすましき事、

一忽高四拾萬式千百八拾石五斗

一内高七万五千石 琉球渡海衆

一此人數千五百人 但百石ニ付二人役

一高三拾式萬七千石 在國衆

一出銀百七貫九百目 但一石ニ付三分三厘宛、

一内一銀子拾三貫目 玉藥代

一銀子壹貫五百六拾目 普請具代

合拾四貫五百六拾目

一米千七拾五石 琉球渡海衆壹石ニ付三合ニタテオツ、

但千五百人五ヶ月分飯米出銀之外也、

一鉄炮七百三十四挺軍衆方より出、三百石ニ付一挺ツ、

付玉藥三萬七千式百放但一挺ニ付三百放ツ、

一弓百十七張式百石ニ付壹張ツ、軍役方より出、  
ぬり弓たるへし、

付箆百十七腰但九ツから

絃三百五十一筋、一張ニ付三筋宛

一鍬三百九十七具、軍役方より出、但一具ニ付百七十文ツ、

一よぎ・なた(マ)・岩攢(マ)三百九十八同、但一ツニ付三十文ツ、

銀子九拾三貫三百四拾目、伏見番衆駿河質人入目

ニ宛置也、

慶長十三年九月六日

495 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様江爲重陽之御祝儀御服五之内、御染ニ御綾一御

南戸嶋一御しら一被成御進上候、致披露候處、御仕合共

御座候間、御心安可思召候、御内書之儀、重而相調可

進候、恐く謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕

本多上野介

九月七日  
鳴津陸奥守殿

正純(花押)

琉球渡來

軍役五十四人外六人合六十人 軍役六十一人  
 樺山權左衛門殿 平田太郎左衛門殿 右同八拾四人  
 右同十人外五人合十五人 右同十三人 肝付越前守殿  
 本田与兵衛殿 市來織部佐殿 右同六人外五人合十一人  
 右同七人外十一人外十八人 右同廿七人 柏原周防入道殿  
 穎娃主水佐殿 本田弥六殿 右同七人外三人外十人  
 右同八人外四人外十二人 役三人外一人合四人 長谷場十郎兵衛殿  
 白坂式部少輔殿 美代九郎右衛門殿 貴嶋采女正殿  
 役二人外四人合六人 右同二人外一人合三人 日高喜四郎殿  
 相良民部左衛門 西俣兵部左衛門殿 日高与一左衛門  
 右同式人外一人合三人 右同十一人外十人外廿一人 右同三人外式人外五人  
 日高与一左衛門 市來八左衛門 勝目兵右衛門  
 役三人外三人外六人 役二人外一人外式人外四人 右同十人外七人外十七人  
 法元式右衛門殿 野津安右衛門 大慈寺  
 役六人外十五人外廿一人 役一人外三人外八人外五人 役三人外二人外五人  
 村尾源左衛門入道 立山安右衛門 海江田十兵衛  
 右同一人外一人外二人 役一人 役一人外一人外式人  
 岩本弥右衛門 尾上二右衛門 色紙九兵衛  
 役一人外式人外三人 役一人外式人外盛夫人一人外四人 役一人外式人外三人  
 照存坊 染川帶刀左衛門 新納小右衛門  
 役一人外一人外式人 役一人外一人外盛夫人一人外三人 同八人外式人外六人  
 橋口彦兵衛尉 正哲 鎌田八兵衛尉  
 役十人外五人外十五人 役二人外一人外二人 同三人外一人外四人  
 伊地知四郎兵衛尉 本田弥四郎殿 久留伴五左衛門  
 役十一人外七人外十八人 同五人外二人外七人 南成左介  
 山鹿弥助 但高二百十七石ノ申候 役一人外四人外五人  
 有馬吉左衛門 鈴木宇左衛門 中村勘左衛門  
 役一人外一人外二人 役三人外五人外七人 役一人外一人外二人  
 塚田表左衛門 甲斐勝介 長田休左衛門  
 橋本助右衛門 佐多吉之允 平田民部左衛門  
 役一人外四人外五人 役六人 役十一人

「御文庫日三番箱十六卷中家久公文」

故先投書於醍醐理性院請免彼秘法之傳於一僧如左、

「家久公御請中」

家久信仰大元明王至深之餘、欲爲是崇國中國家永久之祈、  
 元錄七年甲戌九月八日 大迫六郎兵衛  
 内田才右衛門殿 參

右正本、圓清坊へ有之候、今度依懇望乍惡筆如此二候、  
 以上、  
 人数七百十三人

役一人外三人外五人 役三人外二人外五人 役廿人外五人合  
 熊本善兵衛 中嶋藤左衛門 毛利内膳殿  
 役一人外一人合二人 役一人 役五人外二人合七人  
 黒葛原孫三郎 平田次介 八木新次郎  
 郡山七郎殿 役一人外二人外三人 役一人外一人外二人 伊地知平次郎  
 役一人外二人外三人 染川才介 盛夫七人外廿七人  
 友野甲斐入道 自身主從三人 桑波田二左衛門 御道具衆卅人  
 西鄉孝岐守殿 役二十四人外廿四十五人 役三人外七人合九人 三人之内盛夫一人山川衆  
 友野次郎右衛門 友野次郎右衛門 五代休庵  
 宇多弁七 役十人 鎌田又七郎 正月十二日承衆  
 有馬次右衛門 向之嶋船大工 市成与五郎  
 右同 二人之盛夫可被下由候 正月廿二日承  
 縣之大工 内田常休山川衆 坊之大工

「家久公御譜中」

飯限山先達職近年闕如、繇焉去歲太守家久投書簡於聖護

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲重陽佳慶、小袖五到來、喜覺候、委曲本多佐渡守可申

候、謹言、

「朱力半」  
「慶長十三年」九月十日 (花押) (秀忠)

薩广少將殿

「家久公御譜中ニ在リ」

「末ニ」  
醒醐

理性院

九月十日

態一書令啓候、仍連々如御存知、我等太現明王致信向事候間、同者當國へ崇申度候、國家永々可爲長久之守護候間不淺存候、就其近比雖難申儀候、彼法を一人<sup>二</sup>迫被爲傳受候様有度候、誠々秘法不輕儀候へ共、於御納得者然々之出家一人急度可差上候間、於御入魂者可辱候、先々爲可得御内意如此候、委曲御報待入候、恐々、

「御文庫拾七番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

院之雜務坊告如舊式、今年遂容所欲賜補任、還舊務事見于伊勢因幡守入道如玄書、

猶々切々以書狀可申入儀處、不存便宜、無沙汰迷惑仕候、連々可然之様被仰上候而可給候、

其以後久不申承候、貴邊公私御無事ニ御座候哉、爰元相替儀無御座候、可御心易候、仍飯限山之別當先達之事被仰上候、日州之儀者一圓播州之南光坊ニ被仰付候間、先達事同心申問敷之旨、南光坊上洛候而種々被申候、乍去飯限山先達所之旧記御座候、其上去年從 奥州様被仰入儀候由色々申上候處、新宮様被成御同心被下御補任、今度先達被仕候、近比珍重存候、右之趣御次刻 奥州様へ被仰上、新宮様へ御礼可被仰入候、於爰元御用之儀者被仰付候様、連々御取成奉頼候、恐々謹言、

「朱力半」  
「慶長十三年」

九月十一日

友枕齋

如貴(花押)

比志嶋紀伊守殿

伊勢兵部少輔殿

御宿所

502 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

爲重陽之御祝儀、吳服五ッ進上被成候趣、披露仕候処、遠路被入御念之段、御内書被進候、隨而私へ御小袖三之内、染物式ッ薄板一送被下候、每度御芳情之至、書中難申上候、將又是式雖憚多候、此方ニ而ハ初二御座候間、惟新様へ鷹一、并貴公様へ菱喰一進上仕候、尚山口駿河守殿可被申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

九月十五日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

人々御中

503 「家久公御譜中」

「正文在大乘院」

蓮金院并廻向院相調由、以堀小左衛門尉注進之旨玆重候、弥被入精尤候、其許ニ別而辛勞候由承届候、隙明次第下向待入候、此邊相替儀無之候、委細小左衛門尉可申候、恐々謹言、

九月廿四日

陸奥守

家久(花押)

成正院

床下

504 「御文庫三番箱三卷中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

紀州高野山金剛峯寺者、眞言秘密之道場、而佛法最上之靈境也、沙弥惟新  
少將家久仰止之餘、素欲創一字之梵刹、以爲未來宿因善根、因茲令成正院頼眞遙上其山、以擇其地、雖曰山之高野之曠、有數千餘員之僧房、以故無可插草之地、頼眞可奈之何哉、於斯之時

大僧正政遍爲一山之檢校、檢校感我歸依之志、相攸於蓮金之院、欲改之一新、以爲我寺、寺地雖寸其價直百千兩金、於是

以檢校命告主蓮金者、買其院之地、以三千兩白銀、然後如渡得船、如暗得燈、即勵土木之功、命匠氏之有棟梁材者、以創建數間新寺矣、曩昔釋尊出世之後、有須達長者、擇地而布八十頃黃金、以草創祇園之寺、尔來震且扶桑創精舍者、無州無處、而有不有之矣、我之於須達其富之大小雖不同、而歸依之志、豈復有淺深乎、仰冀彼一院、与山齊其高、与水度其長、爲我嶋津氏之寺永不退轉、縱雖有乱劇之及斯山、

檢校与我金石之約、何敢違之乎、且復住於此院者、至盡未來際學侶之續挑法灯者可也、件々書以告於闔山之學侶、學侶亦勿違失之幸也、

慶長十三年戊申十月初四日

前陸奥守嶋津少將家久(花押)  
(目付ノ下ニアリ)

前薩州太守嶋津沙弥惟新(花押)

寶生院

「家久公御譜中ニ在リ」

505 右同文同年同月同日、御連名御連判、

善集院主

「卷四中ニ同文御案文殊院主宛アリ、家久公御譜中ニ在リ」

506 右全

蓮金院

「此同案、各通共義弘公御譜中ニアリ、家久公御譜中ニモ在リ」

507 右全

廻向院主

「家久公御譜中ニ在リ、同案也」

508 在同案

文珠院主

「家久公御譜中ニ在リ」

509 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

玆札令薰讀本懐之至候、殊段子三端・唐扇二本贈給候、

遼遠之所御懇志不淺候、誠如芳意良久不能向顔、且暮御

床敷候、先々龍伯・惟新御堅固由玆重存候、拙老も御同

前之躰候間、可御心易候、來春御上落之刻者、必可被寄

御船候、待存候、其節万事可申伸候間拋筆候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

十月十一日

幽齋

玄旨(花押)

羽柴陸奥守殿

御報

510 『在田代寶光寺』

知行目錄

隅州根占田代村之内

高五石九斗八升三合 浮免

右御南爲牌所被寄附候、名寄帳別紙在之者也、

慶長十三歲

十月廿八日

比志嶋紀伊守

國貞印

圖書入道

紹益

指出

一慶長三年霜月拾八日、愚息久兵衛尉於高麗番船之時、致戰死候、從夫小者者御歸朝之刻、筑州從博多表直ニ爲御奉公上洛仕候而、翌年七月始ニ川田大膳亮殿供仕下國申候、然者慶長四年三月朔日より同六月卅日迄日數百廿日自身を以御奉公仕候事、

一慶長四年五月六日、愚息甚六、主從三人、自身を以國元打立申候而上洛仕、翌年八月朔日、於伏見致戰死候、從其召列申候小者者帖佐衆ニテ御座候間、井尻半兵衛尉方へ被相付、關ヶ原御陣へ罷立、同拾月五日ニ上様御下向之比御供申候而下着申候、合拾九ヶ月、日數壹千四百五拾五日、自身ニ而御奉公仕候事、  
〔異筆〕  
〔右惣都合日數壹千五百七拾五日欵、〕

慶長十三年拾一月朔日 井尻常陸坊(花押)

〔古御文書三番箱中〕「義久公御譜中案文有之トアリ」

宿坊改替非本意之儀、得其心候、然者回向院以下向先例有來之由候、當家對貴山參詣之事、于今令中絶之条、自

他不分明之段雖相支候、歷然之由候間、爲已後證文染筆、

彼院渡置候、此上可承子細候者、於御山可被相糺事、尤肝要候、仍兩金扇子并油煙十挺珍重候、從是沈香六拾兩致進覽之候、表志計候、猶御使僧可有演說候、恐々謹言、  
恐々如何之由申候

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年、十一月九日〕

修理大夫義久(花押)

高野山  
檢校増福院

〔御文庫拾六番箱十一卷中〕

請取銀子之事

- 一銀子廿貫目者 是者鹿兒嶋方
  - 一銀子拾貳貫者 是者平松方
  - 一銀子五十目者 是者平松方入之銀
  - 一銀子貳貫五百目者 是者國分方
- 合卅四貫五百五十目

右拂方

- 一銀子九貫三百目 是者廻向院へ相渡し候、
- 一銀子四百八十匁 是者右同廻向院へ
- 一銀子廿貫目者 是者蓮金院寺家知行之代

合廿九貫七百八十疋匁

相殘而

銀子四貫七百六十九匁

一蓮金院造立ニ付而諸入目之帳

一銀子九百八拾貳匁三分

是者主殿之大工八百九十參日

作料也、但疋日疋人ニ付疋匁

疋分ツ、小日記別ニ有、

一銀子三百九十式匁六分八リ一毛一<sup>(マ)</sup>ホツ

是者主殿大工八百九十三人之

飯米酒故實之斫、但疋日疋人

ニ付貳升ツ、米合拾七石八

斗六升之代、疋人ニ付貳升ツ

、此直成ハ疋月疋月相替候、

小日記別ニあり、

一銀子九拾六匁六分五リ

是ハ小計合百八日之作斫、但

上中下ニより作斫相替申候、

小日記別ニあり、此内小座之

分廿日籠、

一銀子四拾八匁三毛

是ハ右之小計百八日之飯米酒

故實之斫疋日ニ貳升ツ、算

用米貳石疋斗六合也、米之直

成疋月ノ相替候、小日記有

別紙ニ也、

一銀子百四拾四匁

是ハ小座之大工さかい之久右

衛門尉善吉作斫也、疋人疋日

ニ付疋匁五分ツ、小日記有

別紙ニ也、

一銀子四拾疋匁八分九リ六毛

是ハ右之久右衛門尉善吉九十

六日之飯米酒故實之斫、疋人

疋日付貳升ツ、米疋石九斗

貳升也、直成右之理同也、

一銀子九拾九匁五分五リ

是ハ小座之大工高野衆九十日

半作斫也、疋人疋日ニ付疋匁

疋分ツ、小日記別紙ニあり、

一銀子三拾九匁分貳リ三<sup>(ホ)</sup>ホツ

是ハ右之大工九十日半之飯米

酒故實之斫、疋人疋日ニ付二

升ツ、直成右之同、

一銀子疋匁八百九十一匁分三リ六毛

是ハ主殿小座湯殿卷之の材木

上々の檜木其外中下の材木ひ

そ竹石なわ等の代物也、小日

記別紙ニあり、

一 銀子五百五匁三リ

是ハ主殿小座院主部屋の巻の

釘かすかい、其外主殿上段ち

かいたなのかな物、并湯殿せ

つちんニいたるまで釘等入分

の代物也、小日記別紙ニあり、

一 銀子九百七拾貳匁九分八リ二毛六<sup>(コ)</sup>ホツ

是ハしやくわんの飯米作斫

白土たゞミヤ飯米作斫、たゞ

ミのをもていとこもすへりの

とんす布、其外ぬりし飯米作

斫ニ而候こし布之代、其外振

舞踊者日養實、夫丸之飯米酒

故實之斫、薪難用等此内ニ籠

也、小日記別紙ニあり、

一 銀子五百三拾三匁二分一リ二毛

是ハ小遣、其外梳折敷振舞駄

右之小遣之内

質等分小日記別紙ニあり、

銀子六十六匁七分五リ大坂道与へ相渡し申候、

同斫足貳貫貳百五十文

銀ニノ三十貳匁ニリ同所へ相渡し申候、

一 銀子四百七拾六匁四分是ハ門之入目ニ先々相渡し申候

右、以上合六貫貳百貳拾三匁六リ一毛、内銀子四貫七

百六拾九匁有、銀ニテ拂申候、引殘而銀子壹貫四百五

拾四匁六リ一毛不足也、右之不足之内、銀子壹貫百十

三匁一分五リ一毛、青巖寺へ借用申候而拂申候、米拾

五石近付兼照院へ借用申候て方々拂申候、然者十月初

ハ、銀十匁ニ付米四斗四升ツ、仕候間、左様ニ存候て

小日記ニも四斗四升ツ、ニ書付算用つめ申候へ共、俄

ニ米たかく成申候、銀十匁ニ付米三斗八升ツ、仕候間、

右之兼照院にて借用申候て方々相濟申候、自然直成や

すく成候はんかと存候て如此候、若今の直成ニ而相通

候ハ、不及是非候、何共御算用究之刻、右之出入日

記を以可申候、算用等數日情を入候へ共、算用初ツ之

衆にて候間、御算用之砌不合儀可有之故、乍去始め神

文を以如申、少も別儀有間敷候、以上、其元々急度罷

上候へて不叶銀子之事、

一銀七貫弍百十九匁

廻向院

一貳貫目

蓮金院

一銀三貫五百め 但是ハ門の道具代、堂之天井、座敷之

繪、馬や、木や、辻へいの入め也、

一銀老貫四百四匁六リ一毛不足銀

子細ハ小日記ニあり、

四口合銀子拾四貫百弍拾三匁六リ一毛

慶長拾三年十一月十日

成正院(花押)

深及(花押)

成徳院(花押)

葛西茂衛門尉(花押)

伊勢兵部少殿

本田源右衛門尉殿

參

「御文庫拾六番箱拾一卷中」

蓮金院本堂

一三間四面左右方へ籠アリ、

一面三間ニくみのしとミ、但かす六枚、金物有、

一北之方杉障子弍間、かす四枚引手かな物六ツ、

一南之方あかり障子弍枚、わきハはた板也、

一南之方籠の面半障子弍枚、同南かわはた板也、

一うしろ戸・さん戸弍枚、奥四間はりつけ祖師垣 同本尊アリ、

一あかり障子八枚アリ、

一たゞミ九帖、但かわしきはかり也、

一本尊垣こくしつ・かな物、十八處ニアリ、但白ぬり、

一御本尊愛染明王、是ニ子細アリ、

一わきつくゑ二脚、但老脚ニ付十八處アリ、白ぬり、

一けいアリ、こくしつ・かな物なし、

一札盤半帖、かな物アリ、

一てかうろ老ツ、

右、以上ハ前任持寄進成被置候也、

一前箱檜木・あかうるし、かけこ四ツアリ、同ふたあり、

一あか水たらい檜木・あかうるし、

右之兩種者、今度致新造置成り、

但天井かりなり、此由別紙ニ申候、

以上

一護摩堂弍間方口、半障子弍枚、本堂之間切戸老枚、余

ハはた板、天井アリ、長佛壇・本尊・不動明王・護

壇・諸道具等前住持被借置処也、

以上

一 客殿よしき七間、但たゞミ廿八帖新しき被置候、

一同ふすま障子十六枚、引手かな物廿三アリ、中へたてのかな物三處ニアリ、但白ぬりナリ、同かし十式アリ、をりくぎ四ツ以上白ぬり也、くぎかくし廿四あり、白ぬり也、南かわをもて、たてくしげまいら戸、四枚アリ、しとミ三間、金物あり、但六枚、同から戸巻間、かな物アリ、同杉障子六枚、引手かな物八ツアリ、上式間新キ杉障子此度新いたし候、同あかり障子十三枚、何もあたらしく候、右之ふすま障子すミゑ山きやうの程、すこしもそんし不申候、天井上々の檜木也、ぬきあい大小白かべ、中へたて式間、くミ障子也、

一同ひろゑん巻間三間、大杉障子四枚同、くつぬき四間あり、

一 土室三間方、さん戸十二枚、あかり障子四枚、はた板

三間半、天井杉板、ぬきあい白かべ、たゞミ十六帖、

内七帖今度新成り申候、同土室巻ッうしろたな小ふす

ま障子四枚、引手四ッ内二ッハ今度新を打申候、

一 持佛堂四帖しき、北東ハはたいた、天井杉板、南西ハ

客殿、土室のたてきり長しやく三間、本尊佛道具比前住持借置申候、あか桶わけ物、あかたらいけマきあかうるし新仕候、

一 會所六帖しきたゞミ中なり、北かわさん戸四枚、あかり障子式枚、西ハ土室のたてぐ、南ハはた板戸式枚、東ふすま障子かけかねあり、但ふすま障子四枚也、天井今度新仕候、上々の檜木板也、

一 西藏三帖しき、南ハ持佛堂のしきり、西ハ土室のしきり、北ハ會所のしきり、東ハはた板、但たゞミ式帖アリ、天井板もミの板也、

一 ちこへや四帖敷、たゞミ新成申候、北ハさん戸式枚、あかり障子式枚、南ハふすま障子式枚、西ハ會所のしきり、東ハ新座又しきり、天井上々檜木板、今度新仕候、又うすへり巻帖アリ、

一 ちこへやのをくニ巻帖敷のものをきあり、同天井もミ板、今度新仕候、

一 新座高間式帖敷、たゞミ新候、但段子へり也、東ハ書院とこ、但くミのこし障子四本あり、上ニくミのさまあふきかた五ツ、さまの内ニ入申候、ほり物中きりわき梅同をもたか・かきつはた・もみし・あしをほり付

申候、南へくしかたくミ入の障子式枚、くしかたの金物きり五ツ、から草のわきかな物四ツ、敷居・鴨居けやき、兩わきはりつけ、北へ巻間のはりつけ、西ニへきりのけやきふち巻間の巻ツあり、天井上之檜木ニてしやりをたて、上ハかこニクミ申候、

一 上段四帖敷、たゞミ新候、同段子へり北へ巻間、間中の大とこ、但引付の板けやき、同はりつけ、

一 ちかいたな間中けやき板四枚、かな物十五アリ、白ぬり也、上ニ小障子、但ふすま障子也、引手二ツ、むかいはりつけ、兩わきも同、西へななど、かまい道具けやき、大金物三十、引手二ツ、座共ニアリ、ほし金物、きりのとし、きく四ツアリ、戸式枚アリ、天井上への杉また、但ふち大ひし、南の上のこかべ松かわ、

一 次之間十四帖敷、たゞミ新仕候、高麗へりナリ、東くミのこし障子八枚アリ、したははりつけ也、西へふすま障子四枚、わきニ巻間、間中のはりつけアリ、引手金物八ツアリ、ふすま障子中ニさかわ三ツ、ほし六ツアリ、皆白ぬり也、天井上へ檜木板也、釘かくし卅七アリ、皆白ぬり也、

一 ひろ多ん巻間与三間、間中敷板上の檜木、同天井上の

檜木かゞミ也、南ニ杉障子巻間、但引手四ツアリ、かけかね二ツアリ、白ぬり也、同をちゑん間中とをり、南ニ妻戸巻本アリ、東ニ兩戸四間、間中戸袋アリ、上のれんし障子三枚、つきあけのをり釘・ひちつほあり、かす六くさり中をり釘同ほしかな物多んニ四ツアリ、

一 院主部屋六帖半敷、土室アリ、つりたなアリ、とこたなアリ、西さん戸四枚、北ニ式枚、あかり障子式枚アリ、天井アリ、同うすへり式帖、御座式枚アリ、

一 小座三帖大め道具何も御座候分あたらしき也、かつて式帖半敷、ちかいたなアリ、但ふすま障子式枚アリ、引手二ツアリ、但しやうからくり中ニアリ、しやう共ニかつてニ天井アリ、ひらき戸巻本、院主へやかつてとのあいのさん戸式本、但中しやうからくりアリ、

一 湯殿四帖敷たゞミ式帖、うすへり式帖、何もをもてかへあたらしく候、ふすま障子式枚、さん戸四枚、とこあり、本湯殿式帖敷也、其外次の湯殿式帖しき方也、但巻間半れんしあり、南面ぬれ多ん、すのこあり、中ニいつゝあり、

一 せつちん上<sup>少クマヘ</sup>次のせつちん一ツ、但さんと三枚アリ、一 藏北南へ三間、西東へ四間あり、した板しき、土戸あ

り、まど四ツ、但くろ金のこアリ、土戸障子皆之アリ、  
二かいアリ、たゞミ三帖アリ、藏と會所の間ニこし障  
子式本アリ、藏のまゝ沓間半四間、なかまあり、こし  
障子四枚アリ、式間のせんたな有、藏の西ニ味噌へや  
アリ、雑舎分、

一をへやへやたゞミ十帖敷、但中ニ土室アリ、杉障子四  
枚、まいら戸式枚、ふすま障子四枚アリ、

一次のへや六帖敷、但間ニへたて障子三枚アリ、内へや  
式帖敷たゞミ沓帖アリ、さん戸九本、あかり障子四枚、  
はた板八間、西わらや沓間方アリ、南かわニ妻戸沓本  
アリ、東南西ニゑんアリ、くつぬき四間アリ、

一たいところ北南へ三間西東四間、間中中ニ土室アリ、  
東のかわニこし障子六枚有、北ニはた板式間アリ、二  
間のたなアリ、西ニ大戸沓本アリ、はた板式間、半障  
子一ツアリ、

一うしろへや式間方、たゞミ古キの五帖アリ、中土室ア  
リ、東ハ沓間半、はた板戸一枚、北ハ戸式枚、はた板  
沓間あり、障子二枚アリ、北ニすのこアリ、西ハはた  
板沓間アリ、戸式枚アリ、

一内へや沓間方、

一内へや沓間方、へきりはた板沓間有、

一中間へや沓間方、東ニはた板沓間アリ、南ニかりはき  
戸沓枚アリ、中はた板也、西はた板沓間、北はた板沓  
間アリ、妻戸沓本アリ、西ニ沓間、間中四尺のゑんア  
リ、

一下せつちん式間アリ、

一中門からはふさま戸式本アリ、兩わき白かべのへい三  
間、けんくわんあり、

一大門戸ひら二ツ、左右白かべのへいなり、右院内之諸  
道具、造作中ハ從蓮金院御かし候、又者私具を取合調  
候、當時留主番彼是ニ付事覚候分買物之小日記ニ御座  
候之分一々不覚交割ニ渡置ニ候之事明鏡也、爲後日之  
如此候、已上、

慶長十三年  
十一月十日  
葛西武右衛門(花押)

深及

成正院(花押)

平松  
御役人中  
參

515 「義弘公御譜中」

「正文」

尚々彼院草創 頼朝之御願所久闕志仕候處を、拙僧弟  
子被致再興候、今度御造宮付而方々新地見立候得共、

似合所無御座候故、致□□境地已下如形所之条、成院  
一段御満足候、猶來春以使僧可申上候、隨而油煙十挺

・筆十對令進上候、補書信迄候、

依の便令啓上一緘候、仍御建立之院家造早、學問所御茶  
之間一段奇麗、於當山古今希有之由風聞候、偏成正院之  
御工夫神變奇特候、殊更曉者行事、晝者作事等寸以無休  
息躰、寔上様勇猛之行儀所感不淺候、乍去晨昏之御苦勞  
無申測候、尤今般以使僧可申上候處に、渡海寒天旁以致  
延引候、曾非慮外候、只仰御芳免計候、御上洛之次被成  
御登山、彼院御一覽如何、來年拙老寺役已滿候間、貴國  
罷下可遂尊顔心底候、併齡既及蟻宿候之条、徒步遠帆難  
叶存候、春者必以野僧御礼可申上候、恐惶頓首謹言、

「朱かき」  
「慶長十三年」

十一月十日

「本ノマ、」  
青巖寺

法印政遍(花押)

鳴津法印惟新様まいる

人々御中

516 「國老用人記」

一慶長十三年十一月十三日、自平松加治木江御移、十二  
年御在城、御家老、

伊勢平左衛門

本田源右衛門

御使衆

新納李右衛門入道

一甫

右源右衛門儀、平左衛門死去ニ付御家老職被仰付、中一  
ヶ年相勉死去、從夫種子鳥左近大夫鹿兒嶋ヨリ差引被相  
勉、御家老無之御使衆ニテ被爲濟候ト云傳候事、

「右ノ如ク十三年十一月、加治木御移云ミアレトモ、十三年申正月ヨ  
リ加治木御日記アレハ、十三年御移ハ誤ならん、後考ニ供ス」

517

「家久公御譜中」

「正文在喜入安房久死」

犬追物手組圖取慶長十三年十一月十七日

少將殿

土岐中務少輔

鳴津又太郎

鳴津下總守

鎌田玄番助

菊池刑部少輔

鳴津善四郎

山田民部少輔

三原次郎四郎

澁谷石見守

鳴津攝津守

鳴津左京亮

檢見

喚次

鳴津十郎左衛門

本田大炊大夫

518

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚々自是以書狀成共可申上處ニ遠路故無沙汰申上候、

御用之儀候者被仰聞可被下候、以上、

先度者思召寄預御懇札、殊琉球酒一壺被懸御意候、別而

忝賞翫仕候、仍從九月初駿府江戸へ我等子共召連、御見

廻申上候處ニ、兩 御所様非大形御懇切之御様子ニ而、

御鷹・御腰物・御服・御馬色々父子共致拜領、去月罷上

申候、東玦敷御沙汰無御座候条可御心易候、何にても上

方相應御用候者可承候、旁追而可得御意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕

十一月廿三日

片市正

且元(花押)

鳴津陸奥守様

御報

519

「家久公御譜中」

「正文在蒲生土溝尾彌左衛門」

龍眼之菓子二箱、遠境之吳産悅覚候、委曲土井大炊助可

述候也、

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕十二月廿四日 (秀忠)  
(花押)

薩广少將殿

520

「家久公御譜中」

「正文在禪山助太郎」

態用飛札候、仍肥後之儀可相替様風説共候、其表何分取

沙汰共候哉、実儀難計候へ共、先々爲心得如斯候、縦如

何様之出合候共、境目之儀諸事無緩可被申付事肝心候、

不寄何時新儀共候者、早々此方へ被申越候へ、以其上致

分別、様子可申付候、不可有油断候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕十一月廿四日 家久(花押)

栴山權左衛門尉殿

521

「家久公御譜中」

「正文在宮之原越右衛門」

貴翰拜誦、殊ニ燒酒壺御惱之段、畏悦之至候、此中積氣

候、別而賞味<sup>〔不カ〕</sup>□淺存候、抑去夏細々得御意過分候、御鞆

足驚目候、先度見事之重香合見當候、秘藏候事候、來春

於御上落者、節々鞆興行可仕候、蹴鞆一卷可令進獻と存

候處ニ所勞故于今 不進候、猶追而可申伸候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕仲冬廿六日

〔飛鳥光〕  
雅庸

陸奥守様  
人々御中

理安 口 口

喜入大炊助  
久正(花押)

兒玉四郎兵衛尉殿  
〔實相〕

522 「北郷久加譜中」

慶長十三年戊申、久加五歳、而奉 嚴命爲證人赴關東、此時 龍伯公賜景光脇指、嚴親三久附與重代之粟田口國綱之太刀・備前吉房之寶刀、而後來宜讓家督爲證焉、十一月二十七日發平佐、翌年二月到城州伏見、而代北郷二郎忠能矣、

524 「兒玉筑後譜中」

一慶長十三年戊申、先是實相自フナキヨシ謙從軍朝鮮、且名士亦使得乘行、至是十二月廿四日、實明公賞其軍勞、加賜實相田祿參拾斛於大崎今田村日諸縣地之内、乃國老平田久兵衛尉宗親・山田越前入道理安・喜入大炊助久正俱與感贖以授之、

523 「真本兒玉氏藏」

日州諸縣郡大崎今田村之内知行目錄

浮免

高三拾石

順阿弥先

高麗退治之刻、自船自力ニ而渡海仕、殊歴々以同心軍役被相勤之故、右之領地爲加增令配分者也、

慶長十三年  
十二月廿四日

平田久兵衛尉  
宗親(花押)

山田越前入

525 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲歳暮嘉慶、小袖十到來、悅思食候、委曲本多佐渡守可申候也、

〔朱力キ〕  
〔慶長十三年〕極月廿六日 (花押) 〔秀忠〕

薩广少將殿

526 「正文在文庫」

爲歳暮之祝儀、小袖十之内綾二到來、悦思召候也、

十二月廿八日

○「墨印」

薩摩少將殿

527

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲歳暮之御祝儀 公方様へ呉服進上被成候趣、酒井雅樂頭を以披露仕候處、遠路被爲入御念候段喜被思食、御内書被進候、次拙者へ御小袖五内さや・なんと嶋・染物・熨斗目被送下候、毎度御心付之段、書中難申上候、委者爰元之様躰御使者可被仰達候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十三年」

十二月廿九日

本多佐渡守  
正信(花押)

鳴津陸奥守様

人々御中

528

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲音信、榕柑二箱到來、喜悅候也、

「朱カキ」

「慶長十三年」十二月廿九日

○「墨印」

薩广少將とのへ

529

「家久公御譜中」

中山國王于今不來朝、故以使者上言航軍、本多正純達家康公之高聽、則許可之、雖然渡帥之時節、猶以使者告稟今一窺台意可通曉其趣、事備于山口直友書、

530

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶申上候、私へ段子五端、忝奉存候、猶來春萬吉可申上候、以上、

先度被成御上せ候御進物、段子・硫磺之儀、関東より還御被成候間、則使者を差下、本上州まで申越候処、則披露被申、御機嫌無殘所由被申越候、貴殿様へ本上州方之御返狀・拙者かたへの返狀爲御披見進候事、

一琉球へ之儀、御人數可被出旨、是又披露候へハ、尤之旨 御説之通被申越候、雖然今一往得 御意可申候条、いつ比渡海可被成候哉、たしかなる御使者早く被成御上候者今一往得御意様子可申入候、弥琉球へ御行可被成御用意被成、今一往被得 上意可及御行事專一存候間、重而御左右相待可申候事、

一伴天連被 召出一段之仕合ニ御座候、拙者かたへ伴天連方申狀候間、是又進候、伴天連うら川と申所へろそ

んふね着岸ニ付而被罷越、彼地方書狀越候間、爲御披見進上申候事、

一 吳國へ之 御朱印之儀、相調急度可被差上之由、本上州より被申越候、雖然御法度ニてさいゆうとハ不被成之由候、かほちやへと可被遊之旨候、いかゞ可在之候哉、これ又追而進上可申候事、

一 御所望之御藥種之書立、宗哲法印承候て注文參候間進申候、無御由断今度着岸之唐人ニ御詔被成、相調候様ニ唐人へ可被仰付候事、專一奉存候、猶御使者へ申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十三年〕  
十二月晦日 山口駿河守 直友(花押)

嶋津陸奥守様  
參人ニ御中

(此ニ内表紙書入アリ)

自慶長十三年至全十四年

琉球征伐日々記其他、此冊中ニ追テ編纂スヘシ  
續『薩  
編藩』 舊記雜錄卷二十六

531 「古御文書」以下二十五通 拾番箱中」 「家久公御請中ニ在リ」

以上

御書謹頂戴、忝奉存候、仍於當山一字御建立之儀被仰出候故、成正院御登山之折節者関東下向故、御馳走不申上背本意候、併蓮金院相調珍重存候、彼院者古來之名跡ニ候、目出度存候、舊冬以來就大佛御再興、東山ニ居住仕候、委曲成正院可被仰上候、誠惶誠恐敬白、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕  
正月五日 文殊院(管地カ) (花押)

進上  
羽柴奥州様  
人ニ御中尊報

532 「義久公御請中」

呈琉球國王書

貴國之去我薩州者二百餘里、其西島東輿之相近者僅不過三十餘里、以故時時有聘問聘禮、以修其鄰好者其例舊矣、就中我宗子之嗣而立、則畫青雀黃龍於其舟、以使紫其衣者黃其巾者二人爲其遣使、篋厥玄黃來、而結髻於右髻之上者奏衆樂於庭際、蓋致嗣子之賀儀也、今也遺崇元寺長・宜謨里主載其方物來、以賀我家久之嗣而立、又攀舊例也、

我今寄言於國君、勿以我之言厭之、日本六十餘州有源氏

一將軍、以不猛之威發其號令、尺土無不獻其方物者、一民無不歸其幕下者、是故東西諸侯莫不有朝覲之禮、我今雖去魔府之任、每歲使親族之在左右者行以致其聘禮、況家久爲國之宗主、豈不述年年之職乎、貴國亦致聘禮於我將軍者、豈復在人之後哉、先是我以此事告於三司官者數矣、未聞有其聘禮、是亦非三司官懈於內者乎、今歲不聘、明年亦懈者、欲不危而可得乎哉、且復貴國之地鄰于中華、中華與日本不通商舶者三十餘年于今矣、我將軍憂之之餘、欲使家久與貴國相談、而年年來商舶於貴國、而大明與日本商賈通貨財之有無、若然則匪翅富於吾邦、貴國亦人人其富潤屋、而民亦歌於市、抃於野、豈復非太平之象哉、我將軍之志在茲矣、是故家久使小官二人告之於三司官、三司官不可、將軍若有問之、則家久可如之何哉、是我夙夜念茲而不措者也、古者善計國計家者、雖大事小者有隨時之宜而爲之者、况復小之事大者、豈爲之背於其理哉、其存焉與其亡焉共在國君之舉而已、伏乞圖之、

慶長十四年二月

龍伯法印

拜呈 中山王 閣下

533

『兒玉筑後譜中』

『一』慶長十四年己酉初、琉球國附庸於我 藩者久矣、間歲不貢、以故 公白事乎 神祖、是歲二月、及 松齡公次于山川、遣樺山權左衛門尉久高・平田太郎左衛門尉增宗爲將、率水兵三千餘餘艘、往伐琉球、時 命利昌亦爲卒將、領數根福山兵以行、二十一日發至山川、三月四日屬久高等揚帆山川、行取大島及德島等、四月與入運天、進圍首理城、國王尚寧乃畏乞和、五日遂以城降、於是五月及久高等攜王尚寧反自琉球、 公乃賜利昌等酒犒之云、

534

『兒玉筑後利政傳ニあり』

一慶長十四酉年、琉球國<sub>ニ</sub>御人數御差向被成候刻、筑後事、數根・福山衆中御預<sub>ニ</sub>而渡海仕、彼地<sub>ニ</sub>而雜兵共數多討取爲申由申傳候事、

〔外數条略之〕

兒玉四郎兵衛 【利言】

元祿十四年己八月廿三日

535

『雜旧記』

(本文書ハ四九六号又書ト同又ニノキ省略)

536

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以寄思召被仰下候儀、一入忝御事共ニ御座候、以上、

其以來者久不得貴意候處、示被下忝拜見仕候、仍此地御屋形御普請被爲入御念被仰付之由候而、兩御所様御機嫌能御座候キ、誠御造作共申計無御座候、然者爲御音信与、爰元弥敷卷物三ツ送被下候、如尊書之到來仕候、御芳情之至、書中ニ難申上候、猶御使者可爲言上候間、奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十四年」

二月十六日

本多佐渡守

正信(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

537

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々去年御上被成候御藥種、御悅喜思召候、只今申入候御藥種御尋被成、おのほせ專一存候、猶和甚兵衛可申上候、以上、

追而申入候、仍旧冬御のほせ被成候御藥種披露仕候、一

段御祝着思召候、然者其以後御藥種二種書付進上申候、昨今又注文伊兵少まで進候、御尋被成御進上可然存候、拙者も可□入旨 御錠候、右之御藥種之中不足御座候共、一種二種成共、片時も御いそぎ被成、御のほせ御尤存候、猶伊兵少可被申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」

二月廿日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參人ニ御中

538

「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

其已來再三如令通信、亀井武藏守望爲球國之主、既欲有渡楫、予依修旧約、聞之於前 大閤殿下、因茲全免其難、于今國家雖爲安全、忘夫其恩、加之朝鮮追罰之刻、琉球國役可寄副當國旨、就 殿下之尊命備一年之少納、從其以降急之、并先年琉球國飄蕩之船衆、以有 左相府哀憐之厚意、無恙到本國雖致送之、欠其報禮、酷被背本意者也、別而大明与日本商賈往來之儀、從其國可致媒介由請左相府之鈞旨、令一使告之、貴國者堅雖爲領掌、今更違變重疊之疎略非沙汰之限、是故琉球國忽可誅罰之段、被成下 御朱印、急々兵船有渡海之儕裝、嗚呼其國之自滅、

豈可恨誰人乎、雖然頓改先非、大明日本通融之儀於被致

調達者、此國之才賞、愚老隨分可遂入魂、若然則球國之  
可有安隱欵、誠難捨往古好故、懇呈一章、伏乞答書、勿

移時日、日夜待之、猶委曲兩使可有演說、恐惶不宣、

日本慶長十四年仲春後一日

「義弘公御名ナ」

進上 中山王

「義弘公御譜中ニ在リ、案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

539

「義弘公御譜中」

去年者適爰許迄被成下向候處、爲何風情も無之、誠無調

法之儀、于今殘多存事候、御上國之後者遠方故、以書狀

も不申通、無音心外候、然者於爰元誂申候脇さしのごし

らへ早く出來申候者、此庵齋へ御渡候而可下給候、猶期

來音候、恐々謹言、

「朱かき」

「慶長十四年」

羽兵庫入

惟新(花押)

正阿弥

宗喜老

御宿所

ノ

ハ

宗喜老

まいり

惟新

540

「家久公御譜中」

「稽琉球國者、揭薩陽三百里、而在于南海中、彼國開闢而

有天孫氏者有之、觀其地界于萬濤間蟠旋蜿蜒、若虬之浮

水中、因名曰流虬、大業三年、即大業元年間、隋煬帝命羽騎朱寬求  
異俗于流、始到球國、觀地界萬濤間蟠旋蜿蜒

若虬之浮水中、故名云云、唐宋時未嘗朝貢、元遣使招之  
不從、至洪武元、即洪武元年始通中國朝貢以時

朝武勇蓋世、遇保元之亂蒙罪流于伊豆大島、于是非但管

領大島已也、至于二條帝之永萬年間、乘舟順流而至于流

虬國、隨改名曰流求、后至大明洪武十六年、皇帝改流求爲  
琉球之名、古典所謂大琉球是也原來流

求人未知征戰、一見爲朝武勇、如草加風無不順服、爲朝

居處日久、通于大里按司妹、乾道二年、倭六條帝  
仁宏元丙戌生一

男、是名尊敦、爲朝居之日久、故鄉之念自難忘、竟乘船

而歸矣、尊敦從母至于浦添居、漸長居動異常器量出衆、

南宋淳熙七年、和藹會帝  
治承四年庚子年十五歲、國人尊爲浦添按司、

政治不違聖賢之遺法、時天孫氏二十五代、爲逆臣利勇見

弑、浦添按司起義兵伐利勇以定國家、諸按司皆尊浦添爲

中山君、是曰舜天王、爲其人修德行仁、英雄無比、國人

歸之、右鬢上生一肉角、常欲掩其角、故右鬢上結髻、國

人皆法之、始結欵髻、至第四世玉城王、世衰道微、國中

爭戰殆數十年矣、于是國土三分以成鼎足之勢、曰中山、

曰山南、曰山北、玉城世子西威王德不明、國人多叛之、

薨後諸按司廢其世子、皆推浦添按司為中山察度王、世子武寧王德不明、時山南王尚巴志政道由仁、四方之民欣然樂服、彼二山半歸之、終發兵一統三山、六世之孫尚德王不德而賊害生民、故國人歸于尚圓、尚圓率其所叛之士民、服事尚德王、然其惡日久、尚圓不得已稱病陰、尚德薨、

世子將立、而群臣弑之立尚圓、尚圓不得辭而登君位、尚圓王原是葉壁山伊是名首見之人也、尚圓七世之孫曰尚寧、抑琉球國者自古本朝附庸之國也、永享年間、將軍義教公感薩隅日三州之主陸奧守忠國之忠功、以琉球賞賜之、爾來世世獻貢船于州主、其船畫青雀黃龍、號之文船、有慶

弔之禮亦獻文船、然至慶長年間、中山王尚寧匪蓄忘苞桑之戒、緩貢期、當大相國家康公盡討亡逆賊平治天下振威海外之時、不致敬服之禮、于是降台命於陸奧太守羽林家久、催促渠來朝、家久遣使投書、而再三雖譴責之不肯順、故上言其罪大相國及大樹秀忠公、以請伐之、

乃聽焉、於是家久起兵使樺山權左衛門久高・平田太郎左衛門增宗為將、二月二十六日以家久及龍伯・惟新連花押之軍令書授之、本伊賀親政武頭鹿兒島方市來備後家政上市來八左衛門家繁上、有馬次右衛門重純兵具、長谷場十郎兵衛實純上、山鹿越右衛門鎮幸船奉行、本田彌六親正・穎娃主水

親智・平田民部左衛門宗位・伊地知四郎兵衛重賢・白坂式部篤利・毛利内膳元親・村尾源左衛門入道笑栖・柏原周防入道有閑・伊集院半右衛門久元國分方武頭、佐多越後忠增・東鄉安房入道休伴・兒玉四郎兵衛利昌・川上掃部直久治

木方武頭、以下相從士百餘人、其兵都合三千餘人、鐵艦一百餘艘、慶長十四年三月四日之曉天、解纜於薩州山川灣、時家久立馬于灣上指揮、惟新亦臨于茲、久高・增宗奉嚴命爭先出船、直望球國進發、先到大島悉入手裡、而赴德島、島人嚴拒之、我兵急擊屠殺數百人、島人大恐僉服從、聞其威風永良部島草偃、而後進軍船到于運天津、時國王之弟具志頭、三司官浦添・名護・謝那掉扁舟來、使西來院

請降、然其真偽未可知焉、同月二十日、家久正憐將帥士卒等遙凌萬里之波濤、軍勞於外國之苦、使若切彥兵衛國信温酒三十樽賜士卒、且與書簡於久高、而降軍令、既而久高・增宗三月盡、發軍船嚴武備到大椀津、明日欲到那

霸津、有張鉄鎖于津口守之之聞、以故四月一日、分軍自海陸發向、放火民屋攻入都門、國人雖防戰、吾軍擊走之、遂圍王城首里、天孫氏始築中山故曰首里、欲急攻破之、於是國王尚寧乞和、久高・增宗應之、因同五日尚寧下城、於是久高使飯牟禮紀伊介光家・貴島采女賴張捧捷書於州主、乃家久馳

使介上言、則 兩御所稱美不少、出兵於異域速平治逆賊、其功莫大、以 台書感之、且 大相國即以 台翰錫琉球於家久、載可施治政於彼國之旨、加焉龍伯・惟新亦 兩御所賜 御感之 台書、本多正信・正純父子亦以奉書稱美、家久之勲名益藉甚也、而久高・増宗以尚寧及按司・三司官以下載之、五月五日發琉球、同二十五日、愷旋慶府奏軍事之始末、家久以樽酒勞兩將及士卒、與感牘、且賞賜有差矣、

541 「北郷忠能譜中」

慶長十四年己酉二月、太守家久公以樺山權左衛門尉久高爲將征琉球、北郷四郎右衛門尉久武率兵百二十餘人航于琉球國、先征大島・德島、同四月、到王城首里、國王尚寧乞和屬 太守公之旗下、同五月、與諸軍共歸國矣、同年三月、忠能自伏見下國、

542 「樺山權左衛門久高譜中」

夫琉球國者自古昔屬 太守旗下所以進貢之國也、雖然頃年亂舊規不納貢、再三遣使節誘之、而不敢聽、是以不得已、而有征伐之企、于時久高爲大將、平田太郎左衛門爲

副將有可渡海之命、且賜法度之條目、

543 「忠元勲功記」

慶長十四年酉二月、御人衆琉球江被差渡時分、大將は樺山權左衛門久高、副將は平田太郎左衛門増宗江被仰付、其外物頭以下諸士百餘人、鹿兒嶋戸柱祇園洲より乗船有之、爲暇乞見送り候衆など、洲の上に筵を敷餞別いたし候由、其節忠元茂罷越候処、平田ハ乍副將老年、久高ハ大將被仰付候へとも、年若にて、何篇増宗ニ被差讓躰ゆへ、諸人の所見茂其向ニ見得候、即其日の座席茂高座ハ増宗に被讓候を、忠元心付直ニ立行、久高の手を取り引候て、大將の御座ハ此所と高席ニ被直上候得は忽威猛格別相付、それより諸人崇敬も実ニ大將取持と爲相成由御座候、

544 「正文在樺山助太郎忠賜」

琉球渡海之軍衆法度之條々

一物主相定候間、彼衆以談合可申出儀不可違背、  
一喧嘩口論之儀不新雖爲法度、今度者別而各可相嗜事可爲肝要候、縦不圖喧嘩出來候共、兼日如法度私にて不

相果、重而可遂披露、若此旨を相背於破事者、いかや

うの理雖有之、不及理非之沙汰、一組可處罪科也、

一鉄炮もちたる衆、或し、鳥をねらひ、或たて物を射、

いたつらに玉薬をつくすまじき也、

一船之出入おもひ、に無之様ニ、惣別同前ニ可有之也、

一其組を離他の手に付まじき也、

一手に入たる嶋、の於百姓等者、少も狼籍いたすまじ

き也、付従大島此方泊、右可爲同前也、

一堂宮寺等あらずまじき也、

一可相働時、海陸共に惣人數を不待合、無人衆にて先懸

いたすまじき也、

一經其外書籍等むさととりちらす間敷事、

一無罪者殺害、一切可爲停止也、

一順風よく不見定不可致出船也、

一取人一切可爲停止也、

一下知衆可申旨を不可相背也、

右條、堅相守不可違背者也、仍法度如件、

慶長十四年二月廿六日

家久(花押)

惟新(花押)

龍伯(花押)

「家久公御譜中ニ在之」

545 『樺山氏藏書』

覺

(家久)  
(花押)

一琉球よりあつかいを入候ハ、無異儀其筋ニ可有談合  
事、

一いつれのみちにも利運ニ相濟候ハ、少も無逗留、早  
々軍衆六七月之比者可引取事、

一琉球曆々の人質、其外嶋の頭々の者迄質人を取  
候て當國へ引こし、琉球向後の諸役儀於此方可相定事、

一自然琉球國主居城ニ取籠、なく籠城のかくこと相見  
候ハ、悉焼ハラひから城計ニ成、人數少もためらハ

す引取、あたりの嶋の者人質を取手に付候て可爲  
歸陣事、

一兵糧米おさめさせへき事、此中琉球人の申付たるより  
いかにもかるくおさめさせへき事、

右條、不可有違變候也、

慶長十四年三月

(久高)  
樺山權左衛門尉殿

「家久公御譜中ニ在リ」

「樺山久高譜中ニモ在リ」

546 『樺山氏藏書』

今度者琉球渡海辛勞之段難述筆紙候、仍彼表法度之儀  
龍伯様 惟新様得御意相定候、其外心持可入儀共、兵部  
少へ申合候、熟談可爲簡要候、謹言、

〔朱力キ〕  
「慶長十四年」三月四日

家久(花押)

樺山權左衛門尉殿

〔上包〕

樺山權左衛門尉殿

家久

「家久公御譜中、正文在樺山助四郎久治トアリ」

「權左衛門久高譜中ニモ在リ」

547 「在御文庫廿二番箱十卷中」 「義久公御譜中ニ在リ」

慶長十四年琉球入之首途に、

龍伯法印

むかふ風あらぬは梅のにはひかな

548 「正文在青山兵右衛門」

昨日之 尊書、今朝辰刻到來、拜見奉得其意候、先以御  
氣色別儀無御坐由、目出度候、仍於山川琉球人を種々毎  
候由、被聞召付蒙仰候、御尤候、琉球渡之船共此曉皆々  
出船仕候、於琉球之法度い、かにも堅申付候間、可御心易  
候、惟新様者今朝被成御歸宅候、我等も臆而罷歸可奉得  
尊意候、雖不及申上候、御養生專

〔朱力キ〕  
「慶長十四年」

三月四日

陸奥守

家久(花押)

進上 龍伯様

「家久公御譜中ニ有之」

549 「國分宮内澤氏藏」

「キル、」

一九百六拾人

一三千八百四拾人

一四百八拾人

一千式百六十人

一六百卅人

元巢へ付立文祿元年三月より  
同三年ノ四月迄廿六ヶ月ニ歸朝申候事、

馬越衆養田主馬丞方へ立ル夫丸耆人、文祿二年  
二月ヨリ同四年九月迄卅二ヶ月ニ歸朝仕候事、  
主従四人高麗へ文祿三年二月ヨリ慶長元年ノ九  
月迄卅式ヶ月ニ歸朝申候事、但自力にて

蒲生衆福崎甚作方京都へ被罷登候付立夫耆人慶  
長二年三月ヨリ同三年ノ六月迄十六ヶ月三罷下  
候事

蒲生衆大河平原太左衛門尉方伊尻八郎方へ立夫  
丸二人慶長二年四月より同三年之十二月迄廿一  
ヶ月ニ歸朝申候事

主従三人高麗へ慶長三年六月ヨリ同年十二月迄  
七ヶ月ニ歸朝申候事

一千七百拾人 主從三人京都へ罷登閑原へ直ニ御供仕、慶長四年三月より同五年之九月迄十九ヶ月ニ罷下申候事

合老万四百四拾老人歟

〔年間ナ〕

六月十二日

伊東作右衛門尉

〔國分宮内沢氏藏〕

宮内

伊東栄右衛門

高麗陣覚書加増目錄写

〔御用紙紛失仕候〕

夫丸老入仕立申候事、

一同年四月高麗へ蒲生衆井尻八郎殿・大川平源太左衛門

殿兩人へ夫丸仕立申候、御引陣迄召置候事、

一慶長三年六月打立申主從三人、軍役之外ニ泗川へ參、

御引陣迄相詰、直ニ京都へ御供可申処ニ、番船取合之

刻、道具等皆々捨、其上手負申候故京都へ者御供不申

候、老岐嶋より御暇被下、十二月十七日ニ在所へ參着

申候事、

一慶長四年潤三月廿日ニ京都へ主從三人罷上申候、御盛

可被下之由候へとも、罷在候而より跡ニ追付、一石ニ

付八十七文反錢可有之由候、我等持分之高ニ引合、御

扶持方皆々ハ不被下候、在國之人數ニ者出錢不相懸候、

其砌吾々同前ニ罷立候人衆多々御座候事、但不足之錢十三貫八百文ニ而候事、

一從京都直ニ関ヶ原へ御供申罷立、廿二ヶ月ニ下向申候事、

一横川へ罷居候砌、五分一上申候刻、我々者肝付之知行無足仕候へ共、少々相殘申候内、大始良之内老町二三反堀蘭門一ツ差上申候事、

慶長十四年

三月五日

伊東作右衛門判

〔義久公御譜中〕

〔正文在大隅宮内最勝寺右京〕

宮内最雲寺

薬師免目錄

宮内

内山田村之内

からすき

上田六畝六歩九斗九升二合

吉右衛門尉

同所

上田老畝十八歩二斗五升六合

同人

野崎ノ後

中島五畝六歩五斗二升

右京亮

同所

上島式畝十歩式斗八升

同人

見次之内

屋敷老段老石

最雲寺

寺家地

合參石外余四升八合

右知行、 竜伯様御當病ニ付御立願成就之故、雖爲少地令寄附者也、

已上

慶長十四年

三月十五日

平田久兵衛尉

宗親(花押)

山田越前入道

理安〇〇「墨印」

喜入大炊助

久正(花押)

552

「家久公御譜中」

「正文在御炊大夫」

奉寄附知行百石之夏目錄在別紙

右旨趣者、爲國家安穩 武運長久 子孫繁榮也、仍狀如件、

慶長十四年三月十五日

家久(花押)

御炊大夫殿

553

「榊山權左衛門久高譜中」

慶長十四年己酉春三月日、解纜於山川渡難海赴琉球國、

軍勢之中廳島方以本田伊賀守・市來備後守家政・同姓八

左衛門尉家繁爲物主、以有馬次右衛門尉・長谷場十郎兵

衛尉爲兵器之司、以山鹿越右衛門尉爲軍船之司、本田彌

六・穎娃主水佐・平田民部左衛門尉・白坂式部少輔・伊

地知四郎兵衛尉・毛利太郎兵衛尉其外步卒數多、又村尾

源左衛門入道笑柄・柏原周防介等者率須木・松山之步兵、

國府方之軍伊集院半右衛門尉・佐多越後守忠増・東郷安

房入道休伴・兒玉四郎兵衛尉利昌・三島九郎左衛門尉、

加治木方川上掃部助等各引率其諸所之步兵共三千余員、

鐵籠亦殆庶幾于一百、發遠帆於一時周覆蒼海、茫茫大洋

風波之無勞煩、未有幾程著于大島之岸、深江之浦、振武威撫庶

民、而後渡于德島、島郎士民出應海岸有爲防禦者、雖然

累日不得支、即日敗走、時斬首者數百、是以殘黨悉屈旗

下、故渡永良部島、庶民一人之無背命令者、且亦教之以

耕圃之業、而後渡運天之津速欲到于那霸之津、而爲逆風

所留、丁此時國王之弟具志頭、三司官浦添・名護・謝那・

西來院等棹扁舟來請和、彼等之眞僞未窺計知、而任所命

之條目強不辭令許容、以件數輩爲指南、而先到于大腕之

津、明日悉欲到于那霸之津、爰有設鉄鎖於津口之聞、有

鐵鎖、則豈得一船之入津限乎、且亦無他江之可繫軍船、

是以四月朔日、令物主等之乘船五六艘以件之指南到于那霸津、其餘悉上陸地手干戈共以進向、有防禦之向敵、則

競前得屠殺、且道路之放火家屋漸入都門圍首里城、于時國王・三司官實請和而降、故不血刃而唱凱歌畢、

既解纜於山川以往、日本之舟船未一隻之有到者、回首伏仰以見海洋、則開布帆於順風、忽有來著、問之、則曰

太守之使節、少焉使者到而所賜之昇教帖、加朝服珍戴百拜、而後正席開緘所以拜讀也、其書記左方、

554 『樺山氏文書』

出船以後之到來無之間、爲見廻岩切彦兵衛尉差遣候、先勢者永良部へ去五日、皆々無異儀着船之由其聞候、爲順風吹續由候間、漸至琉球可爲着岸候、兼日如申含候、早々明隙六七月之比者歸帆簡要候、先々當時之樣躰彦兵衛尉へ委被相舍、則注進尤候、仍大樽三十遣之候、軍衆遙々凌波濤在陣之窮屈令察候間、誠如投簞醪於諸河耳、日本之温酒可成良藥之間、士卒与之者也、然而抽忠節忽唱凱歌而、近日歸朝相待候、謹言、

〔朱力字〕  
〔慶長十四年〕三月廿日 家久(花押)

〔久徳〕  
樺山權左衛門尉殿

「家久公御譜中ニ在リ」  
「權左衛門久高譜ニモ在リ」

555

『在曾木廣徳寺』

門前屋敷目錄写之事

一 屋敷考反六步 壹石貳升 与五郎

一 同四畦廿步 四斗六升六合六夕六才 平太郎

一 同五畦拾八步 五斗六升 七郎左衛門

一 同六畦拾貳步 六斗四升 左右馬之允

一 同三畦 三斗 甚六左衛門

一 同四畦廿四步 四斗八升 源七郎

一 同五畦拾步 五斗三升三合三夕三才 市之允

一 同六畦廿步 五斗三升三合三夕三才 藤左衛門

合屋敷四反六畦廿步

高四石五斗壹升三合三夕三才

右知行之事、

大中様御寺之儀ニ候間御高として令支配者也、

慶長拾四年 三月廿一日 新納武藏入道 爲舟判

廣徳寺 參

「家久公御譜中」

「正文在大乘院」

將又帷子五進之候、書信之驗迄候、以上、

其地永く逗留、辛勞之至候、作事何分出來候哉、涯分被入念肝要候、次琉球へ人衆差遣候、順風吹續候間、漸可爲着岸与存候、其外無相替儀候、其元隙明次第、早々下向待入候、恐々謹言、

〔朱力斗〕  
〔慶長十四年〕三月廿二日

家久(花押)

成正院 机下

『琉球渡海日記』

一高山を二月晦日之巳之刻ニ打立、高洲江申之刻ニ參着申候、順風無然与右亥之時ニ出船申夜へかせに乗、山川江翌日寅之刻程に着申候、彼湊江鹿兒島・國分・加治木方之諸類船八拾艘余御座候、船之かざりやう思ひ／＼の結構驚目候、諸方御着合ニ而候得者、船中或宿くの慰無正躰様子不及言語候事迄候、

一三月朔日二日三日ニも順風無御座候て御逗留ニ候、同三日之晩に船に乗りき湊口江漕出、四日之寅の刻に出船申、ゑらふの島江亥の時計に着申候、船道三十八里

ニ而候、同五日之日は天氣惡敷候て彼嶋江御逗留候、

一六日之辰の刻に出船申、夜を籠走、七日之申之刻程に琉球大嶋之内深江ヶ浦と申所に着岸申候、次日八日ニ者打廻ニ而候、かさんと申所藏本ニ而候、人衆あつまりと構たる由相聞得、諸軍衆兩口を御さし候得ハ、然との人衆もなく御手ニ付候事、無何之子細も候、船元よりハ八里御座候、つめ走にはしり、路次の難儀前後始而之事共ニ候、路次ニ草臥、在郷に一夜泊り候、舟元江其日御もとの御人衆も候、九日十日十一日深江ヶ浦に逗留申、十二日ニ出船申、大島之内やまとば<sup>〔本〕</sup>ノ<sup>〔島〕</sup>と申湊に着候、八里ニ而候、ゑらふと大嶋の渡合八十五里ニ而候、此渡之間に七嶋在之、一十三日四日五日やまとば<sup>ノ</sup>に逗留候、同十六日ニ出船にて西之こみと申所に參候、此日とくと申嶋江類船之内十三艘參候、やまとば<sup>ノ</sup>の間八里ニ而候、十七日に<sup>ノ</sup>出船候つれとも順風なく候て、もとの湊こみにとりもとし候處ニ、枕權左様御手の船數十艘にてこみに御着被成候、同十八日九日も逗留候、十九日者終日雨降、船中之窮屈と申さひしき躰ニ而日を送り候、一廿日之卯の時に西のこみを出舟にてとくの嶋の秋とくと申湊に申之刻計に着

申候、舟道廿五里ニ而候、廿一日ニ出船にて十里程乘出候得共、少シむかひて結句とれに成候間、とりもとし亀津カメヅと申所に着申候、一ひらの役人の居所ニ而候之間、人居過分ニ候、ちと先船ニ而候、枕權左様を始、十艘程ゑらふのごとく御漕候、此人「此所一二字虫喰ニテ不知」かゝと未相知候、

一廿二日に深山大勢にて御かり候、子細ハ亀津の役人山ニかくれ居候、御狩出し被成候ためニ而候処ニ、役人をかり出、殊ニ琉球入番衆主取無余儀人をからめとられ候、彼人は三司官之内謝納之むこニ而候、きばち巻の位成人を御取候事、

一廿三日無順風も御逗留候、昼時分も雨もふりさひしく候處ニ、琉球ふね二里程沖を、大嶋の方のごとくかけ通し候を、五枚帆二艘にておへせ被成候、彼追付之ふね廿三日ニハ無歸帆候事、

一廿四日之巳之刻程に、とくの内亀（申）さへの湊を出船にて、ゑらふの島崎に日之入時分ニ、そと御かゝり被成候、枕權左様を始、先舟之御人衆御持合セ被成、其まゝ琉球江御渡海候、夜を籠走り、次日廿五日之酉之刻過時分に、琉球之内こほりと申所に着岸候、とくの亀津方

なだ乗六里、とくとゑらふの渡相拾八里、嶋のなだ乗三里、ゑらぶと琉球の渡相三十八里、五枚帆式艘の追手の船廿四日之朝參候、琉球不追付候、廿六日者返報日之故、打まへりなともなく碇御入候、廿七日太郎左衛門殿・半右衛門殿御兩所ときじんと申所を御いらんのため、五枚帆にて御出候、ときじんの城あけのき候、

巳之刻程に俄に打まへり候て、方々放火共候、人之ふによりとり物おほく見得申候、郡の運天舟元方三里程おくに參候、田島おほく能在郷ニ而候、廿八日ハ逗留申候、廿九日夜半計に出船被成、大わんと申所に着申候、舟道三十里ニ而候、四月朔日卯の時に、諸軍衆は陸路を御座候、諸舟ハ勿論海上にて兩手を御さし候而、こあんまにて御座候而、那覇首里の様子きこしめし合せ可有との御儀定にて候之處ニ、足輕衆首里江差掛り鉄炮取合仕、殊に方々放火共仕候之間、從其不計軍衆首里近く御差掛被成候処ニ、琉球王位様御舍弟を始、名護・うら添・謝内彼三司官質ニ差出被成、無事を偏ニと候之故、即彼質を御取にて無事ニ罷成、首里より那覇江申之刻計ニ諸勢御着候、陸地船手双方を以テ御掛被成候之故、琉球人も一たん驚目、方々山々

江にけ入候有様、筆舌難尽候、なほの地下人共ハ皆、家を明のき候、諸勢ハなほ内ニ思ひ／＼の御宿を御取ニ而候、高山衆事半右様御宿近く宿仕候、二階ニツある宿ニ居、海上を詠め居ル在所ニ而逗留申候、二日ニハ何方江茂うち手杯もなくしかとハなほ内ヲ見物之躰ニ候、三日王位様御下城之ため荷物御下シ候、彼城見物として鹿兒島衆少々御出候處ニ、王位手もなく下城被成候事迷惑之由にて、地下衆主從廿人余にて、城より繩をさげ山江のかれ候を、此方の人衆右ニ申候、鹿兒島衆少々にて追掛り被成とりあひ共候、敵ハ二人にて候、此方之衆ニ四人手追共候、琉球人は山ニにげ入申候、彼取合イニ依而つゝきニ而御打出被成候得共、少事成事ニ而候、惣別御留候、四日ニ者王位御下城被成候、王位計御輿にてきさきなどハかちにて御下候、おんなこ衆などのありさまあさましき躰、沙汰の限ニ候、王位様御宿名護之所ニ而候、五日ニ者首里の城御うけ取被成候故、御大將を始しほり江御出候、城之内ニ者御大將分之御人衆計、人をも不被召烈御入候、彼日日程方城内之荷物御改にて日記ニ付、薩摩御物ニ罷成候、四組ニ而御改候、於日本ニ終ニ見不被申、唐物

以下玆敷物おほき事無限候、半右様御分限ニ而候得共じやうり取一人も不被召烈、我計御入候、晚ニ御歸り之時ハ、城戸之番所ニ而惣別城内ニ參候人々、おびをとききものを振、少も御ひきかうなき御改、互ニきびしき事無申事候、金銀絹しや其外玆敷物之中ニみだれ入、取陵見申候、日數五日六日七日八日九日以上ニ十二三日程の御改ニ而候、其内ハ荷物改之御人衆ハ首里江逗留候、其外之御人衆ハ皆々なほニ御逗留候、荷物御改組頭之御人衆本田伊賀守殿・市來備後守殿・本田弥六殿・額娃主水正殿・東郷休半老・大寺主計助殿・兒玉四郎兵衛尉殿・妹尾傳兵衛殿・日置玄蕃允殿・河上掃部助殿・市來八左衛門殿・伊半右衛門殿・日高與市左衛門殿・市來孫兵衛殿・那答院織部佑殿、右之御人衆辰之刻方酉之刻迄御詰ニ而御改被成、相濟候而方那覇江御下候、彼津江御逗留之内ニ荷物船ニ入候、都舟も參候、彼荷物御國元江參候、何れ共御仕舞被成順風御待候處ニ、十四日之晩ニ順風もよく候間、彼晩に乗浮ひ候、同十五日巳之刻計に琉球王位様船ニ御乗候ニ付、御舎弟うらそひ・謝内、其外御供衆乗舟候、湊口迄之王位御供千人余被參候、即諸船出舟ニ而候、追手之

風無然与候之間夜を籠のり、十六日之朝こほり江着候、此道三十五里、十七日辰之刻末ニ出舟候、薩摩船に琉球ふね相添、海上見事成無申迄候、彼津方直乘ニ而候故、其夜翌日十八日昼比方順風強く候而、船酔の人数多候、夜入候而方かみなりなと仕、以之外しけへき氣敷ニ而候故、如何可有と心遣仕候、乍去其夜も過し卯之刻計より、大雨大風ニ罷成事実ニしけニ而、迷惑極ニ及、かけなみなと仕事無限候、やうちうの故可掛所もなく走り候、其日も過キ十九日午之刻計に、七嶋之内中之嶋に取つき候、流船ニも取はなれ思ひく乗續沙汰之限候、彼嶋にも類舟漸十二三艘着候、百艘に及候、舟たて大嶋やきうちと申湊に權左様・太郎様を始、三拾四五艘着岸候、其余ハちりくのにり散候、伊半右様御船いつかた江御乗被成候やと心遣申候処ニ、彼中之嶋之内ニ御掛候、廻り掛り之嶋なれハ定むる湊もなく、おもひくのまはり掛り之ゆへ、半右様御船ニも其次日の昼計にこそ參合候、其外之船ハ七嶋之内取着候、後に承候か荷をうち候も多く候、かちをおらし、或ハ柱を損さし候船も有、思ひくの立願精誠なる事無限候、同廿日も無順風にて廻り掛り仕候、我々船の

558

立願狀

あんし彦左衛門と申ものゝ所におり、去夜昼五日之難儀を少し忘寐ニ而悦申迄ニ候、廿一日寅之刻程に出船申、能順風ニ而候間、申之刻計ニ山川の津ニ着岸仕候、舟道六十里程候を荒追手の故、日之内ニ着申候、我々方先船も漸四艘參候、流船にて參候ふね十艘計ニ而候、方々江行散候船、いかゝにて候哉と皆々迷惑申處に、次第く參候、廿二日山川ニ罷居様子承合候、終日雨もふり候、廿三日も右同前ニ候、廿四日之早朝、權左様・太郎左様御船を始諸舟參候、琉球王位様御舟も輒參着候、万民之悦貴賤上下かんせん人はなかりけり、

四十九所大明神ニ二夜三日參籠之事、并かくら上可申事、右意趣者、旅中殊ニ海上無何事輒ク歸朝申、一々心中如意満足成就之所、

慶長十四年

三月廿八日

祁答院織部良贈(花押)

鹿野屋民部左衛門兼次書判

切通五郎兵衛俊重書判

益山兵部左衛門  
忠美無書判

市來孫兵衛  
家元書判

559 「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓上候、仍而貴殿様御上洛之儀付而、切々以書狀申入候、然處琉球御動之儀御座候間、琉球相濟申候まで、御上洛之儀者御無用之由 御詮之旨、本上州承ニて、拙者方早々可申入之由候間、如此候、爲御心得申入候、將亦先書如申入、御質人之儀、早々被成御上セ御尤存候、猶御老中まで申入候、恐惶謹言、

「米カキ」  
「慶長十四年」

卯月朔日

山駿河守  
直友(花押)

薩州

少將様

參人々御中

560 「義弘公御譜中正文在卷本トアリ」

猶々琉球之儀、無御由断被成御注進候様ニ、奥州様御相談御尤奉存候、猶追而可得貴意候、以上、

急度令啓上候、仍奥州様御上洛之儀付て、先度以書狀申入候つる、然處琉球御動之儀ニ御座候間、たゞ今ハ御上洛御無用之由 御詮之旨、本上州方被申越候条、其御心得可被成候、先御上洛相延、於我等玆重存候、不及申候へ共、琉球之儀御行專一存候、左様ニ候へハ、彼表之様子急度可被成御注進候、御由断被成間敷候、尚追而可得貴意候、恐惶謹言、

「カキ入也」  
「慶長十四年」

卯月朔日

山駿河守  
直友(花押)

惟新様

參人々御中

561 慶長十四年己酉

四月三日、梅北照存坊

琉球に航し首里城を陥すの時、奮進て戦死、下も同じ、

小松彦九

郎七島船頭に、志岐那に戦死、

五月十八日、山元彈右衛門

島津河内守久信臣にて、久信の跡を慕て殉死、

阿久根爲

右衛門同上、或有川慶助 同上、  
爲兵衛

562 『雜抄』

尚々期後音之時候、以上、

態令啓達候、仍此國之儀無殘所喫へ罷成、今日五日ニ

王位を始被成下城候、千秋萬歳目出令存候事、

一帝王其外頭、質人之儀、如其地可爲渡海之旨申渡候、

是又其分ニ可有領掌之躰候、爲御納得候事、

一都嶋・久米之嶋兩嶋之事者、海路相隔在所之儀候条、

人衆□可差渡候旨雖談合、百姓迄之儀之由候間、若

足浮申候てハ如何候ハん哉と存候て、爰元三司官之衆

へ申付、如此中納等之儀□調候間、近日可申渡之覚悟

候、爲御存候、

一右之諸式急申調、來月晴申候者何茂可罷登之儀ニ候へ

とも、先々此地之様躰爲可申上、飯牟礼紀伊介方・貴

嶋采女方進上申候、旁可然之様ニ御披露所仰候、尚委

曲用口上候、恐惶謹言、

〔カキ入也〕

〔慶長十四年〕

卯月五日

椀山權左衛門尉

久高(花押)

喜入大炊助殿

人々御中

〔此正文、御文庫十七番箱十七卷中ニ有之礼合候也〕

〔義久公御譜中正文有之トアリ〕

〔家久公御譜中ニモ在リ〕

〔御文庫三番箱宝鑑中〕「家久公御譜中ニ在リ」

初春十日之芳札、太刀一腰・馬一疋并段子三端被贈越候、

尤怡悦之至候、伊勢兵部少輔に遂對面候處、當年ハ被有

上洛事可有延引之通、其外條々御懇慮之様躰雜談候間珣

重候、來春可遂向顔事必矣、かしこ、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕卯月十六日 信尹

鹿兒嶋少將殿

〔十番箱御軸物中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍 大御所様へ年頭之御祝儀爲可被仰上、

以使者被仰上候、然者御太刀一腰・御馬代金子壹枚并段

子五端被成御進上候、則致披露候処ニ、一段之御仕合殘

所無御座候条、御心易可被思召候、委細之段者御使者江

申渡候条、不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕

卯月十七日

本多上野介

正純(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

爲年甫佳慶、太刀一腰・馬代黄金二十兩并段子廿卷到來、

感悅候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕四月廿一日

〔秀忠〕  
(花押)

薩摩

少將殿

566

〔古御文書中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々琉球之儀、早々御注進御尤存候、委細平大へ申

渡候間可被申上候、以上、

先度以飛脚申入候、參着仕候哉、然者琉球御動之儀ニ御

座候間、先琉球之様子相聞申候まで、御上洛御無用之由、

被 仰出候旨、本上州方被申越候間、其御心得可被成候、

琉球相濟申候者、御上洛被成御尤奉存候、委細之儀者平

田大炊助殿申談候条、可被申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕

卯月廿二日

山駿河守

直友(花押)

薩州

少將様

參人々御中

567

〔古御文書中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申上候、吳國へ之 御朱印之儀被仰越候、何も 御

朱印御取候てふさがり申候間、しやむろへのせ可被進之

由候て、様子被仰越候条、圓光寺へ申候て、しやむろへ

の 御朱印相調進上申候、本上州方も此由可申入候由被

申越候、猶平田大炊殿へ申談候間、可被申上候、恐惶謹

言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕

卯月廿二日

山駿河守

直友(花押)

薩州

少將様

參人々御中

568

『樺山氏藏』

任幸使用一輪候、仍三月十五日之注進狀、卯月廿九日ニ

相届、具ニ令披見候、先以諸船無吳儀同前ニ其地へ着岸

之由、殊大島之事、不日ニ相濟候通千万目出存事候、扱

々滄波遼遠之御辛勞、自是察存計候、定而琉球之儀も別

儀有間敷候哉、早々吉左右侍入候、猶期來音候、恐々謹

言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕五月二日

惟新(花押)

樺山權左衛門尉殿

〔此御書 權左衛門久高譜中ニ在リ〕

「御文庫四拾八番箱中」

其地辛勞之儀令推察候、仍渡海已後到來無之無心元候處、諸舟無恙到大嶋着岸、彼表無別儀屬手裡之由祝着候、右之様子、追付上方へ申上候間、猶以相易儀於在之者、早々注進肝心候、然者陸奥守可致上落之由被仰下候、其國へ人數差渡候上如此候、乍迷惑其用意最中之処、去月廿五日從山駿州使札被差下、當分琉球へ軍衆渡置候間、此節之上落、先可延引仕旨被仰聞候、國中之悦不過之候、就其弥琉球表之賢慮尤候、將又軍衆へ辛勞之通申聞度候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「慶十四」五月三日

枕山權左衛門尉殿

「此御書、樺山權左衛門久高譜中ニ在リ」

龍伯 ○ 「墨印」

「在官庫」

其地辛勞之儀令推察候、仍渡海已後到來無之無心元候處、諸舟無恙至大嶋着岸、彼表無別儀屬手裡之由祝着候、右之様子、追付上方江申上候間、猶以相易儀於有之者、早々注進肝心候、然者陸奥守急可致上落之由被仰下候、其國江人數差渡候上如此候、乍迷惑其用意最中之処、去月

廿五日從山口駿州使札被差下、當分琉球へ軍衆渡置候間、此節之上落、先可延引仕旨被仰聞候、誠國中之悦不過之候、就其彌琉球表之賢慮尤候、將又軍衆へ辛勞之通申聞度候、恐々謹言、

五月三日  
龍伯御判

平田太郎左衛門殿

伊集院半右衛門殿

佐多越後守殿

已上

三月廿日之 御書謹拜見、外聞実儀忝奉存候、抑此國之儀無殘所相濟申、王位茂上國之由候而、順風被相待躰候、殊從都之嶋叶船籠上候之間、上乘之者共少々可召上寛悟候、右之嶋江茂此地へ爲參船共追付歸帆仕候、様子委申遣候之条、定別儀御座有間敷与存候、千万目出度奉存候、次者爰元人數江御酒被拜領候、宥段忝之通申上候、右之旨可然之樣可預御披露候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「慶十四年」

五月五日

枕山權左衛門尉  
久高(花押)

伊勢兵部少輔殿

「此正文、御文庫拾七番箱十七卷中ニ有之、季通組合ス」

「家久公御譜中在リ」

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

三月十五日之御札五月八日上着、拜見申候、先以遠路  
思召寄示預、殊硫黃三百斤被下候、何寄重要ニ御座  
候間、則秀頼様御用ニ上申候、

一當春者自早々琉球へ御人數被遣由、乍御太儀御名誉之  
旨、於上方ニ取々御尊申出迄候、定而無吳儀御勝手ニ  
可罷成と存候、慥之御吉左右承申度候、

一大御所様・將軍様御息災ニ御機嫌能御座候、御家老衆  
御無事ニ候、京伏見大坂是又無何事候条、可御心安候、  
此地似相式御用候者可承候、旁追而可申述候、恐惶謹  
言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕

五月八日

片桐市正

且元(花押)

羽柴陸奥守様

御報

573 「家久公御譜中」

爲端午之祝義、帷子單物十到來、喜覚候、尚大久保相模

守可申候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕五月九日 秀忠(花押)

鳴津陸奥守殿

574 「下野守久元譜中」

慶長十四年己酉、賜菱刈院馬越地頭職、由是移于馬越、

其城數年無人居爲荒地、荊棘竹木得其時盛盛焉、雖然占  
本丸於宅地、刈茅蒨伐竹木、已爲營作也、故賜末永村之  
返地、其目錄曰、

575 知行目錄

高四百六拾六石二斗九升三合

馬越之内  
重富村

高貳十二石六斗六升九合九夕

大口原田村之内  
馬庭之門

高拾八石二升六夕

同所  
上原田之門

高四十二石九斗八升六合八夕

同所  
田嶋之門

高九石三斗九升七合三夕

同所  
下原田門之内

高十卷石七斗三升七合

曾木里名之内  
川添之門

高拾四石五斗卷合

同所  
古城之門

高拾石七斗二升一合三夕二才 大口之内 池山飯塚門

案原中牟田 中田壹段九畝壹石九斗二升 同所淨免 弥介

都合五百九十八石貳斗四升六合九夕二才

右知行、飯野之内末永村之返地也、

慶長十四年五月十日 比志嶋紀伊守 國貞

樺山權左衛門尉

久高

圖書入道 紹益

紹益

新納近江守殿 〔後下野守久元〕

宅地未終土木之功之際、兄忠倍權病痾、藥餌不利、而五

月十八日卒矣、慟哭漸覺、則老父紹益請于 太守、使忠

在遁去新納氏、而讓與我之家督、越任下野守稱久元也、

576 〔河内守久倍忠長譜中〕

慶長十四年己酉五月十八日、先于父母卒、享年三十二、

法號覺翁大圓居士、青龍山大圓寺殿、家臣阿久根爲右衛

門・山本彈右衛門・有川慶助不忘平常厚恩不愛其生、迄

葬送之日追跡殉死也、

577 〔古御文書中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

爲御音信、芳札殊上卷贈給候、御懇意之段過當至極候、

如御書中當年於御上落者、此邊へ内々被寄船候かと相待

候處、琉球へ就被相渡人數御在國之由尤候、早々被屬御

理運、御上落之刻者必待入候、旁期後音之時候間不詳候、

恐惶謹言、

〔米力キ〕

〔慶長十四年〕

五月廿一日

幽齋

玄旨(花押)

羽柴陸奥守殿

御報

578 〔義久公御譜中〕

夫琉球國者去薩摩州者二百餘里、然而自往昔爲附庸、屬

島津氏旗下、所以納貢也、頃年妄舊規怠慢不納貢、由是

數度凌難海渡使節以誘之、不肯聽、故欲退治之、而請件

事於 家康卿、卿即允許焉、是以慶長十四年己酉之春三

月、艤艦一百餘艘、而渡騎步三千餘人、自海陸島嶼之

要壘至王都近邊之城郭、悉以攻平、於茲國王及三司官以

下請和降參、以故不血刃、而已奏凱歌矣、國王以下俱

乘艤艦、不經數日宜歸帆之解纜、裁捷書使一价乘一船先

軍衆告薩摩、則令使節上達 家康卿 秀忠卿、二卿好其

戰功、而賜感牘矣、

579 『案文在官庫』

琉球之儀無殘所屬手裡之由到來候、誠大慶不過之候、右之樣躰從陸奧守所以使者申上候之間、傳書仕候、猶委曲者陸奧守可申入候条不詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年款〕

五月廿一日

山口駿河守殿  
人々御中

嶋津修理入道  
龍伯(花押)

580 『案文在官庫』 「廿二番箱十卷中」

急度申入候、琉球之儀、無殘所屬手裡之由到來候、誠大慶不過之候、右之様子、從陸奧守以早打申上候間、傳書如此候、然者從悴家他國へ防戰取懸候事、此度始之樣候処、宜仕合、畢竟忝被加上意、烈御威光播面目候、此等之段、寄々可然之樣御取合所仰候、猶委曲者陸奧守可申入候間、不能書載候、恐々、

〔慶長十四〕

五月廿六日

『惟新』〔御名無之〕

山口駿河守殿  
(マカ)  
本田上野守殿

「龍伯公御案文中ノ卷ニアリ、如何」  
「義久公御譜ニ同日同案アリ」

581 「御文庫二番箱家久公二卷中」

(本文書ハ八三八号文書ト同文ニノキ省略ス)

582 「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

去四日之御狀致拜見候、琉球被差渡候衆、四月朔日彼國之王居城へ被取懸及一戰、即時切崩王居城被取卷候處ニ、御侘言仕付而、王・諸官人召つれ、兵船壹艘も不殘歸國之旨、早々被仰聞候、寔以御威光と申、各渡海之衆手柄之儀可申様無御座候、於爰元我等宍人之様ニ大慶奉存候、何茂以使者可得御意候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕

六月十一日

羽陸奥守様  
御報

寺志广守  
廣忠(花押)

583 『雜抄』

下向之後者遠國之故、無音心外至極候、御無事候哉、此方以同前候、仍而琉球國之儀、於其元度々如申候、兵船

被指渡、一所も無殘相順、國王其外歴々人衆數百人被引渡、此國之満足可過御察候、此等之趣、古田織部様へも爲貴老可有御申候哉、然者貴所事、吉田作州へ申談候、早々御下向可然之由候、同者此御使三原諸右衛門方下向之刻、御賴候而可爲肝要存候、儻者古織部様茶之湯法職之様子共、少成共尋御申候者、此方之御仕合、一段能候ハんと存候、御三殿共ニ又諸大名茶之湯最中に候、何共必々下向可被成事多山可待入候、恐々謹言、

〔慶長十四年カ〕  
六月十六日  
新納五郎右入道  
遊浦(花押)

吉加江狩野介入道殿  
御宿所

〔御文庫二番箱家久公二卷中〕  
『在官庫』

以上

貴札致拜見候、仍去比琉球へ爲御手遣、御人數被差渡候処ニ、無相違大嶋と申嶋へ御着船候而、彼嶋之儀思召儘ニ被仰付、夫方琉球國主被居候所へ御人數赴被申、琉球之儀も漸相濟可申之由、御紙面之通存其旨候、則右之趣達上聞候処ニ、一段御機嫌共御座候間、御心易可被思食候、

追々彼地之様子可被仰上之由、御尤存候、然ハ駿苻御移徙爲御祝儀、此地御上被成儀、琉球相濟候て方御上可被成之由、令得其意候、先書にも如申入候、弥琉球之儀相濟候而、其上被成御上御尤存候、將亦爰元相替儀無御座候、猶此表相應之御用等御座候者、不被御心置可蒙仰候、不可存疎意候、何も期來音之時候、委細者御使者可被申上候、恐惶謹言、

〔カキ入也〕  
〔慶長十四年〕六月廿六日  
本多上野介  
正純(花押)

羽柴陸奥守様  
貴報

〔家久公御譜中ニ在リ、文字ノ異同アルノミ、糺合傳写ノ人、文字ヲ改メ誤ルコト、旧時ノ慣習也、古文書ハ可成文字ヲ改メサルヲ肝要トス〕

〔義久公御譜中〕

夫利安慶哲居士ハ山田越前にて、たけき心を專とし、疵をかうふり名のほまれ有事たひくも也、然に忠節の者なれば、内外をいはず召仕しに、予五三年の間心ち例ならず、をこたる事なきをなげき、身のかはりになんとよいひけるか、まことなるかな、夏のはしめつかたより病床にふし、みな月十四日身まかりぬと聞て不便さのあまり

一首をつらね手向とするものに南、

法印龍伯

蓮葉のをきこほしたる露の玉の

をはりや君かために捨けん

慶長十四年六月廿九日

「左ニ昔年写し載たるあれと、更ニ写して参照ニ供ス」

586

『旧記』

一山田越前守有信入道利安死去之節、龍伯公御暇乞爲

可被遊、棺を大龍寺御屋形迄被召寄、御焼香被成下、

利安さらへ、自身も頓而追つかんと被遊御意候て、御

歌を御手向被下候由申傳なり、

にて、たけき心を専とし

夫利安慶哲居士は山田越前ニ而、猛心を専として疵

を蒙、名の譽有事度々也、然るに忠節之者なれば内

外をいわす召仕しに、予五三年の間心地例ならず、

怠事なきを歎き、身のかわりになんといひけるか、

寔哉、夏のはしめつかたより病の床に卧て、みな月

十四日身まかりぬると聞て、不便さのあまり一首を

つらねて手向とするものニなん爾、法印龍伯

はちす葉のおきこほしたる露の玉のおわりや君か爲ニす

てけん

慶長十四年六月廿九日眞

新納武藏歌ニ、

うらやましきへぬる玉の終りまていともかしこき君かこ

との葉

587

『在山田助左衛門』

態令啓達候、自求广大童休笑書狀被遣候、夜前戌刻到來

申候之間申上候、奥州様御船去十六日ニうしまとにて見

たてまつりたる由、舟衆申候通被聞候之間、愚老迄注進

申候由承候、余々之子細にハ無之候得共、毎々如此之懇

意被申候事候之条、彼一通相添、次之時者御禮被仰遣、

御肝要令存候、従求广之書狀上申候儘、不能巨細候、正

説之やうニハ不見得候間、國分にも鹿兒嶋へも不申上、

爲御分別候、恐惶謹言、

〔年間不知〕

卯月廿四日

新納武藏入道

爲舟判

〔宛書ナシ〕

(表紙)

義久公  
 義弘公  
 家久公

慶長十四年 自七月  
 至十二月

後編  
 舊記雜錄  
 卷六十四

588 「大田左馬頭忠角初子三郎譜中」

吉兵衛忠綱養子、實薩州家實久庶子三葉左近太夫忠繼入道竹庵三男也、

太守義弘公賜法度之條目、其愛情何岱山高滄海深乎、珍戴以藏櫃矣、其奉書記左、

589 「正文在大田小平次久知」

覚

一於御奉公之儀者、何事によらず疎略いたすまじき事、  
 一連々可勤軍役覚悟之事、

590

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

一父母之儀そむくまじき事、

一あしき人にもなふまじき事、付さと宿を取問しき事、

一手習・学文無油断可著事、

一夫婦之中悪有間敷事、若悪儀於在之者、養子を可被召

離事、

一酒女之者可爲肝要事、

右之條々大田吉兵衛尉養子ニ被相定付而爲御異見被

仰出事候間、時々被遂披見、無疎意可被相守者也、

慶十四

七月朔日

比志嶋内藏允(花押)

(國色)

本田源右衛門尉(花押)

(親存)

大田千三郎殿

まいる

「右雜目裏判」

印

元和二年丙辰五月二日死去、年二十七、法號華月宗蓮居士、

「右忠角天正十八年生トアレハ、慶長十四年ハ式拾歳ノ時ニ當レリ」

猶以食籠耆ツ・唐折敷拾枚・けんびやう耆ツ、色々

被懸御意、何も玆敷御座候而、一入忝存候、以上、

貴札忝具拜見仕候、隨而去春琉球へ御人數被指渡、於彼

表被及一戰、無吳儀被仰付、王其外諸官人、如御存分被

召寄之由、御手柄中々可申様も無御座候、御満足之程察

申候、於我等目出存候、尤自是以使札御悅可申入候へ共、

我等事當春(秀忠)御所様へ何角申上ニ付て、御所様御機

嫌惡御座候へ共、頃被分聞召候付而、御札可申上与存、

罷上候間、其儀無御座候、將又追而之貴札之趣、委細心

得存候、於大坂御宿道与方ニ可申談候間、可御心安候、

此度之儀御座候間、隨分御馳走可申入候、何も御上落之

刻、於伏見可申承候、猶御使者へ申渡候、恐惶謹言、

「朱カキ」

七月三日

羽柴左衛門大夫

正則(花押)

羽柴陸奥守様

(家久)  
貴報

591 『在官庫』 『義久公御譜ニアリ』

至于琉球差越兵船、彼黨數多討捕之、殊更國王及降參、

三司官以下近日着岸趣、誠以希有之次第候、委曲本多佐

渡守可申候也、

「慶長十四年」

七月五日

「秀忠公御墨印」

鳴津修理入道殿

592 『正文在卷本』

至琉球差越人數、不經日數輩討捕之、其上國王就降參、

近日至其國可爲着岸之旨、尤無雙之任合候、猶本多佐渡

守可申候也、

「カキ入」  
七月五日(秀忠)

羽柴兵庫入道とのへ(義弘)

「義弘公御譜中ニ在リ」

(貼紙)  
此二通、正文田御番所御文書二番箱中國絢新龜鑑中ニ在リ

593 至琉球指遣兵船、不移時日及一戰、彼黨數多討捕之、剩

國王降參之上并三司官以下至其地、不日可爲渡海之注進、

誠以無比類働共候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「秀忠御判」  
七月五日(花押)

薩摩少將殿(家久)

594 琉球之儀、早速属平均之由注進候、手柄之段被感恩食候、

即彼國進候条、弥仕置等可被申付候也、

「十四年」  
七月七日 ○「家康御墨印」

薩摩少將とのへ  
「此二通、家久公御譜中ニ在リ」

595

「在官庫」  
〔本文書ハ五九二号文書ト同文ニノキ直略ス〕

596

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」  
「古御文書中」

猶以寺澤志广守此地被罷下、貴殿様御噂而已申出候、  
其元様子共委承、目出度存事候、以上、

流求属御手候様子、爲御注進御飛脚被差上候条、乍便立「宜カ」  
捧愚札候、先々流求之儀、輒御手ニ入候而、千秋萬歲存  
候、其以來者遠路故、以書狀も不申入、無音背本意存候、  
定當冬、來春之間者爰元可被成御越候間、必々遂拜願、  
相積儀共可申上候、久不懸御目、乍恐御床敷存計候、猶  
奉期後音之節、不能詳候、恐惶謹言、

「失カキ」  
「慶長十四年」  
七月七日 立花左近將監 俊正(花押)

薩广少將様  
人、御中

597 「御文庫二番箱義弘公五卷中」

去三月廿一日、成正院主頼眞僧都持修復 蓮金院記来告  
曰、此是 前薩隅日三州太守島津沙彌惟新老與 前陸奥  
太守島津羽林次將家久公、二翁之連署一院之懸記也、垂  
之萬世不容易矣、從有是命恭披閱之、語高而旨深、雖不  
能通曉、預約師檀於金石、金石宿因不可不思焉、熟思惟  
金之爲用也、轉萬象而不變也、石之爲德也、經億劫而不  
磷矣、予佛法久住之檀越于茲足矣、抑吾金剛峯寺之別院  
蓮金精舍者自然地景也、泝水之流傍谷之上、右山也、左  
路也、前神祠也、後僧庵也、囉說明王之結果、功德天女  
之鎮寺也、遙尋洪基、爲前征夷將軍頼朝卿草創、而明哲  
練行之勝地、佛經安置之古跡也、以故東閔鎮西之知識、  
无不脱履於此砌下、无不濕衣於此門派、頗滿寺之靈室也、  
豈非一山之傑出乎、雖余偷數百星霜、椽栵稍差脱梁棟屢  
傾斜矣、或曰、征東夷大將軍源頼朝卿者島津氏之先也、  
修之復古可乎、答曰、可也、古往今來如合符何乎、言已  
不拘價大小、買得而即爲 公之有者也、「地界四至在別紙、  
價直員數如御記」 余  
來匠氏運斤成風、而頼眞創功從者雜草、殿堂門廡之營構、  
夏涼冬雪之圖樣、莫太之工巧不日而成焉、加之雖曰東西  
數里山長水遠、舟而發、馱而發、着攝陽入南紀、二世之

資財・眞俗之什物、此院寄附不可勝計者也、末代之任持

不可不知乎、自今已後於此院者、宜令學業功成者現住、

弥久彌昌永代爲 島津氏之護持之旨達高聞者賀、不宣謹

言、

慶長十四年己酉七月九日

寶性院法印政遍

返上

前薩隅日三州太守嶋津惟新尊老

前陸奥守嶋津少將家久公

御請

「義弘公御譜中ニ在リ、写トアリ」

598

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而蓮金院御寄附之記切到來、則御請申上候、以上、

依幸便一封令啓上候、仍蓮金院造畢、奇麗無類候、成正

院被抽御精不日成立、滿寺之所感不淺候、御上洛之次於

御高覽者、可爲本望候、將亦琉球早速御理運兵革之御名

譽、一天無其隱患以大慶候、隨而信讀之大般若之御札令

進上候、弥御武運長久之丹祈不可存疎意候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十四年」

七月九日

青巖寺

法印政遍(花押)

羽柴陸奥守殿

まいる貴嗣

599

「御文庫二番箱義弘公五卷中」

尚、彼院草創 賴朝之御願所久闕志仕候處を、拙僧

弟子分致再興候、今度御造営付而、方々新地見立候

得共、似合所無御座候故致□□、境地已下如形所候

条成院一段御満足候、猶來春以使僧可申上候、隨而

油煙十挺・筆十對令進上候、補書信迄候、

依の便令啓上一紙候、仍御建立之院家造早、學問所・御

茶之間一段奇麗、於當山古今希有之由風聞候、偏成正院

之御工夫神變奇特候、殊更曉者行事、畫者作事等、寸以

無休息躰、寔上様勇猛之行儀、所感不淺候、乍去晨昏之

御苦勞無申測候、尤今般以使僧可申上候處仁、渡海寒天

旁以致延引候之間、非慮外候、只仰御芳免計候、御上洛

之次被成御登山、彼院御一覽如何、來年拙老寺役已滿候

間、貴國罷下可遂尊顏心底候、併齡既及蟻宿候之条、徒

上上遠帆難叶存候、春者必以野僧御礼可申上候、恐惶頓

首謹言、

十二月

法印政遍(花押)

鳴津

「前ノ一書アレハ考ニ供ス」

600

「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以 兩御所様御威光を以、早速被仰付候儀、弥大慶ニ思召之通、委披露仕候処、一段之御仕合共ニ御座候、以上、

今度琉球へ御人數被指遣候処、早速被屬御本意、國王并三司官以下曆々者共、至其御國被召寄之由、御注進之趣、達 上聞候處ニ、無比類御事共、被成御感候て、御書被遣候、誠遠嶋之儀、如何与無御心許奉存候處ニ、潔儀共、拙者一人之様ニ大慶不過之候、委曲愛許之様躰、山口駿河守殿御使者可被仰達候条、奉省略候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「慶長十四年」

七月九日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

601

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

(本文ハ、五九七号文書ト同文ニシキ省略ス)

602

「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

已上

尊書飛來圭復再三不知所謝候、抑蓮金院御建立之事、末世無双之御意願、早速御成就、併仏祖之感應歴然候、隨而寸鐵尺木之用途、朱樓紺殿畫圖、成正院之御工巧、一山之構美、唯此事に候、將亦御住持職之事、實性院法印与御契約之段、門中各大望至極令存候、殊如愚僧者自若輩依奉酌下流持悦不淺候處、別而被加御意、無上端子尅端被成施与候、雖過當之至候、任成正院之御指南、忝令拜受候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「慶長十四年」

七月十一日

大樂院

玄如(花押)

羽柴陸奥大守殿

參 尊答

603

『在官庫』

以上

貴札致拜見候、仍琉球へ爲御手遣、御人數被指渡候処ニ、大嶋与申嶋早速被仰付、其方どくと申嶋へ、御人數赴被申候処ニ、彼嶋之者共出向候付而及一戰、則被得勝利、彼嶋之者共二三百人被討捕候付而、重而不及吳儀、彼嶋

相濟、其方琉球之國王被居候嶋へ、被取懸候処ニ、於彼

地も國王雖被及行候切崩、數百人討捕、國王之居城取卷

被申候処ニ、頻降參ニ付而、被任其儀、國王下城候而下

々方々へ逃散候者共被召返、如前々有付候而、國王并三

司官、其外頭立者共召連、頓而可有歸朝之由、使者以御

注進被成候、御紙面之通、一々懇ニ達 上聞候処ニ、

大御所様感被思召候、一段之御機嫌共御座候而、無殘所

御仕合共御座候間、御心易可思召候、誠遠渡与申、於

吳國無比類働、御手柄不淺候、其許御満足之段、奉察存

候、則琉球之儀被進旨御座候而、御内書被遣候、御外

聞実儀不可過之候、弥彼地之様子御注進可被成之由、御

尤御座候、猶爰許相替儀無御座候、此表何にても相應之

御用等御座候者、不被御心置可蒙仰候、聊不可存疎意候、

何も追而可得御意候、恐惶謹言、

〔十四年也〕

七月十三日

本多上野介

正純(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

〔此正文、御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ、引合濟〕

〔家久公御譜中ニ在リ〕

604 「在御文庫」

以上

貴札致拜見候、仍琉球へ爲御手遣、御人數被指渡候処ニ、

何も無殘所早速相濟、則琉球之國王并三司官、其外頭立

者共被召連、頓而歸朝可有之由、陸奥守殿方御註進被成

候、何も御紙面之通、懇達 上聞候処ニ、 大御所様感

被思召、一段之御機嫌共御座候間、琉球之儀、羽柴陸奥

守殿へ被進候旨御座候而、則 御内書被進候、無殘所御

仕合御座候間、御心安可思召候、誠琉球之儀思召儘ニ相

濟、御手柄不淺候、其元御満足之段、奉察存候、將又爰

元相替儀無御座候、何ニ而も相應之御用等御座候へ、不

被御心置可蒙仰候、不可存疎略候、恐惶謹言、

〔慶長十四年〕

七月十三日

本上野介

正純(花押)

鳴津龍伯様

貴報

〔此正文、御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ〕

〔義久公御譜中ニ在リ〕

605

〔御文庫二番箱家久公二卷中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

今度琉球之大嶋被仰付砌之御注進、則一人相添申下候、本上州御返事被申入候、其以後琉球相濟申候之御注進、是又御使者ニ我等もの一人相添差下申候、急度彼御使者も可在歸國候条、早々ニ御報申入候、猶御使者へ申候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕

七月十四日

山駿河守

直友(花押)

(家久)  
奥州様

參御報

606 「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而啓候、今度者琉球國不移時剋、属幕下候由、天下無其隠候、尊信之威力、弥可爲御武運長久候、以

上、

御芳墨并段子壹端、忝令拜受候、然者 就蓮金院御建立、成正院被成御登山、去年已來片時依無忽緒、若干御普請須臾造早仕候、各奇特千萬令存候、隨而御住持職之事、以法印政遍爲初祖、後代皆撰學問鑽仰之人、令相續候、永々可爲法席御記之旨、門中各忝令存候、殊於愚老者嶋津豊州へ御宿坊居住仕候上者、由緒旁以蓮金院之儀、毛頭可存疎意様子無之候、此等段者不限拙老一代、至遺弟

末資以遺記堅可申置候、巨細成正院可有演説候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕

七月十五日

善集院

榮旻(花押)

羽柴陸奥守殿

尊酬

607 「御文庫拾七番箱十七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

谷上蓮金院者 嶋津兵庫頭入道殿并島津少將家久公爲御兩殿之御建立、永代不朽之法席也、然當院者嶋津豊州之御宿坊御祈願所也、因茲後代住當院輩者、蓮金院之事、内外共無別心、馳走可申者也、此条非予愚意、偏是從御兩殿被仰下記之旨分明也、努々不可發忘也、

善集院

榮旻(花押)

〔宛ナシ〕

慶長四年七月十五日

608 「御文庫拾六番箱十一卷中」「義弘公御譜中ニ在之」

高野山谷上院

蓮金院交割新造之具之事

一衲袈裟

五通同有横尾箱壹ツ

一孔子聖蹟之圖屏風

一雙

土室之道具

- 一茶釜 壹ツ 是者先住被付置候、
- 一定香箱 壹ツ 是者先住被付置候、
- 一圓椀 貳束但箱有、
- 一折敷 貳束但箱有、
- 一金色 貳ツ
- 一銚子 貳ツ
- 一錫 壹對
- 一小火鉢 壹ツ
- 一五舛鍋 壹ツ
- 一四舛鍋 壹ツ
- 一三舛鍋 壹ツ
- 一貳舛鍋 壹ツ
- 一再進鉢 三重似蓋有、同カイ壹ツ、
- 一小重鉢 貳ツ
- 一桶大小 貳ツ
- 一摺鉢 壹ツ
- 一菜刀 壹ツ
- 一切盤 貳ツ

一鉄輪大小

貳ツ

一柄杓

貳ツ

一指盥

壹ツ

一シユロ箒

貳本但小座之共ニ

一手箒

貳ツ

一塵取

三ツ但小座之共

一板拭

壹ツ

一フチ拭

貳ツ

一板折敷

十枚

一闕伽桶・闕伽盥

貳通但本堂持佛堂ニ在之、

一前箱

壹ツ但本堂在之、

一佛具巾・壇巾

貳ツ

一定香箱

壹ツ

一銅之油スツキ

三ツ但貳ツ本堂ニ在之、壹ツ小座ニアリ、

一薄縁

五枚

一小座之道具袋棚ニアリ、日記別ニ在之、

以上新造之具也、

一唐椀 慶長十四年<sub>己酉</sub>七月二日曼奈羅供前ニ加之、  
五束物數貳百箱ニアリ、

院主部屋之道具

一鉢ノ子 五拾但蓋アリ、合而物數百、

一キキヤウ 五拾但蓋アリ、合而物數百、

一折敷 五束但ヲシロミ、物數百枚箱有五ツ、

右之具者、於南都ニ堅地ニ造之、其請人高野ニ在、

大墨屋但馬守

一唐皿 三百

一同茶椀 佰 雙方箱七ツ有、

右之具者、慶長十三年十二月廿日從御國元被成御上せ候具也、

一金飯銅 壹ツ

右同 堀小左衛門尉殿持參被申也、

一佛具四面器一通但シロミ、盤之上鈴三杵有之、

一瓶 五ツ但中者大也、

一護摩之器 一通但シロミ

護摩堂・持佛堂・本堂之諸道具不足多々有之、万勝

院江借用申當分者調候、

一疊都合大小 九帖

一シヤウジ 十七枚内アカリシヤウシアリ、

一板戸 八枚

一懸戸 八枚

一ツキアケノ戸 三枚同サヲ六本

一クマリノ戸 貳枚同カケカネアリ、

一イロリ 壹ノ同フチ・同蓋貳通アリ、

一コトク 壹ツ

一火箸 貳膳

一次ノコトク 貳ツ

一柄杓 貳本

一曲柄杓 壹本

一茶筥 貳本次ノ三本

一茶杓 貳ツ

一水コホシワケ物 壹ツ

一ハイ入 壹ツ

一ハイスタク 壹ツ

一シユロ箒 上下貳本

一塵取 壹ツ

一ヲキカキ 壹ツ但上ミ柄アリ、臺アリ、

一足次 壹ツ

一下板 五ソク

一檜木笠 五枚

一アカリコ 一束但數四十箱有、

一折敷 十枚但足付箱有、

右兩種五人分ツ、者不仕置之、自然御用之為也、

一キ、ヤウハチノコ 數貳十

一サカツキ 拾ヲ

一セトサラ 拾ヲ但五ツハ別也、

一菓子入 拾ヲ

一メシツキ 一ツ同カイ有之、

一酒入壹ツ 一湯ツキ壹ツ

一カン鍋壹ツ同蓋在之、  
一丸盆壹枚但木色

一蓋置三ツ  
天下一作也 一上ノフロ壹ツ

一茶釜壹ツ  
セト 一上ノコトク壹ツ

一茶碗壹ツ 一小板壹ツ

青巖寺檢校様ヨリ被遣候道具之覺

一五種之鈴輪羊石同入箱壹ツ小日記別紙ニ有之、

一佛具三面但貳面者前具計火車蓋先シ、

一同鉢五鉢盤之具一通但佛具箱蓋ナシ、

一鉢 一雫

一錫杖 一本

一ヲキカキ 壹ツ

一釜大小 貳ツ但茶釜也、一ツハツルナシ、

一火箸大小 三膳 一肩衝壹ツ袋有、  
私置之初拝領申ス道具也

一柄杓大小 貳ツ

一水コシ 壹ツ 一香入壹ツ 唐物

一水コホシ 壹ツ

一水ツギ 壹ツ但蓋有、

一香爐 壹ツ本堂ニ有、

一花立 貳ツ 一茶碗貳ツ  
薩摩焼一ツ・唐津焼三ツ私ニ置之

一香盆 貳ツ

一茶桶 壹ツ 一ワゲ再進鉢 壹ツ

一尊形兩界二幅表補繪新敷也、  
是者就曼茶羅供御寄進也

一青磁之花立壹雙・御影堂 惟新様御寄進、滿寺請取相

下候、

慶長十四年己酉七月十五日

成正院

賴眞(花押)

堀小左衛門尉  
重継(花押)

伊勢(貞昌)兵部少輔殿  
本田源右衛門尉殿  
(親尚)

「御文庫拾六番箱十一卷中」

請取申銀子之支

但於大坂請取申候、四度ニ内貳貫目ハ加治木ノ替銀子

一 銀子拾貳貫十匁八

平田大炊助殿

河東善左衛門尉殿

但於大坂請取申候、

一 銀子七百五十匁ハ

蛟嶋筑右衛門尉殿

岩本清左衛門尉殿

一 銀子壹貫八百目ハ

國分

合銀子拾四貫五百六十匁者

右弘方

一 銀子七貫貳百十九匁ハ

廻向院へ相渡候、

一 銀子貳貫目ハ但蓮金院寺地なし懸

万勝院へ相渡候、

一 銀子壹貫四百五十四匁六リ

去年之借用方返弁

一 銀子百廿目ハ

仏具之代

一 銀子六百廿匁ハ

一 わん五束通但四そりわん

一 折敷五束通但大小數百枚

一 茶入大小貳百ふたともニ

一 銀子壹貫三百五十貳匁八モ

上門ノ入目

此外四百七十六匁四分ハ、去年葛西毛右衛門尉在

山中ニ被弘候、門ノ入目合壹貫八百廿八匁四分ハ

モ

一 銀子三百五十貳匁一分一リ一モ門ノ左右併ノ入目

一 銀子貳百九十三匁八リ一モ 馬屋ニ入

一 銀子九拾五匁六分四リ五モ 日雇ニ入

一 銀子五十三匁七分八リ三モ 白壁ニ入

一 銀子卅一匁八分四リ四モ 上門前ノ橋入目

一 銀子拾六匁八分ハ 御へや／＼のえんノ竹

のふしかこいノ入目

御へや／＼のてんじや

一 銀子十貳匁二分八リ九モ うノ入目

一 銀子卅五匁七分七リ 諸振舞ノ入目

一 銀子八百卅三匁四分七リ二モ 新座金之間入目

一 銀子四百卅六匁五分一リ七モ 本堂天井入目 わん箱

・折敷箱・かねこ

一銀十九匁七分ハ

箱、さし賃、物數十七也、

七月十五日

一銀子十四匁七分三リ三モ

小座ノたゞミ沓帖さし

賃彼是ノ入目也、

610 「御文庫拾六番箱十一卷中」

是ハ院家衆へ去年御普請之時

覚

一銀子沓匁八分八モ

どんすしゆすの臺八ツ代

從御國元去年九月廿七日之御付ニ而、御上せ候御書并

一銀子四匁ハ

日記紙二束之代

御音信物之事、

右作夏方

銀子合參貫五百五十三匁五分六リ一モ

内不足ノ銀子四百六匁六分二リ一モ

一りんす貳端 文珠院へ十二月廿五日ニ、留守居南室院・

蓮藏院へ渡申候、返書從東國當春參候、此度小左衛門

尉殿持參被申候置文者、當分留守ニて候間、以面談爲

可申渡留置候、

一米沓石ハ

是ハ曼荼羅供御執行ニ付  
而青巖寺ガ御合力之來也、

銀子ニノ廿貳匁二分二リ

一襦子貳端 前之蓮金院、今ハ万勝院、十二月廿一日ニ

相届申候、此度返書并御進物候、

一大豆九斛六斗ハ

是ハ蓮金院領知行之納之内寺  
家ニ被召遣而之余分之大豆也、

銀子ニノ百三十七匁二分

一同老端并御書增福院へ十二月廿四日ニ渡申候、此度返  
書進上被申候、

有銀子合百五拾九匁四分二リ

右之銀子指引不足之分

一同老端 俊長房へ參候處、南院へ進上申候、同日 御  
書者留置所持申候、此度御礼書被進候、

銀子貳百四拾七匁二分一モ

一沈香沓斤 善集院へ參候處、釋迦文院へ進上申候、同  
日 御書右同、此度御礼書被進候、

作事方渡方

惣都合銀子拾四貫九百六拾六匁六分二リ一モ

慶長十四年

一同老斤 大樂院へ參候處、谷上行人方之頭三人之内、  
修徳院へ進候、同日御書右ニ同、此度御礼書被上候、

一同老斤 宝龜院へ參候處、谷上地藏院へ進候、同日御書右ニ同、此度御礼書被上候、

一 禰子耆端成正院ニ被下候處、谷上正智院へ進上申候、

同日是者宝生院之脇院家谷上院中ニ候間、如此候、此度 御礼狀被進候、 以上去年之御進物、

一 谷上行人方三人之頭坊衆福壽院へ、此度爲御一礼、沈香老斤被進候、 御礼書此度被進候、

一 興山寺當住康徳院へ禰子耆卷、爲御礼被進候、是又留守居地藏院取成、蓮藏院より請取之書物被上候、

一 万勝院へ就万茶羅供、別而馳走被申候、御礼白綿三把被進候、御礼書此度進上被申候、

一 無量壽院へ禰子耆卷、爲御一礼被進候、御返礼被進候、一 檢校様へ此度御法事之由、爲御礼禰子貳端進上候、

一 花立一 双者御影堂へ、檢校様以御意御寄進候、同添狀被成置候、惣山之衆徒中爲名代、無量光院・無量壽院より、御礼書被進候、花立見事成由、諸衆徒被成褒美候、与兵衛尉殿一段能時分登山被申候而、御礼儀其外無殘所相濟申候而、千秋萬歳目出度奉存候、餘者堀小左衛門尉殿口達可被申候、以御分別を、能様御披露奉頼候、以上、

七月十五日

本田源右衛門尉殿

まいる

成正院  
頼眞(花押)

〔慶長十四年ニテ前文ニ付シタル書也〕

611 〔御文庫拾六番箱十二卷中〕

□於蓮金院具□

請取□

一 合銀子六百廿弍匁七分四リ

右私方

一 弍百卅八匁五リ

一 八拾七匁

一 弍百九拾七匁六分九リ

贓衆諸<sup>(後)</sup>者布施

石塔之代銀子

一 賭方ニ入

但小日記別紙ニアリ

三口

合銀子六百廿弍匁七分四リ

慶長十四年

七月十五日

堀小左衛門尉(花押)

成正院(花押)

本田源右衛門尉殿

參

〔御文庫拾六番箱十二卷中〕

高野山蓮金院御建立三付而銀子請取

拂目錄

一合銀子四拾九貫五百十六匁六分二リ一モ

内

卅壹貫七匁二分一モ

鹿兒嶋方

拾四貫五十目ハ

加治木方

四貫三百目ハ

國分方

百五十九匁四分二リ

是ハ蓮金院領納方之内

右弘方

一廿貳貫目ハ

蓮金院寺地知行之代銀子

一拾七貫目ハ

廻光院御再興之入目

一九貫五百廿四匁八分五毛五糸

蓮金院御作夏方

一九百九拾壹匁八分一リ五毛五糸交割物

四口

合銀子四拾九貫五百拾六匁六分二リ一毛

慶長十四年

七月十五日

堀小左衛門尉(花押)

葛西毛右衛門尉(花押)

成正院(花押)

伊勢兵部少輔殿

本田源右衛門尉殿

參

〔古御文書中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

已上

尊翰拜受忝存候、然者爲蓮金院御造営、成正院御登山候、

早速首尾相調申、青巖寺法印并門徒中大慶不過之候、永

々可爲御繁栄存計候、隨而段子壹端被贈下候、拙子式迄

御懇情之段、不得所謝候、猶御使江申上候、恐惶謹言、

〔水ヶ島、  
慶長十四年〕

七月十六日

寶龜院

朝印(花押)

羽柴陸奥守□

〔義弘公御譜中〕

〔案文有之〕

遙久絶音門候處、預芳書再三披閱、本望存候、仍寶性院

就被成逝去、早々御使僧被差下、彼御書置到來、令細誦

候、然者蓮教院住持職之儀、永々代々於不義不学之人者、

不可有相續之旨、誠御宗門之切嗟感入候、殊貴僧可有住

持之由、遺書明白候条、無御辞退、御入寺可致満足候、

猶委曲御使僧讓演説、不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕

七月廿五日

鳴津陸奥守

家久

鳴津兵庫入道

惟新(花押)

俊長房

玉床下

615

〔御軸物十番箱中〕、「家久公御譜中ニ在リ」

尚以鳴津殿御石舟之儀、此方にて申談候、以上、

鳴津陸奥守殿此方御屋形御作事ニ付而、田中伊豆守殿去年已來爰元ニ御逗留候て、萬被入御精無殘所相調、只今御上之事候、御苦勞被成候段、陸奥守殿へ御取成候て可被進候、委曲田中殿可被仰達候条、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕

七月廿六日

本多佐渡守

正信(花押)

山口駿河守様

人々御中

616

〔御文庫二番箱家久公二卷中〕、「家久公御譜中ニ在リ」

以上

琉球相濟申付而、御使者被成御上せ候、即江戸・駿府江

被參、返狀請取、歸國之儀候、琉球相濟申、上様御感

被成、即 御朱印被進之由、本上州々我等方迄被申越

候、目出度儀共御座候、委細者御使者可被仰上候間、書

中不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕

七月廿七日

山口駿河守

直友(花押)

少將様

參人、御中

617

〔御文庫二番箱中〕、「家久公御譜中ニ在リ」

爲使者、差越敷根中務少輔、殊虎皮五枚・熊皮拾枚并燒酒二壺到來、遠路誠以悦覚候、猶本多佐渡守可申候也、

〔朱カキ〕  
〔慶長十四年〕七月廿九日 (秀忠) (花押)

薩广少將とのへ

618

〔御文庫二番箱家久公二卷中〕、「家久公御譜中ニ在リ」

猶以於御上洛者、銀子余仁にて無御調様ニ、隨分御

馳走可申入候、可被成其御心得候、已上、

駿河へ被遣候御使者、從本多上野殿之狀を御言傳り候て、

是迄御立寄候間、一書申入候、隨而先日者御懇之預御使

札、殊色々珍敷物共被懸御意、忝存候、就其琉球之儀、

御存分之儀ニ被仰付之段、御手柄共我等式迄大慶存候、次拙者儀、輝元代より之端城共、此以前一二ヶ所普請申付候処、新城を拵申由、御所様御耳ニ悪敷罷立、當春より御前然共無御座ニ付而、公儀を憚、何方へも書狀之取替しをも不仕候故、乍存以使札も不申入、無音之様ニ罷過候、右之城破却仕、御理申上候処、御所様被成、御聞届、如前普請可仕旨被成、御説ニ付而、播外聞申候、右之御礼爲可申上、去十一日ニ致出船、備前之内牛窓迄罷上候処、今程駿河へ致伺公儀、當秋迄可相延旨、本上州より被仰越付而、自彼地歸國仕候、彼是手前取紛、弥無音ニ罷成候、將亦承候へハ、琉球之王を被成御同道、近日御上之由承候、其刻ハ我等も可罷上候条、於上方懸御目、萬可得貴意候、次最前被仰下候銀子之儀安き御事ニ御座候、則大坂御宿道与へ可被申談旨、林猪兵衛方へ申遣し候間、可御心安候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕

七月廿九日

羽柴左衛門大夫  
正則(花押)

羽柴陸奥守様

人々御中

家久去歲季秋呈書於醍醐山理性院主曰、恩許傳授大元明王之秘法於一僧、須使多識能化之僧受之、院主容之、乃使一乘院受秘傳、家久所庶幾之情意炳焉于書中、

猶々雖輕薄之儀候、段子五端・唐折敷拾枚・唐盆拾

枚進覽候、聊書信之驗計候、

態用一翰候、仍如御存知、我等泰現明王依致信仰、切々預御懇祈、貴寺へ御堂共立申躰候、就其近比雖楚忽之儀候、泰現明王之法、彼一乘院へ被爲傳受候様有度候、誠秘法之儀不輕存候へ共、連々別而得御意儀候間、無吳儀於被成免許者、生々世々辱候、然者爰許へも御堂を立置、明王致勸請、倅家安隱之祈念、朝暮不怠申付度候間、御入魂所仰候、猶一乘院可被申達候間、不能詳候、恐惶、

七月晦日

理正院殿

「家久公御譜中ニ在リ」

同年八月、龍伯自國分來訪于麿城、時家久請待營中、催

和歌會、是因龍伯平素嗜敷島之道也、與侍臣等共分題、  
所詠之和歌如左、惜其中朽損而不全傳亦有焉、

「正文在藤井孝左衛門」  
「口切」

元(綱)

秋のあへれも深き夜の月に聲そふ軒の松かせ

右衛門尉豊信

同

秋の夜の月更ぬれはうす雪の松にあらしをきく心ちする

大炊助久正

同

さらてたに聞すてかたき松風のうへに照そふ夕月夜かな

早秋風

身にしむハ萩吹風の音信てけしきも秋と告渡る哉

家久

秋夕

時雨ふる遠山本の夕暮をなかめやるにも秋そさひしき

常久

契戀

戀しさも契る思ひそ淺からぬかハラしとたゝかくる行す  
忠俊

萩上露

花さかは小萩か本に宿りせんかたしく袖に露かゝるとも

忠重

歎別戀

ゆふつけの聲に恨のいか計うき曉の別とおもへは

宗親

擣衣

さらてたにさひしき物をから衣してうつ里の秋の夕暮

元綱

深更月

起出て見ぬ夜ハあやな曉の空こそ月ハ隈なかりけれ

豊信

山月明

木の間にハほのかに見てし影もはやのほりて清き山のは

伴松

の月

旅宿鶏

こしかたの旅の哀を思ふにもいく夜か聞し宿の鶏

景親

暮秋霜

暮て行秋をしれとや置霜の色浅からぬ物と見るらん

宗可

夜虫

えらふにもわきこそかぬれ草村のふかきにすたくよるの

長泰

恨戀

替りぬる人の心をなみた先しりてや袖にしほれそふらん

久洪

山家

おもひやるよすかハ浅き山路にてすみてこそしれ深き心

久正

田家

まはらなる庵りの内になひき入て風の敷たる稻ひしろ哉

玄与

野鹿

野へにをく朝夕露にさをしかのぬれてやひとり鳴音なる

國貞

初戀

ほの見つる其えにしこそ浅からねおもかけはたゝ身をも

はなれす

暁初鴈

あかつきの雲の絶間と成にけり峯より落る初鴈の聲

重高

不逢戀

歎てもかひなかりけり年月の日に添て猶難面はなに

紹益

述懐

おさまれる御代より人の問くれは山も出へき心ちこそす

れ

慰歌

寄神祇祝

わか君の行急ハ千年万代といのる心や住吉の神

龍伯

右之歌ハ慶長十四年八月吉日、龍伯様鹿兒嶋へ御光儀之刻、御會尺として御歌會於殿中有之也、

623 「北郷久加譜中」

慶長十四年己酉秋、得山口駿河守直友之旨出伏見、候駿

府登 玉城、拜謁 内大臣家康公、執奏者本多上野介正

純也、内府公賜左文字之寶刀、長八寸五分半、歸國後奉直詣

江府拜 將軍秀忠公於柳營、此時久加六歲也、本多佐渡守正信執奏之矣、在江府之中、每日賜一日一百口之給米、

「家久公御譜中」

粵親近 玉體而奉仕之女官廣橋・唐橋之兩局、外三局  
不審其名、去歲以來密通猪熊・烏丸・飛鳥井・難波・大炊

御門・花山院・德大寺・松木及兼安・備後齒醫師兼安男等、  
作醜行益人目、遂達 叡聞則大有 逆鱗、乃降 勅使

於駿府 命家康曰、作醜惡右男女盡以可行腰斬、于是  
家康公召板倉伊賀守勝重於京師、細推問其根由、時亂  
行主張猪熊某大恐懼出奔洛中、無知其所在者、故通此

事於扶桑國中侯伯、各搜索領內、遂於九州之內捕之、  
固囚輿送之、九月十八日至洛、同二十三日勝重從駿府  
還京、經奏問曰、可流九人公家于西國、五人局于東國  
有 勅許、後十月十日、五人局流伊豆國之絶島一處、

其出京之姿殺擾々晝雲蟬鬢、空露無臨圓頂、脫睜々錦  
衣茜裙、更著無彩素衣、櫻桃朱唇失其色、(A.P.)巧笑美目却

垂淚、見之有憐者、又有惡者、既而流花山院于夷島、

飛鳥井少將于隱岐國、松木及大炊侍從于薩硫嶺島、難  
波者鉤著于駿府、烏丸・德大寺者被恩免、猪熊與兼安

・備後於洛中殺戮、實可愼思對禍戒也、遂護送松木・  
大炊御門而來薩摩、則姑使兩邊客居飢島、松木氏者飛  
鳥井雅庸之親族也、因有雅庸依賴家久之書、

『在高山盛光寺』

知行目錄

隅州肝付之郡高山村之内

浮免

屋敷老反式畦十四步一石式斗四升六合六夕 寺地

外その中島老反六畦十四步八斗二升三合三夕 同人

合式石六升九合九夕

慶長十四年八月五日

比志嶋紀伊守  
國貞判

枕山權左衛門  
久高判

圖書入道

紹益判

常充寺

『後盛光寺と改リノカ』

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

追而先度時分者、御所様か 將軍様之御間ニ御一人  
御上洛と申候つれ共、近日ハ御沙汰も無之由、せか  
れかた方申越候、

幸便之条、一書申上候、然者今度公家衆之内、猪熊曲事  
ニ付而、可被成御成敗旨被 仰出候處ニ、行方不知失申  
ニ付而、彼者相拘候在々所々國々、何も堅御法度之儀候  
条、御拜領之御國々、左様之不知もの堅被仰觸、不置置  
様ニ可被仰付儀專一存候、此旨急度申上候様ニと、駿府  
采女かた方申越候、其段安藝少將殿方も被仰遣候様ニと、  
是へも申越候、御使者可被遣之旨候間、如此申上候、公  
家衆之儀別紙ニ書付進覽申候、隨而春三月者預御音信、  
誠以忝奉存知候、拙子も江戸・駿府爲 御目見之罷下、  
仕合能去月罷上、于今在之儀候、於上方御用之儀共御座  
候者、可被仰下候、猶追々可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕

八月十三日

羽柴陸奥守様

人々御中

竹中伊豆守  
隆重(花押)

爲重陽嘉祥、小袖五到來、実悅覺候、猶本多佐渡守可申  
候也、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕九月四日 (秀忠)  
(花押)

薩广少將とのへ

628

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様爲重陽之御祝儀、御服五之内御染ニ・御綾一・  
御南戸嶋一・御のしめ一御進上被成候、致披露候処ニ、  
御仕合共ニ御座候条、御心易可思召候、 御内書之儀者  
重而相調可進候、恐々謹言、

九月八日

鳴津陸奥守殿

本多上野介  
正純(花押)

629

『雜抄』

從 大御所様就我等身躰、 上意無殘所被 仰出之由、  
誠以身餘忝奉存候、仍段子十端・象牙一・南蠻鉄鉋一挺  
致進上之候、可然様可預御披露候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四〕九月十五日

惟新(花押)

627

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

本多上野介殿

「義弘御譜中ニ在リ、案文敷、在加治木柴竹内傳兵衛トアリ」

630

『在官庫』

以上

一書令啓候、仍今度 奥州様爰元御下向被成、兩 御所様へ御礼被仰上候処、無殘所御仕合共にて、早々御歸國被成候、定而於其地旁々珍重可思召候、然者去比琉球ニおゐて、御苦勞御骨折共にて候、於此方感入事候、將亦御息久太郎殿、今度御供候て御下ニ候、於爰元懸御目候、一段御成人にて候、隨而爲御音信、御太刀一腰・馬代銀子三枚并段子二卷被懸御意候、遠路御懇意忝存候、何も期來音之時不具候、恐々謹言、

十月二日

本上野介

正純(花押)

枕山權左衛門殿

御宿所

631

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申上候、仍而貴殿様江戸之御屋形御作事就被仰付、

田中伊豆方被罷下、一段御普請ニ情入、早速相濟申之由、拙者方能々可申入通、本多佐渡守方被申越候、則佐渡

書狀爲御披見進之候、猶追而可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕

十月十日

山駿河守

直友(花押)

奥州様

參人御中

632

「御文庫四拾九番箱三卷中」

猶以此式ニ御座候へ共、御樽忝荷・御着兩種令進覽之候、御慶迄ニ候、已上、

態令啓達候、仍而今度從奥州様、到琉球國御人數被仰付、早速御案内之段、目出度奉存候、尤早々御悅爲可申上、手前何角仕遅々令迷惑候、併御祝儀爲可申上用使札、御同前ニ捧嘉札候、猶重々可得御意候、恐惶謹言、

十月廿八日

松浦法印

宗静(花押)

羽柴兵庫頭殿

令進覽之候

633

「忠元敷功記」

忠元大口地頭職數十年相勤、極老罷成候時分、嫡孫加賀

守忠清罷在候へとも僅十六歳ニテ、大口之儀ハ肥後境、諸事不被爲入御念候て、不叶場所柄ニ付、存沢茂候哉、

跡地頭之儀者、外孫伊勢兵部少輔貞昌江被仰付度趣爲申出置由、且又忠元毎度戰場ニ爲持來候鳥毛輪違の馬印茂、

極老相成、輪違取分ヶ耆ツ宛ニして、一輪は忠清、一輪は貞昌へ相譲り爲申由、左候而貞昌馬印は右鳥毛輪の上

に一文字相加へ用られたるとの趣キ、貞昌家傳ニも有之よし、

634 「正文在大口土丸田氏」

定

一女房衆今度申定たることく、拙齋へ奉公於無之者、後日稱其沙汰可有之事、

一女房衆身持あしき由取沙汰候ハ、曲事之儀次郎四郎殿申談、きひしく可申理事、

一惣列之内衆、拙齋御年寄候とて、無沙汰之躰見及候、自今以後於其儀者不差置、可致其慶事、

一次郎四郎殿御若輩に候とて、聊尔有之ましき事、一對衆中憚いたす間敷事、

右条々拙齋御老屈と申、次郎四郎殿御若輩にて御座候

間、我等無余儀事候間申事候、此旨相背ともからあら

は、「大田カ」雲雪老へ憑置候、其下ニ付而兩役人丸田久右衛門尉へ申聞候、若此三人致遠慮見かくし聞隠候ハ、曲事之段稱可申理者也、

慶長十四年

十月八日

兵部少輔判

635

「伊勢貞昌自記之内」

一地頭所之事、高麗入之時分者川内之山田、庄内御弓箭之以後より谷山、其後新納武藏入道拙齋祖父ニ候故、

大口之地頭可讓渡之旨、上聞候て彼所被仰付、三ヶ年程雖令下知候、大口者境目ニ而地頭不移居候ては難成所ニ候故御理申上、如本々谷山之地頭被仰付候、

一拙齋度々被遂高名候鶏毛輪違之馬驗を二ツニ分候て、耆ツハ我等、一ツ者新納賀州へ被讓之条、其輪之上ニ

鶏毛之加一文字、爲我等之馬驗矣、

一息大隅貞豊妻者種子嶋久時嫡女、不幸而夫婦共ニ早世有女子、奉應 黃門様之尊命、光久様之稱御前、御

惣領 綱久様并御女子御誕生、以如斯之次 黃門様御子貞昭公申請、奉成伊勢之養子訖、

636 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

先度捧愚札候、仍松木其御國江下向之由候、拙者親類之儀候間、於被加御詞者可爲恐悅候、萬事奉頼候、少將者隱岐國、難波者駿府江可罷下旨被仰出候、不慮之仕合、外聞迷惑不及是非候、猶追而可申入候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
慶長十四年「霜月七日

雅庸

陸奥守様

人々御中

637 「家久公御譜中」

家康公明春將城尾州名護屋、命營築之事於北國及九州侯伯、故本多正純以極月二日奉書、豫演達其事於家久、山口直友亦有同月十三日之書焉、

638 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書令啓上候、仍來春尾州之内、於名護屋御城取御座候、就其北國・九州衆へ可被 仰出旨御座候、左様ニ御座候へハ、御普請之儀ハ、石垣可爲御普請候間、其御心得可

被成候、日限之儀者、重而可申入候、猶御普請之様子、御普請奉行衆へ可被申入候間、不能具候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
慶長十四年

極月二日

本多上野介  
正純(花押)

嶋津陸奥守殿  
參

639 「薩州家譜中」

「備前守忠清譜中」

慶長五年庚子九月十四日、濃州關原之役關西之軍敗而行長就囚、遂遭誅、繇焉後移住居同州熊本、〔肥後也〕加藤肥後守清正之領士、太守義久公愁之而徵之、忠清之姪島津下總守常久三郎次郎忠隣之男、亦欲邀之、遣船促歸國矣、慶長十四年十二月三日、忠清牽一女十一男七、着船于薩州阿久根、來乎廳府胥處焉、忠清之女爲 太守家久公妾、生 光久公、遂爲 國夫人、依焉忠清受恩遇最渥矣、

640 「新納忠元譜中」

慶長十四年己酉 龍伯尊君使稅所彌右衛門尉傳 高命曰 拙齋自童壯至老年向戰場、所施譽名之場數悉以記之、宜備之於 台覽、然則束以寫之於一紙、爲後證可附與矣、

由是只書他人見證之田頭十九个度、所以進獻也、其餘無見知證與隔門壁爲鬪戰者、雖其數多皆以用捨之也、其後季冬初七賜感牘矣、記左、

「先年弓箭中云ミ左ニアリ」

641

『在新納氏』

新納武藏入道殿

龍伯

先年弓箭中別而忠勲之儀、于今聊無忘失候、殊更今度其条々被書記候、委一覽、誠數度之粉骨、弥以無比類存候、仍爲顯感懷一筆如斯、

慶長十四年

十二月七日

龍伯(花押)

新納武藏入道殿

「左ニアリ、重複」

642

「忠元勲功記」

慶長十四年酉冬、從貫明様稅所弥右衛門御取次を以、忠元若年より老年迄、諸所戰場にて高名爲仕場數等不殘書記、奉備御覽候様被仰付、其時忠元慥ニ其場之證據

有之、纏頭之合戰拾九ヶ度の事を書記差上、其外門壁等相隔戰功之次第、爲見知人無之、手柄茂余多御座候得共、證據無之事ハ皆略爲仕由、然処、同十二月七日、貫明

様方忠元<sub>江</sub>御感狀被成下、先年御弓箭中、別而忠勲今ニ聊茂御忘失不被爲在、殊更今度其條々書記、委數御一覽被成下、誠ニ數度之粉骨弥以無比類被思召上、依而御感懷被爲顯候御爲、御一筆如此与之趣被仰下候由御座候、

643

「新納家藏書」

御感狀之前ニ可書入事

慶長十四年己酉 龍伯尊君使稅所弥右衛門尉傳 貴命曰、拙齊自童壯至老年、向戰場施名譽、其場數悉以記之、宜備台覽、然則束以寫之於一紙、爲後證可附與、是以唯書他人見證之田頭十九ヶ度所以進獻也、其餘無見知之證与隔門壁爲鬪戰雖其數多、悉用捨之矣、其後季冬初七賜感牘矣、記左方也、

644

「正文在新納氏」

(本文書ハ六四一號文書ト同文ニノキ省略ス)

645 「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓上候、先日も内々申上候尾張御普請之儀、拙者方御觸狀、當地御衆迄可相届之由候間、進之申候、御用意御由断なく被仰付御尤存候、猶追而可得御意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔慶長十四年〕

十二月十三日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參人御中

646 「家久公御譜中」

家久爲奉謝述琉球國拜賜、且今年中爲球國政務參觀恩免、歲暮之壽等、使町田勝兵衛久幸獻幣物品數見御内書、於兩御所、則共賜回命之台書、本多正信・同正純亦以奉書、苦所報答僉編連、在于左方、

647 『在文庫』 「義弘公御譜中ニ在リ」

就先度琉球一果之旨、注進到來、以内書申越候訖、依之太刀一腰・馬一疋并端子拾卷、欣思召候、委細本多佐渡守可述候也、

〔朱力キ〕  
〔慶十四年〕極月十五日 (秀忠)(花押)

羽柴兵庫入道とのへ

648 「正文在文庫」

琉球早速退治旨、先回注進付而、以内書申越之處、重而來音物、青貝二十四・孝之床・屏風并段子十端到來、珍奇之至感悅覺候、猶本多佐渡守可申候也、

〔十四年〕  
極月十五日 (花押)

薩摩少將殿

〔家久公御譜中ニ在リ〕

〔右二通ノ正文、旧御番所御文書二番箱中國統新龜鑑中ニ在リ〕

649 『在官庫』

尚以巨細ハ御使者可爲言上候、以上、

如尊書先日者琉球之儀ニ付而、御使者進上被成候處、御内書被遣、殊從大御所様彼地拜領被成候儀、御祝着之段、則御參府候て雖可被仰上候、當年中緩々御在國候て、琉球御仕置等可被仰付之旨、御錠之通、上野介かたより啓上仕候ニ付而、被任其儀之由被仰下候趣、一々披露仕候處ニ、尤被思召候、然者段子十卷并唐之床

進上被成候、爰許玠御進物にて不大形御仕合共、御座候、

就中爲歳暮之御祝儀、呉服十、何も被爲入御念候儀、不  
斜被 思召、御内書被遣候、隨而私へ段子五卷送被下

候、いつもく之御心付難申謝候、猶爰許之様躰、委曲  
町田庄兵衛殿可爲言上候条、奉省略候、恐惶謹言、

〔十四年〕

十二月廿日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

〔此正文、御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ〕

〔御譜中ニ在リ〕

651  
〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

爲歳暮之祝義、小袖十到來、悦寛候、委曲本多佐渡守可

申候、謹言、

〔慶長十四〕

極月廿四日

〔秀忠也〕

(花押)

薩广少將殿

652  
〔御文庫二番箱義弘公五卷中〕 〔義弘公御譜中ニ在リ〕

尚く琉球之儀被属御理運、御所様御機嫌比類無御

座候、

雖未得御意候、令啓上候、然者爲御音信段子一卷拜領、

忝次第候、就中此地へ御使者御下被成候、即本上州御披  
露之處、中にも織放御意ニ入、御所様一段御機嫌能御

座候、定而御満足可被思食候、爰元御仕合之段、御使者  
可被仰上候、我等事少將様最前より被懸御目候間、相應

之御下可被仰付候、猶御使者へ申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年歟〕

極月廿四日

清水水平左衛門尉

光直(花押)

嶋津兵庫頭様

人々御中

652  
〔古御文書中〕

猶々來春御下向之刻、万々可得御意候、

貴札拜見、殊段子三卷拜領、忝奉存候、就中琉球國被属

御理運、千秋万歳目出候、御手柄之段、於此地其隠無御

座候、將又琉球御拜領、剩當年無御下向、爲御札御使者

被成御下候、即本上州御披露之□ 御所様一段御機嫌能

御座候、定而御満足可被思召候、万々此表様子町勝兵衛

可被申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十四年〕

清水水平左衛門尉

極月廿四日

光直(花押)

薩摩少將様

尊報

653

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

九月廿三日之御懇書、忝致拜見候、先以其表御無事之由承、目出度存候、來春ハ駿府・江戸爲 御目見、可被成御上之旨、乍御太儀御尤存候、此地相易義も無御座候、將又拙者事、兩 御所様御前一段と仕合之儀共ニ御座候、去月 大御所様御鷹場より御鷹之齣致拜領候、殊者朔日ニ 大御所様致御目見候処、御機嫌能御座候て、我等先年之忠節于今不被成 御忘と御直ニ被 仰出、様々御懇之 御意共ニて御座候、其上御暇被下候、本佐渡守殿・同上野介殿色々御取成にて御座候、年内者余り無御座ニ付て、御年頭申上可罷上覚悟ニ御座候、何も國本より可 得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「慶長十四年」

十二月廿五日

福島左衛門大夫

正則(花押)

鳴津陸奥守様

御報

654

『在官庫』

(本文書ハ八八五号文書ト同文ニノキ省略ス)

655

『全』 『義弘公御譜中ニ在リ』

爲音信、段子十端・象牙并南蛮鉄炮到來、悦思食候也、

「カキ」  
「慶長十四年」

十二月廿六日

(家康)

「御墨印」

鳴津兵庫入道とのへ

656

「家久公御譜中」

「此正文旧御番所御文書ニ番箱中 國統新龜鑑之中ニアリ」

『正文在文庫』

琉球國可被領知之旨申遣候処、祝着之段尤候、仍爲音信、  
仏草花・もり花并硫黄千斤・唐屏風・しちん五卷到來、  
悦思食候也、

「朱カキ」  
「慶長十四年」

十二月廿六日

「墨印」

「家康也」

薩摩少將とのへ

657

『正文在文庫』

以上

兩通之貴札致拜見候、仍今度琉球之儀、御拜領被成候付而、 御内書被進候処、御外聞実儀忝思召之通、被成御

上、御礼被仰上度思召候へ共、彼國御仕置等爲可被仰付、其上彼國王來春御同道候而、御上可被成付而、年内之儀御延引被成之由候、左様ニ御座候へハ、御礼遅々致候由候而、御使者にて被仰上候、就其爲御進物、佛草花一本・茉莉花一本・唐之板屏風并疏黄千斤御進上被成候、如御目録懇致披露候之處、遠路被入御念旨御座候而、一段御機嫌共にて殘所無御座御仕合ニ御座候間、御心安可思召候、則 御内書被進候、然而此地弥相替儀無御座候、猶爰元相應之御用等御座候者、不被御心置可被仰付候、不可存疎意候、委細者御使者へ申入候間、可被申上候、恐惶謹言、

〔米カキ〕  
〔慶長十四年〕

十二月廿六日

本多上野介  
正純(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

658

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

(本文書ハ九七九号文書ト同文ニノキ省略ス)

659

琉球入ノ記

行仁

一慶長十四年己酉 三年一度捧貢事前代古法也、三月征琉球

國、初琉球國 忠國公時、將軍足利義教公所賜而、納貢不違時、慶吊不失禮間、乘國家騷亂、國王尚寧從慶長之初不納貢、且不賀徳川家創業、公遣使譴責焉後拒不奉命、於是 公怒告 二將軍起軍伐其罪、命樺山權左衛門久高國爲將、平田太郎左衛門増宗老爲副將 二月廿六日 龍伯公及 惟新公 家久公作連花押軍令授之、

〔頭注〕昔 御城下御船手ハ、上祇園ノ洲川尻にて、役所も別

火所邊ニて者無之哉、琉球入の時柁山殿大將被仰付、

平田殿副將被仰付候由、祇園洲より出船之節、船送之

衆多人數有之、押卷を鋪別酒之時、柁山との若候故、

平田殿へ上座辭退有之候得者、新納忠元八十二才ニ而

候由、柁山殿へ被申候者、御ゆつりの場ニて者無之候、

御名代之事候間、御付之様にと被申、柁山殿上座に御

直り候由、諸人年若ヲ大將にハ不足の様、内々爲申由

候得共、忠元之取合ハ屹与久高に威爲相付由、

一 忠元ハ慶長十五年八拾三歳ニ而死去歟、

一 新納加賀守拙齋之軍勞覚書ニ、慶長十六年十二月三日、

忠元八十五才ニテ死去、

琉球渡海之軍衆法度之條々「正文権山助太郎忠賜家藏」

慶長十四年二月廿六日

家久御判

惟新同

龍伯同

一物主相定候間、彼衆以談合可申出儀不可違背候事、

一喧嘩口論之儀、不断雖爲一法度、今度者別而各可相者

事可爲肝要候、縦不圖喧嘩出來候共、兼而如法度私ニ

而不相果、重而可遂披露、若此旨を相背於破事者、い

かやうの理雖有之、不及理非之沙汰、一組可處罪科事、

一鉄炮もちたる衆、或し、鳥をねらい、或たて物を射

いたつらに玉薬をつくすまじき事、

一船之出入おもひ／＼に無之様ニ、惣別同前ニ可有之事、

一其組を離、他之手に付まじき事、

一手に入たる島々の於百姓者、少も狼藉いたすまじき事、

付従大嶋此方泊／＼、各可爲同前事、

一堂宮付寺等あらずまじき事、

一可相働時、海陸共ニ惣人數を不待合、無人衆にて先懸

いたすまじき事、

一經其外書籍等むざととりちらす間敷事、

一無罪者殺害一切可爲停止事、

一順風よく不見定、不可致出船度、

一所知衆可申旨を不可相背度、（存之）

右條々堅相守不可違背者也、仍法度如件、

本田伊賀親政鹿兒嶋方武頭

市來備後家政同上

市來八左衛門家繁同上

有馬次右衛門重純兵具奉行

長谷場十郎兵衛實銃奉行

山鹿越右衛門鎮幸（頭住）「山鹿氏ハ鶴原城攻ノ時敗四五人ヲ突殺シテ手ヲ負ワル、」

本田弥六親正

穎娃主水親智

平田民部左衛門宗位

伊地知四郎兵衛重賢

白坂式部篤利

毛利内膳元親

村尾源左衛門入道松清

柏原周防入道有閑

伊集院半右衛門久元國分方武頭

佐多越後忠増

東郷安房入道休伴

兒玉四郎兵衛利昌

川上掃部直久加治木方武頭

以下相従士百餘人其兵都合三千餘人、鐵艦一百餘艘、三月四日曉天（世祿記作二月廿一日）解纜於

薩州山川港時、

家久公立馬于灣上指揮之、（先船計出船ト橋日記ニアリ）惟新公

亦臨之、（龍伯公製一句祝之、むかふ風あらぬハ梅のにはひかな）久高・増宗『奉嚴命』

爭先出船進襲大嶋、嶋民長尺降、赴徳之嶋、嶋民堅禦

我兵、急擊斬獲三百余人、『島』賊恐僉從『服』、永

良部嶋亦望威風降、△四同月廿日 家久公勞諸軍、使岩切

彦兵衛國信賜温酒三十樽於諸軍、且賜書久高而降軍令

△五又△二△頭注「此下本文誤有ラン歟、最初進舟那覇ニ至ル、張鉄鎖而防吾兵

二將、進船至運天津、具志頭王子尚寧・三司官浦添按

故那覇港ヨリ二十四里ハカリ隔テ運天港ト云有、是ニ舟ヲ總ランテ着之、コノ所

司・名護按司・謝那按司掉扁舟來、使西來院請和、然

未知其眞偽、三月盡到大椀津、明日欲到那覇津、有張

鉄鎖津口守之說、故巡船至他津、四月朔日朝、分軍海

陸並進放火民屋、琉賊挑戰、三日我兵震勇斬殺數百人、

遂至都門毘王城首里、急欲陷之、於是國王尚寧請降二

將許焉、同五日下午、五月五日久高・増宗卒尚寧王及

按司・三司官發琉球、同十四日山川江着船、同廿五日

凱旋于麿府、公即以樽酒勞兩將及士卒賜感饋、賞賜

有差、△三先是久高使飯牟禮紀伊介光家・貴嶋采女賴張、獻捷書

家久公、公亦使人告 將軍、

至于琉球差越兵船彼黨數多打捕之、殊更國王及降參、

三司官以下近日着岸趣、誠以希有之次第候、委曲本

多佐渡守申候也、

七月五日 秀忠御判

島津修理入道殿（本文書ハ五九一號文書ト同文ナリ）

到琉球國差越人數、不經日數彼輩討捕之、其上國王

降參、近日到其國可着岸之旨、最無双之仕合候、猶

本多佐渡守可申也、

七月五日 秀忠御判

羽柴兵庫入道殿（本文書ハ五九二號文書ト同文ナリ）

到琉球差遣兵船不移時日及一戰、彼黨數多討捕之、

剩國王降參之上并三司官以下至其地、不日可爲渡海

之注進狀、誠以無比類働共候、猶本多佐渡守可申候

也、

七月五日 秀忠御判

薩摩少將殿（本文書ハ五九三號文書ト同文ナリ）

琉球之儀早速屬平拘之由注進候、手柄之段被感思食

候、即彼國進候条、弥仕置等可被申付候也、（均カ）

七月七日 家康御判

薩广少將とのへ（本文書ハ五九四號文書ト同文ナリ）

「此御礼ニ從龍伯公町田出羽久倍ヲ被差上、十二月久倍上テ神祖

と台徳公を拜ス」

一 貴札致拜見候、仍琉球爲御手遣御人數被差越候之処

ニ、大嶋与申候嶋早速被仰付、從其徳与申嶋へ御人數赴被申候処、彼嶋之先手出向候付而及一戰、則被得勝利、彼嶋之先手二三百人被討捕候ニ付、重而不及吳儀、彼嶋相濟、從其琉球之國王被居候嶋へ被取掛候処ニ、於彼島も國王雖被及行候切崩、數百人討捕、國王之居城取卷被申候処、頻ニ降參ニ付而任其儀、王城下城候而、下々方々江逃散候者被召返、已前ニ有付候而、國王并三司官其外頭立候先手召連、頓而可有歸朝之間、以使者被成御注進候、御紙面之通一々懇ニ奉達 上聞、大御所樣感被思召候段、一段之御機嫌共ニ御座候而、無殘所御仕合共御座候間、御心安可思召候、誠遠路と申、於吳國無比類御手柄不淺候、其元御満足之段奉察存候、則琉球之儀被遣之旨御座候而、御内書被遣候、御外聞実儀不可過之候、弥彼地之様子可被成御注進之由、御尤ニ御座候、猶此許相替儀無御座候、此表何ニ而も相應之御用等御座候ハ、不被御心置可蒙仰、聊不可存疎意候、何も追而可得御意候、恐惶謹言、

本多上野介

七月十三日

正純判

羽柴陸奥守様

貴報

(本文書ハ六〇三号文書ト同文ナリ)

『以上

貴札致拜見候、仍琉球へ爲御手遣、御人數被指渡候処ニ、何も無殘所早速相濟、則琉球之國王并三司官其外頭立者共召連、頓而歸朝可有之由、陸奥守殿も御注進被成候、何も御紙面之通懇達上聞之処ニ、大御所樣感被思召、一段之御機嫌ニて御座候ニ付、琉球之儀羽柴陸奥守殿へ被進候旨御座候而、則御内書被遣候、無殘所御仕合御座候間、御心安可思召候、誠琉球之儀思召候ニ相濟、御手柄不淺候、其元御満足之段奉察存候、將又爰元相替儀無御座候、何ニても相應之御用等御座候ハ、不被御心置可蒙仰候、不可存疎略候、恐惶謹言、

七月十三日

正純(花押)

本上野介

嶋津龍伯様

貴報

(本文書ハ六〇四号文書ト同文ナリ、前文書ノ行間朱書ナリ)

由是以使者謝恩、義弘公献太刀一腰・馬一疋・緞子  
『南浦集八月五日尚寧訪久正宅、令弟久志頭ニ公卿・西米院・報恩寺從之、文之

十卷 秀忠公、家久公獻佛草花・硫磺千斤・唐屏風  
侍、大臣難多如此、龍伯公相尚擊於華聚、文之侍有詩、  
・縹珞五卷 家康公、床屏風・緞子十卷 秀忠、

就先度琉球一果之旨注進到來、以內書申越候訖、依  
之太刀一腰・馬一疋并緞子十卷欣思召候、委細本多  
佐渡守可申述候也、

極月十五日 秀忠御判  
羽柴兵庫入道とのへ

(本文書ハ六四七号文書ト同文ナリ)

琉球國可被領知之旨申遣候處、祝着之段尤候、音信  
佛草花・盛花并硫磺千斤・唐屏風・縮珞五卷到來、  
悦思召候也、

十二月廿六日 家康御墨印

薩厂少將殿江

(本文書ハ六五六号文書ト同文ナリ)

琉球早速退治之旨、先回注進付而、以內書申越之處、  
重來音物、青貝二十四・孝之床・屏風并緞子十端到  
來、珍奇之至感悦覚候、猶本多佐渡守可申候也、

極月十五日 秀忠花印

薩厂少將殿

(本文書ハ六四八号文書ト同文ナリ)

慶長十五年庚戌八月 公以尚寧朝駿府、慶長十二年丁未正  
月築駿府、七月三  
日 家康公 先是五月十六日發鹿兒嶋、尚寧、其弟貞直  
移于此、御供御家老比志願、  
用人三原重種・山田有榮等也、六月十九日、 (頭注) 比志願紀伊守困貞、  
王子等從之、入大坂津、橫樓船於中流、爲管絃漕舟、  
老若男女貴賤群集、道中各然、二十「而」至伏見、七月十日  
出伏見、八月六日至駿府、五位家内弟子丸越後守・七日訪本田上州將尚  
八日携尚寧登城見、家康  
公、謝賜琉球國、獻太刀一腰・白銀一兩、大相國使  
勞之、千枚、「龍伯公遣平田越前守宗親獻神祖紅糸二十五斤、緞子二十五端、  
・縹珞三十卷、尚寧又獻緞子百卷、縹珞百、羅紗十二  
白銀二十五枚・太刀・馬代三百疋、十間、「白銀千枚イ万両、惟新公應本  
尋・太平布二百匹・蕉布百卷・太刀一腰、十八日應本  
伊豆守獻贈之、御馬、「獻右兵衛君・常陸君、御鶴君白銀各五十枚、紅糸各廿斤、  
又登城、賜饗且貞宗腰刀及脇差、共貞、常陸介賴宣年九  
才鶴松丸八、起而舞曲、十九日給暇、廿日發駿府、廿五  
日 公以尚寧登城見 秀忠公、獻緞子百卷・虎皮十枚  
日 至江戶 假屋ハ誓願寺、行仁傳曰、公初朝江戶、無邸故、廿六日  
宿愛宕真福寺、通昭按、是時宿真福寺ナリ、廿六日  
「賜行平腰刀号天日丸、時尚寧弟具志願有疾、于途使平田安房介宗衛看病于府中、  
將軍秀忠公遣使勞之、廿七日亦遣使賜八木千俵、廿八

・白銀一萬兩・太刀長 於 秀忠公、太刀・馬・紅糸  
百斤於 副君家光公、尚寧又獻緞子百卷・太平布二百  
匹・蕉布百卷・太刀一腰於 秀忠公、緞子五十卷・太  
平布百匹・蕉布五十卷・太刀一腰於 嗣君、九月三日  
亦使平田越前守獻、秀忠公、緞子十五端、紅糸二十五斤、白銀二十枚、御太刀  
應召登城賜饗、七日亦召茶亭、自賜茶、十二日又携尚

・白銀百枚、沈香十斤、緞子二十端於御臺君、緞  
子五端於御局、同品於御祖母君、白銀万両、「虎皮十枚」  
此日 龍伯公  
應召登城賜饗、七日亦召茶亭、自賜茶、十二日又携尚

・白銀百枚、沈香十斤、緞子二十端於御臺君、緞  
子五端於御局、同品於御祖母君、白銀万両、「虎皮十枚」  
此日 龍伯公  
應召登城賜饗、七日亦召茶亭、自賜茶、十二日又携尚

謝恩」 『祥台顯山形駿河守家親執奏尚寧』

寧登城、十六日亦召賜饗應、且賜二刀加賀貞宗、二馬及於太長光

名馬等並拔

櫻田邸、幸橋

是日賜暇、廿日發江戸、公經木曾路、尚

寧過東海道還薩州、即赦其罪歸琉球、於是尚寧深感

公仁德獻誓書、諸按司亦獻神裁報謝之、

慶長十六年也、至今國王即位則獻誓書爲例、

誓書ヲ獻スルコトハ慶長十七年ニ來レルナルヘシ、王ノ從弟勝連

按司來ル、

夫中山王と奉申者、鎮西八郎爲朝朝臣之御子孫と申傳  
候、然ハ中比中絶いたし、女子有之候而跡目相續、直

子無之ニ付與部治嶋の百姓之子、他之子ニ相替器量者

之故爲跡目、女子ニ取合、于今御子孫續來候、然者日

本將軍方江三年一度ツ、御參勤ニ而御客人之由候、其

節ハ薩ノ御押爲被遊由、其比琉球ハ常ニ諸廻船賣商

場ニ而、唐土吳國方之小嶋、日本國之商人、或ハ鹿兒

嶋坊之津・山川・七嶋中之もの不殘琉球國江集居候而

商賣仕候、左候而七嶋之諸船頭琉米積登候砌ハ、式斗

五升入耆俵を、三斗式舛にして、古錢六拾文程に賣商

爲仕由候、耆石ニ付代錢式百四拾文ニ而候、然者其時

分上方謀叛人有之折節、大学寺殿覺と申人家來山伏部垂

讚岐坊といふ者を召列薩廣頼に下られ候処、將軍方

ノ大学守殿を主從共ニ打取可被成、左候ハ、琉國を可

被遣由候、然者頼來ル人を討取事、難成被思召候而、

可進候間早ニ討取可進由候得共、討取候ハ、琉國を可

被遣由ニ而候ニ付、討取候杯と世間沙汰可致候ヘハ、

嶋津之家マシ瑾と被思召、琉國を不被遣討取可被進由相究、

讚岐坊ハ強力不敵者ニ而討取被成様も無之候処ニ、枇

山美濃守殿計を以討取爲被成由候、大学寺殿・讚岐坊

菩提所之儀者、大興寺如來堂之由候、爲忠功琉國を給

候、七嶋之諸船頭五枚帆餘多ヲ琉米積登上納仕、又賣

船にて琉米耆艘ツ、積登運賃に爲申請由候、

一抑琉國中山王御役人她那親方・池城と申候而式人有之、

其比七嶋と申ハ、式拾四人棟梁有之、其比手下之者ヲ

水手として琉國江上下仕事候、然者兩人之親方ノ諸船

頭江被仰聞候者、國主方ノ銀子別而差支候、大和之殿

様江御訴申上候而、銀子式百五拾貫目拜借仕度可被仰

上旨御頼ニ付、諸船頭她那親方・池城親方と相談之上、

利銀五割に相究大和江御訴申上、願之通銀子式百五拾

貫目拜借被仰付持下、右兩人之御役人江相渡、每年利

米として五枚帆餘多ヲ琉米積登上納仕來事ニ候、其以

後利米相渡不申候ニ付、様子申入候得者、她那親方  
承候者、其銀子之儀者此内米ニ而漸々本崩にして無出  
入濟切候と被申候、就夫池城方江她那親方被仰聞候  
趣申入候得者、諸船頭申出趣、無別条道理至極候得  
共、她那より右通被申懸候得者、我等如何様難計候、  
此段她那方江相達候様にと可申入旨承候付、又々她那  
方江再三断申入候得共、相達不申、其上七嶋之頭立之  
者何れも呼寄被申掛候者、右銀子ハ此内米ニ而漸々濟  
切候処、聊尔を申者ニ而候、左様輕至極を申者ハ、料  
分として臈膝を挾法様候とて、左之臈膝を稠敷挾被申  
候、右之臈膝を差出可申、双方一度挾可申と被申掛候、  
諸船頭腹を立、右之臈膝を挾ませ申事難成候、右之臈  
膝と申ハ、大和之殿様江叶仕膝ニ而候得ハ、曾而不罷  
成と申切而膝を出不申候ニ付、如何様思召候哉、其假  
被召置候、右之通非道之仕形被致候ニ付言上申、返答  
不仕候而者、叶間鋪と相談相究、急ニ罷登候而委細之  
段言上之処被聞召上、御使僧として兩度迄琉國之國主  
方江被遣候得共、她那親方散々持成候ニ付、むなし  
く被罷登候、亦々伊集院廣濟寺者琉國之出家と同派之  
故、御使僧として御遣被成候得共、全致大形蔑ニ取持

候ニ付、無是非七嶋中之嶋迄登居留候、於其儀ハ她那  
呼寄口柄被聞召上、御詮儀之上ニ而被仰付様も可有之  
由との事にて、御大將梳山美濃殿・平田太郎左衛門殿、  
御中取衆伊十院長左衛門殿・蒲地備中殿・野元源左衛  
門殿、船奉行山鹿越右衛門殿、鹿兒嶋士衆四拾人、其  
外庄内衆餘多、七嶋頭立之者兵式拾四人、嶋中惣人數  
式百五拾人、都合一千三百人、船數七拾五艘、皆五枚  
帆ニ而候、左候而七嶋ノ案内仕、于時慶長十四年己酉  
二月、鹿兒嶋御出船被遊、大嶋之内津代湊江御入津被  
成候処、俄ニ難風罷成、七拾五艘之内七拾艘方々吹流  
し、漸々大嶋へ取付、方々江相繫、五艘ハ大將樺山美  
濃守殿七嶋之船御手之六人、七嶋之頭立拾式人供ニ御  
乘被成候、都合五艘者津代湊へ漸々乗付被成候、鹿兒嶋  
之御船者西間切ニ相着候、左候而平田殿より樺山殿方  
江加勢を可被遣由被仰越候得共、先々追拂可申由之返  
事ニ而、加勢御請不被成候、大嶋中之百姓共是を見て、  
大親を大將として三千騎船本へ馳來、前方柵ハ振置ぬ、  
以之外相隔防候、然者船より鉄炮にて塞を打倒し、大  
親を生捕候ニ付、殘百姓共棒の先方於松出て打倒候そ、  
何れも逃よと逃散、追付御手に附申候、其節大親か子

燒内太郎と申者、生年拾三才、母か召列拜山奥深く隠居候て、十三日程罷居候而世間鎮、又母列里の如く爲慶長十四年十三才候得者、慶長二年十罷歸由候、右太郎事近キ比迄存命西之生二而、壽命いたし候へ、貞享元年八十八才ニ當候間、延宝・天和之比ニも而細く物語仕候、夫乃徳之嶋足徳湊へ、船乘入被成候処、掟兄弟三尋計之棒相果候半、然者此冊も元禄之比爲書置もの歟

此棒ニ而千や式千や宍打ニ打殺へし、家毎ニ粥をたきらゝかし、大和人ニ膝を焼せんため坂や道に流し置、水さしニ而粟粥差附よ、相殘百姓共棒をとからかし、或ハ竹の先、包丁や山刀をくひり付、打殺せと下知をなし打廻しに、庄内衆六七人打臥、其外の人々も海に追入手痛働候ニ付、防兼候処、庄内士丹後守進出、兄か胸本を鉄炮ニ而打通候処、高らかに目にもかゝらん棒の先方火か出て、打倒し候そ、皆逃よと家に走入終ニ死申候、兄ハ七尺式寸にして強力ものにて、弟事ハ濱の手にて打捕候、大和之人々勢をなし切まくり候ニ付、百姓共委く切拂、頓而御手に付、七嶋頭立の内吉兵衛・彦九郎・早左衛門・助四郎・仙太夫假名、小松兄弟五人之内吉兵衛事戦死仕候、左候而冲永良部嶋江御寄被成候処、荒波岩瀬夥敷可寄様無之候、冲永良部嶋の主那覇之船此湊へハよもや寄せ間鋪候、寄候ハ、

為有之由申傳  
船悉ク可打破、直ニ那覇のごとく船可參と評定取、成

る所に、思ひもよらず大潮滿來て岩瀬の上を浪こし候處、大和の人々勢を成し船皆々乗入候而、永良部三手以使僧降參仕候、然者柁山殿も不及一戦ニ茂馬鹿者共と被仰候、于今其所を馬鹿尻と申傳候、夫ハ那覇をさして御寄被成、御大將樺山殿御船者湊之冲江御叩被遊、七嶋之頭立之者共大將として、七艘之船ニ七嶋中之人數計被召乘、眞先掛而乗入候而、那覇之湊口廣式拾五間、内流五拾間、高石垣ニ所く矢挾間を明ケ、大石火矢を構置、湊之底ニ鉄之網を張、稠敷用心仕置、大將地那親方三千騎引烈、右之網を持登石火矢を討掛候處、船悉被打破候、去れ共宍人茂無怪我如冲泳、大將柁山殿御船、其外餘船乗入候處、大將御船を可乗入様も無之、其時美濃殿諸船頭ニ被仰付候者、此分ニ而者地那も不討取鹿兒嶋江可登様も無之、於爰腹を切より外者なし、乍去別ニ可乗入所者無之哉と御尋被遊候處、右諸船頭共より、爰ニ而御腹被遊所ニ而者無御座候、是より運天と申湊大和之方ニ寄有之、此湊ハ那覇まで道法陸地ニ而式拾四里計有之、別而可寄所有之由申上候、※左あらハ其湊方可押寄と運天差而船を漕せ給ひしに、

夜半計、十七八之天女卷人、樺山殿御船ニ顔を出し、

(頭註) 此下升天祇園之洲祇園の社より少先磯ノ方江少キ社堂  
吾ハ此嶋之弁財天也、此節之軍ハ必御利運ニ而候そ、  
有之、安永の初敷と寛候、松岡伊右衛門依願參地の社江還宮有之

疑せ給ふなと被仰候而、樺山殿則御前之簀板に小刀ニ

而彫付被成候、其簀板鹿兒嶋江御持登被成候、運天之

湊船乗入、樺山殿船者一々可燒捨と被成下知候、船頭

之者共方數十艘之船者皆引揚可申候、其假召置候而者、

水主之者共船盜取乗逃可仕候、水主之者共先キ押立は

め草ニ仕候ハ、よもや乗逃成間敷と存候与申上候ヘ

ハ、其儀可然と被仰候而船皆々引置、御手之士六人、

七嶋勢式百四拾人召列、那覇之ことく御越被成、三月

之事成れハ、老若男女麥島之草取ニ集居候、此人々の

風情見驚、振ひわななき麥島之中ニ隱居候を、美濃殿

方七嶋諸船頭之内彦作ニ、あのもの共引出シ、一々切

捨可申と被仰付候、皆引出シ切捨申候、私刀者前方被

下候備前物ニ而候、拾二三人程切捨候得共、少シも痛

不申候与申上候、夫方那覇のことにく諸船頭先に立て御

通被成候、然者她那親方三千騎相隨、久米村の城江籠

り居、三日三夜手痛防戦と申せとも難叶、首里のこと

衆民浮又沈、開兵船至懸、益々破却皆狼藉、禍始那那一寸心、争知軒所有平

戈馬ニ而逃行を、小松助四郎と申者生年十八歳、她那

戈每持海洋油断多、才力過人亦向益、鹿王樓士一那那

遁さしと追掛、終に生捕、大將樺山殿御前に引參候、

其時國主方大和の大將江爲使可參ものハ無之哉と御尋

被成候へ共、人々勢に恐なして可參と申者無之、然者

百姓兄弟馬の草切に出居候而此由承り申出候ハ、我々

兄弟江被仰付儀候ハ、参り可申、乍去このなりニ而者

難成候、御支度を御借被成候ハ、可參由申出候付支

度被下、直ニ御意之趣を以、御勢は如何程御座候哉、

先以是迄御下嶋御太儀ニ存候、適之之事ニ御振舞可被

參候間、城へ御入可被成由ニ而、我々爲御使參申候と

申上候、美濃殿被仰候者、勢ハ壹万三千騎にて候、任

御使ニ可罷出と御返事ニ而候、右兩人之使江御取持と

して相州之式尺七寸之太刀被下候、御手之士六人召列

兩使先立、國主之城へ御入被遊候、其時七嶋物頭共御

供可仕と申候得共、軍ニ而者無之、振舞呼候処、多人

數不入儀と被仰、三日三夜の御酒宴ニ而候、左候而御

歸陳之節、平田殿方餘荒くあふなき御様子ニ而候よし、

殊之外立腹ニ而被仰候、其明時分樺山殿・平田殿七嶋

物頭惣勢召列、國主之城受取御向被成候、然処她那家

來共不圖切而出、狼藉仕候付、右國主方方御使者被遣

候、百姓兄弟御引出物被下置候太刀扶持、散々切廻し

に、庄内衆六七人被打候故、物頭共是に迷齒喫をなし

此時カ樺北秀存坊兼次、

戦死子琉球ト申傳トアリ、照存坊モアリ、鹿府士也

防戦候故、彦九郎・早左衛門其外拾一人、又水主も餘多被打候、相殘諸船頭共全腹立、她那家來并兄弟之百姓打捕、國主之城江眞先掛詰入、國司并三司官・池城親方悉生捕、御船江相乗せ她那一所ニ警固ニ而、如鹿兒嶋御登被成候、尤構置候石火矢も其時御持登被成候、然者慶長十四年酉(マユ)二月十五日、鹿兒嶋御出船被成、琉球悉ク御手ニ附、同五月鹿兒嶋御上國被遊候、鹿兒嶋來者老人も無怪我候、しかれハ其時國司御名者尚寧王と奉申、同年八月鹿兒嶋方江戸江御參勤之砌り、三司官・池城親方・她那親方其外相隨候由、其後她那を被召寄、口柄被聞召上候得者、諸船頭共草履片足計踏申候様申付候処、何れも相背双方共にはき申候ニ付、咎分として片膝を挾爲申由、然者申分段々筋違之故、御詮儀之上御仕置被仰付、川上泰助殿討手之由候、左候而七嶋式拾四人之物頭中江爲軍功、川邊郡老人ニ付知行高三百石宛被下候、

一右她那宿主鹿兒嶋下納屋町之内、桶屋折田嘉兵衛と申者ニ而候処、她那御仕置被仰付候節、跡目諸道具等御構不被成候而、其俣召置候故、諸道具等惣様右嘉兵衛取込、分限ニ爲相成由候、其後納屋町二町割ニ而、本

町者船津町、又老町者大黒町と申候、嘉兵衛事大黒町之内罷居、下町年行司役相勤候而、大小迄蒙御免候、

『惟新公御文拔書』

然者琉球の事、近年餘りわれまゝの振廻ニ而、大國の儀を專に用ひ、日本を思ひあなとり候て、すてにさし渡候使も受付す、面目を失ひ手をむなしく罷歸躰ニ候、然間陸奥守殿より江戸・駿河へ得御意られ候て、當春琉球へ人數さしわたされ候、もとより彼國も待もうけたる事ニ候条、ほこのはをあらそひ、なはと申ミなど日本を渡り口ニて候間、題目ニあいかこひ罷居由洩聞へ候まゝ、此度渡海之軍衆ニ我等申聞せ候へ、彼なはの湊へハかもわす、あらぬ所へ兵船をおし付候て、うしろを取破り候ハ、たとひ一旦はふせき戰といふとも、終に勝利を得候へんと申ツつる、其ことく別の湊へ舟をつけ人衆を卸、在々所々之家共を放火し責働候間、案中ながら彼國の者共、上を下にあへてさわき、何の手たても不罷成、ひたすら降參を乞、種々牝申候間、是非をもたすに不及、命を助け和睦仕たるよし候、夫々彼國の事嶋

／＼に至まで不殘相順へ、剩へ琉球帝王をはしめ、三司官其外頭立候衆を、當國之軍衆同前ニ薩州山川の津へ早着船のよし申きたり候、かくのごとく日本より他國に人衆御わたし候ことハ、あまねく承り不傳候、其上いこくの皇帝を吾朝へ渡し候儀ハ、ためしなき事と存候、誠にさらは万里をしのぎ、軍衆罷渡ル儀ニ候間、彼と云是と云、心遣あめやまに候処、思ひの外に打勝候事、わたくしならず神佛の御かこたい一、大御所様當 將軍様御威光故と存計候、殊更味方ハ多くも亡ひ申さず候、やうやく雜兵一二百人ほとも戰死仕候由、かやうにいこくをししたかへ候ハんニハ、戰死ハ纒なる事と存候、いつれもこゝもとのよろこひ、みしかき筆につくしかたく候、つゐてのおりからハかうの守殿へも此よしは、仰せ傳へ給ひ候へ云々、沈香一斤おくりまいらせ候、是式なから御おとつれのしるへをあらハす計候、よろつめてたくかしこ、』

(本文ハ×部分ニアリ、行間朱書ナリ)

于時慶長十四年枕山美濃殿琉球國御討取被成候軍如斯御座候、乍墨筆任筆書調、右條々如件、

『以上琉球入記』

660

「得能氏記録」

慶長十四年己酉

琉球國征代事、

二月二十六日、琉球國ハ古ヨリ(本カ)朝附庸ノ國ナリ、然

ルニ去ル永享年間、前將軍義教公、薩隅日三州ノ主島

津陸奥守忠國ガ忠功ヲ賞シテ彼國ヲ賜テヨリ、世々貢

船ヲ薩州ニ納ル、其船青雀黃龍ヲ盡キシカバ、此ヲ文

船ト号シケリ、然ルニ國王尚寧頃年背舊規、不進貢、

剩へ 家康公逆賊ヲ討亡シ天下ヲ平治シ、威ヲ海外ニ

振ヒ玉フトイヘトモ、敬服ノ禮ニ怠リシカバ、台命ヲ

島津陸奥守家久ニ降シ、渠ガ來朝ヲ催促シ玉フ、家久

使ヲ遣シ、書ヲ投シ再三無禮ヲ責トイヘトモ、肯テ順

ス、故ニ家久件ノ趣ヲ 家康公 秀忠公ニ言上シ、渠

ヲ討ント奉請、 兩公聞召シ則是ヲユルシ玉フ、依テ

家久兵ヲ起シ、樺山權左衛門久高ヲ首將トシ、平田太

郎左衛門増宗ヲ副將トシ、今日軍令ヲ兩將ニ諭ス、相

從輩ニハ本田伊賀・市來備後・同八左衛門・有馬次右

衛門・長谷場十郎兵衛・山鹿越右衛門・本多弥六・顯

娃主水・平田民部左衛門・伊地知四郎兵衛・白坂式部  
 ・毛利内膳・村尾源左衛門入道笑柄・柏原周防入道有  
 閑・伊集院半右衛門・佐多越後・東郷安房入道休伴・  
 兒玉四郎兵衛・川上掃部以下七百餘人、都合三千余人、  
 軍船百余艘ニ乘山川ノ津ニ順風ヲ待居タリ、  
 三月四日、百餘艘ノ軍船今曉纜ヲ解テ出船ス、時ニ家  
 久馬ニ乘リ小高所ニ登テコレヲ下知ス、義弘モ亦此ニ  
 來ル、久高・増宗先ヲ争テ出船シ、直ニ琉球ニ向テ出  
 帆ス、カクテ大島ニ著船シ、悉ク攻從ヘ徳ノ島ニ到シ  
 カハ、島民嚴ク拒キ戰フ、薩軍コレト戰ヒ、數百人ヲ  
 討殺シケレバ、島人大ニ恐レテ皆從服ス、永良部島ノ  
 者トモハ薩軍ノ威風ヲ聞ケルニヤ、薩軍著船スルト等  
 ク、草ノ風ニ偃カ如ク從ヒケリ、夫ヨリ軍船ヲ進テ、  
 琉球國運天ノ津ニ到リ□ニ國王尚寧カ弟具志頭并三司  
 官浦添・名護・謝那扁舟ニ棹シ來リ、西來院ヲ以テ降  
 ヲ請フトイヘトモ、眞僞明ナラサリシカハ、久高・増  
 宗船ヲ進メ愈武備ヲ整ヘ、大皖ノ津ニ到ントシケル処  
 ニ、彼ノ津口ニ鉄ノ鎖ヲ張ノ聞ヘ有シユヘ、船ヲ他所  
 ニ著、各陸地ニ上リケリ、  
 七月七日、是ヨリサキ久高・増宗ハ陸地ニ上ルト等ク

軍ヲ進メ、民屋ヲ放火シ、四月朔日、既ニ都門ニ攻入  
 ル、琉人等防ギ戰フトイヘトモ、薩軍勇ヲ震テ戰ヒ、  
 或ハ討捕、或撃走シメ、遂ニ王城首里天孫氏始テ築ク所ナ  
リ、故ニ首里ト云、ヲ圍ミ、急ニ攻破ントス、時ニ國王尚寧并ニ三司官等頻  
 リニ和睦ヲ乞フ、依テ久高・増宗コレニ應シカバ、同  
 五日、尚寧城ヲ下リケリ、久高則件ノ趣ヲ書認メ、飯  
 牟禮紀伊・貴嶋采女ヲ使トシテ家久ニ告シカバ、家久  
 則使者ヲ馳テ、家康公 秀忠公ニ言上ス、角テ久高  
 ・増宗ハ尚寧王・按司・三司官等ヲ擒ニシテ、五月五  
 日琉球ヲ出船シ、同二十五日、薩州鹿兒島ニ著シカバ、  
 家久則兩將士卒等ガ勤勞ヲ褒賞ス、家康公 秀忠公  
 ハ家久カ注進ヲ聞召シ、甚御感悅有テ台書ヲ以テコレ  
 ヲ稱美シ、其上 家康公ハ今日台翰ヲ以テ、琉球國ヲ  
 家久ニ賜ヒケリ、  
 有馬晴信破南蠻船事、  
 十二月九日、秀忠公有馬修理大夫晴信ニ被仰付、肥  
 前長崎ノ海上ニ於テ、南蠻船ヲ破ラシメ海底ニ沈サセ  
 ヲフ、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニ依リ補フ)